山口県埋蔵文化財センター調査報告　第106集

堀の内遺跡
川東遺跡
土井敷遺跡

2020

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

美祢市教育委員会

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第106集

堀の内遺跡
川東遺跡
土井敷遺跡

2020

公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

美祢市教育委員会

序

本書は、美祢市秋芳町岩永本郷に所在する堀の内遺跡・川東遺跡・土井敷遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。調査は、農業競争力強化農地整備事業　岩永本郷東地区の工事に先立ち、山口県美祢農林水産事務所から委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団と美祢市教育委員会が実施しました。

今回、堀の内遺跡の調査では、弥生時代と古墳時代の竪穴建物、古代・中世の溝、中世前期の掘立柱建物、近世の井戸等を検出し、弥生土器、石鏃や磨石等の石器、中世の中国産青磁や白磁等の高級品をはじめとする遺物が出土しました。この地に、弥生時代から近世まで継続的に集落が営まれたことが明らかとなり、中世には、地元有力者が存在したことを想定できました。

川東遺跡では、中世の建物の柱穴等を検出し、中世の土師器、青磁や白磁のほか、坩堝や鉱滓等の冶金と関係する遺物が出土しました。とりわけ、土師器の皿を複数枚入れた柱穴は、当時の祭祀や儀礼の様子をうかがわせるものです。

土井敷遺跡では、古代～中世の柱穴や土坑等を検出したほか、韓国産の陶磁器片等が出土し、この頃に集落が営まれていたことが明らかとなりました。

当地区での発掘調査は、これまで行われておらず、今回の調査によって、昔の人々の営みの様子を垣間見ることができたのは、貴重な成果といえます。

今後、この調査成果を、郷土史や文化財保護に対する理解、教育や文化の振興、学術研究等に広く活用していただければ幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の実施並びに本報告書の作成にあたり、御支援、御協力を賜りました関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人　山口県ひとづくり財団
理　事　長　　原　田　　尚

序

本書は、美祢市秋芳町岩永本郷地区所在の「堀の内遺跡」・「川東遺跡」・「土井敷遺跡」において、公益財団法人山口県ひとづくり財団と美祢市教育委員会が令和元年度に共同実施した発掘調査成果の報告書です。この発掘調査は農業競争力基盤整備事業に係るほ場整備工事に先立ち実施しました。

美祢市は、日本最大級のカルスト台地である秋吉台、東洋屈指の大鍾乳洞の秋芳洞など地質遺産に恵まれています。さらに、東大寺創建時の大仏の原料銅を産出した日本最古の国営銅山である長登銅山跡や、日本最大の無煙炭産出地で海軍も開発した大嶺炭田などの歴史遺産も豊富に所在します。これら地質遺産や歴史遺産を保全して教育やツーリズムに利用しており、市内全域が「Mine 秋吉台ジオパーク」として日本ジオパークに認定されています。

岩永本郷地区も多くの遺跡の存在が知られていましたが、発掘調査は行われていなかったため、詳細は不明確でした。そのため、本調査によって弥生時代から近世までの岩永本郷地区における人々の生活の実態が明らかになったことはきわめて意義深いものです。

本書が学術研究はもちろん、学校教育や社会教育などでも活用されて市民の郷土への愛着を醸成し、文化財の調査と保存に対しての理解が深まるきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御理解と御協力をいただきました岩永本郷地区の皆様、事業主体者である山口県美祢農林水産事務所など関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

美 祢 市 教 育 委 員 会
教 育 長　　中 本　　喜 弘

例　言

1　本書は令和元（2019）年度に実施した堀の内遺跡・川東遺跡・土井敷遺跡（美祢市秋芳町岩永本郷地内）の発掘調査報告書である。

2　調査は、公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県美祢農林水産事務所からの委託［契約名：農業競争力強化農地整備事業　岩永本郷東地区　埋蔵文化財発掘調査業務１号］を受けて、美祢市教育委員会と共同で実施した。

3　調査組織は、次のとおりである。

調査主体　公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター
美祢市教育委員会

調査担当　調査第二課主任　岡　田　裕　之
調査第二課主任　森　田　孝　一
調　　査　　員　竹　内　麻　美
文化財保護係長　山　根　謙　二（美祢市教育委員会）

4　本書の第１図は、山口県美祢農林水産事務所提供の地図を元に作成した。第２図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図「秋吉台」を、第３図は、国土地理院発行の５万分の１地形図「山口」をそれぞれ複製使用した。

5　本書で使用した方位は国土座標（世界測地系）の北、標高は海抜高度（m）である。

6　本書で使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell 方式による。

7　図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。

8　出土遺物実測図で、断面黒塗は須恵器を示す。

9　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SI：竪穴建物　SB：掘立柱建物　SK：土坑　SD：溝　SP：柱穴　SX：性格不明遺構

10　報告書作成の過程で、石器・石製品の石材鑑定については、赤﨑英里氏（山口県立山口博物館）に御教示いただいた。

11　資料の分析・鑑定に関して、放射性炭素年代測定（AMS 測定）と樹種同定を業者に委託し、その成果を第Ⅵ章に掲載した。

12　本書の作成・執筆は、岡田・森田・竹内が共同で行い、編集は岡田が行った。なお、執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ　岡田　　Ⅱ　森田・竹内　　Ⅲ　森田　　Ⅳ　岡田　　Ⅴ　森田　　Ⅵ　業者委託　　Ⅶ　岡田

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯と調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の概要 …… 2

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 4
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 5

Ⅲ　堀の内遺跡の調査成果 …… 9
　1　遺跡の概要 …… 9
　2　平成30年度堀の内遺跡の立会調査 …… 10
　3　平成27・29年度岩永本郷地区試掘調査の出土遺物 …… 12
　4　１区の調査 …… 13
　5　２区の調査 …… 17
　6　３区の調査 …… 21
　7　４区の調査 …… 24
　8　５区の調査 …… 30

Ⅳ　川東遺跡の調査成果 …… 37
　1　遺跡の概要 …… 37
　2　１区の調査 …… 39
　3　２Ａ区の調査 …… 40
　4　２Ｂ区の調査 …… 48
　5　３区の調査 …… 50

Ⅴ　土井敷遺跡の調査成果 …… 53
　1　遺跡の概要 …… 53
　2　１区の調査 …… 54
　3　２区の調査 …… 56

Ⅵ　自然科学分析 …… 60
　1　堀の内遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定） …… 60
　2　堀の内遺跡における樹種同定 …… 64
　3　川東遺跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定） …… 68
　4　川東遺跡における樹種同定 …… 71

Ⅶ　総　括 …… 73
　1　堀の内遺跡 …… 73
　2　川東遺跡 …… 74
　3　土井敷遺跡 …… 75
　4　「奈良火鉢」について …… 75
　5　岩永本郷地区の集落変遷 …… 76

挿図目次

堀の内遺跡
第１図　岩永本郷東地区調査範囲図 …… 1
第２図　岩永本郷地区周辺の遺跡分布 …… 4
第３図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡 …… 6
第４図　堀の内遺跡調査区設定図 …… 9
第５図　県立会１区遺構配置図 …… 10
第６図　県立会２区遺構配置図 …… 11
第７図　県１・２区土層断面図 …… 11
第８図　試掘調査出土遺物実測図 …… 12
第９図　１区東壁土層断面図 …… 13
第 10 図　１区遺構配置図 …… 14
第 11 図　１区竪穴建物 SI1 実測図 …… 15
第 12 図　１区溝 SD3 実測図 …… 16
第 13 図　１区柱穴 SP108 実測図 …… 16
第 14 図　２区南東壁土層断面図 …… 17
第 15 図　２区遺構配置図 …… 18
第 16 図　２区掘立柱建物 SB1・2、土坑 SK1 実測図 …… 19
第 17 図　２区柱穴実測図 …… 20
第 18 図　３区遺構配置図 …… 21
第 19 図　３区北東壁土層断面図 …… 21
第 20 図　３区井戸 SE1 実測図 …… 22
第 21 図　３区溝 SD1 実測図 …… 22
第 22 図　１～３区出土遺物実測図 …… 23
第 23 図　４区北東壁土層断面図 …… 24
第 24 図　４区遺構配置図 …… 25
第 25 図　４区土坑 (SK) 実測図 …… 26
第 26 図　４区溝 SD1・２実測図 …… 27
第 27 図　４区出土遺物実測図 …… 29
第 28 図　５区遺構配置図 …… 30
第 29 図　５区南東壁土層断面図 …… 31
第 30 図　５区竪穴建物 SI1 実測図 …… 32
第 31 図　５区井戸 SE1・土坑 SK1 実測図 …… 33
第 32 図　５区溝 SD1 実測図 …… 33
第 33 図　５区出土遺物実測図 …… 34
川東遺跡
第 34 図　川東遺跡調査区設定図 …… 37
第 35 図　１区遺構配置図 …… 38
第 36 図　１区南東壁・南西壁土層断面図 …… 39
第 37 図　１区出土遺物実測図 …… 40
第 38 図　2A 区遺構配置図 …… 41
第 39 図　2A 区東壁土層断面図 …… 42
第 40 図　2A 区土坑 (SK)・柱穴 (SP) 実測図 …… 44
第 41 図　2A 区出土遺物実測図 (1) …… 45
第 42 図　2A 区出土遺物実測図 (2) …… 46
第 43 図　2B 区遺構配置図 …… 47
第 44 図　2B 区南西壁土層断面図 …… 48
第 45 図　2B 区柱穴 SP13 実測図 …… 48
第 46 図　2B 区出土遺物実測図 …… 49
第 47 図　３区遺構配置図 …… 50
土井敷遺跡
第 48 図　土井敷遺跡調査区設定図 …… 53
第 49 図　１区遺構配置図 …… 54
第 50 図　１区柱穴 SP149 実測図 …… 55
第 51 図　２区遺構配置図 …… 56
第 52 図　２区東壁土層断面図 …… 57
第 53 図　２区土坑 SK1 実測図 …… 57
第 54 図　１・２区出土遺物実測図 …… 58
自然科学分析
第 55 図　暦年較正年代グラフ (参考) …… 63
第 56 図　堀の内遺跡の木材 …… 67
第 57 図　暦年較正年代グラフ (参考) …… 70
第 58 図　川東遺跡の木材 …… 72
第 59 図　川東遺跡出土の輪花形火鉢と「奈良火鉢」の例 …… 76
第 60 図　岩永本郷地区の集落分布と各時期の出土遺物 …… 77

表目次

堀の内遺跡
第１表　堀の内遺跡出土土器・陶磁器観察表 (1) …… 35
第２表　堀の内遺跡出土土器・陶磁器観察表 (2) …… 36
第３表　堀の内遺跡出土瓦・土製品観察表 …… 36
第４表　堀の内遺跡出土石製品・鉱滓観察表 …… 36
川東遺跡
第５表　川東遺跡出土土器・陶磁器観察表 (1) …… 51
第６表　川東遺跡出土土器・陶磁器観察表 (2) …… 52
第７表　川東遺跡出土土製品観察表 …… 52
第８表　川東遺跡出土土製品・鉱滓観察表 …… 52
土井敷遺跡
第９表　土井敷遺跡出土土器・陶磁器観察表 …… 58
第 10 表　土井敷遺跡出土石製品観察表 …… 59
自然科学分析
第 11 表　堀の内遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）…… 62
第 12 表　堀の内遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ^{3}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）…… 62
第 13 表　堀の内遺跡における樹種同定結果 …… 65
第 14 表　川東遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）…… 70
第 15 表　川東遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）…… 70
第 16 表　川東遺跡における樹種同定結果 …… 71

写真図版目次

堀の内遺跡
表紙　遺跡遠景（南から）
図版１－１　遺跡遠景（南西から）
１－２　遺跡遠景（南東から）
図版２－１　遺跡とその周辺（真上から、上が北）
２－２　遺跡全景（真上から、上が北東）
図版３－１　遺跡全景（北西から）①
３－２　遺跡全景（北西から）②
図版４－１　遺跡全景（南東から）
４－２　遺跡全景（南西から）
図版５－１　県立会１区調査後全景（南東から）
図版５－２　県立会１区西壁土層断面（東から）
図版６－１　県立会１区井戸完掘状況（南から）
６－２　県立会１区柱穴土器出土状況(南から)
図版７－１　県立会２区調査後全景（北東から）
７－２　県立会２区北西壁及び土坑 SK201 土層断面（南東から）
図版８－１　試掘調査出土遺物
図版９－１　１区調査後全景（南東から）
９－２　２区調査後全景（北西から）
９－３　１区北半調査後（南東から）
９－４　１区 SI ２完掘状況（南西から）

写真図版目次

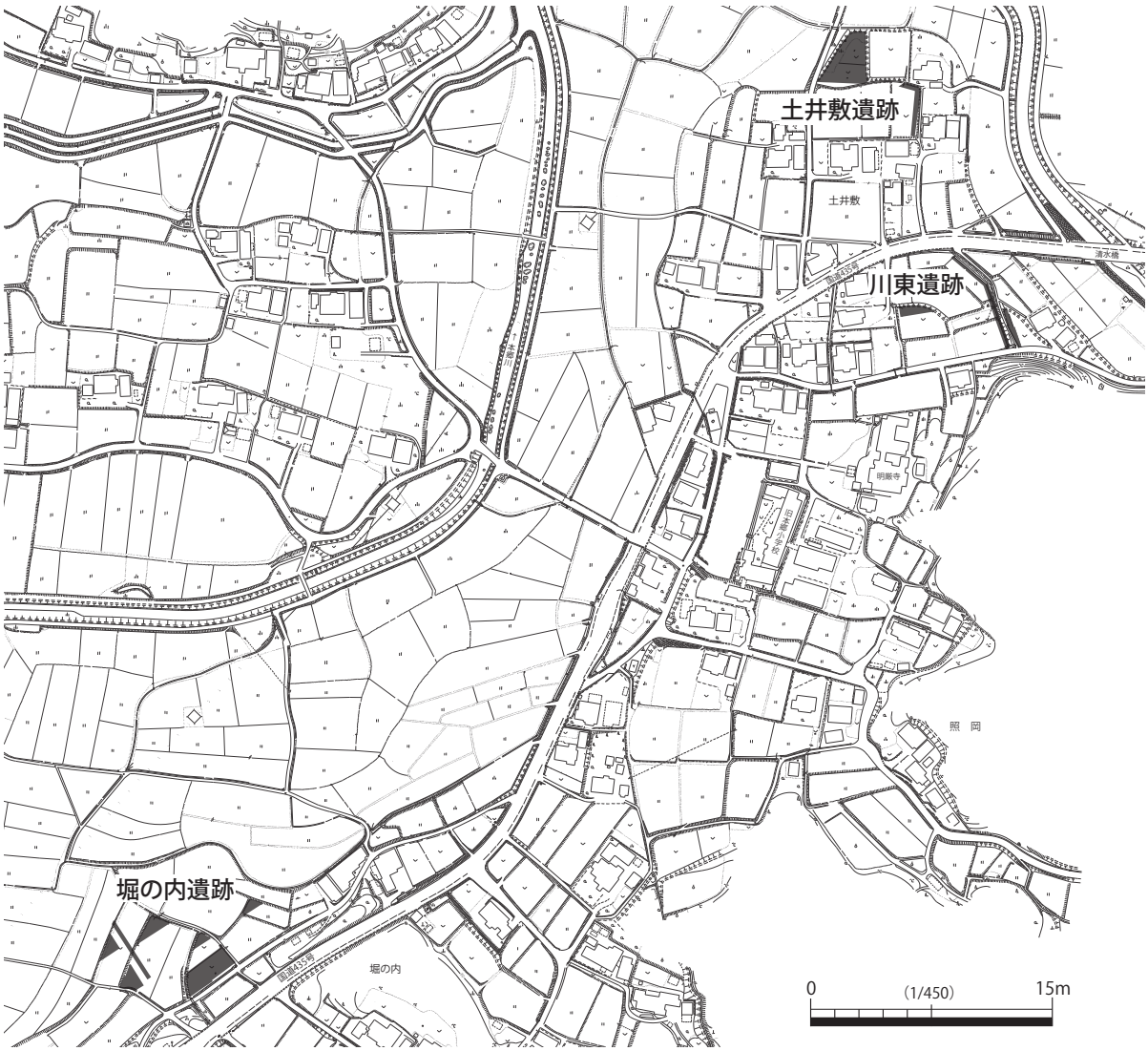
図版 9 －5　1区SI 2完掘状況（北西から）
図版 10 －1　1区SI 1検出状況（南西から）
10 －2　1区SI 1完掘状況（南西から）
図版 11 －1　1区SI 1完掘状況（南東から）
11 －2　1区SI 1完掘状況（北から）
図版 12 －1　1区SD 3完掘状況（南西から）
12 －2　1区SP108 遺物出土状況(北東から)
図版 13 －1　2区調査後全景（南西から）
13 －2　2区南東壁土層断面（北から）
13 －3　2区南東壁土層断面（西から）
13 －4　2区調査後全景（北から）
図版 14 －1　2区中央部完掘状況（北西から）
14 －2　2区SK 1検出状況（西から）
14 －3　2区SK 1土層断面（南から）
14 －4　2区SK 1完掘状況（南から）
14 －5　2区SP48 土器出土状況（東から）
図版 15 －1　2区SP79 土器出土状況（北東から）
15 －2　2区SP143 土器出土状況(南東から)
図版 16 －1　3区調査後全景（南西から）
16 －2　3区調査後全景（北西から）
図版 17 －1　3区北東壁土層断面（南西から）
17 －2　3区SE 1検出状況（東から）
17 －3　3区SE 1土層断面（東から）
17 －4　3区SE 1完掘状況（西から）
17 －5　3区SD 1完掘状況（東から）
17 －6　3区SD 1土器出土状況（北から）
17 －7　1区出土遺物
図版 18 －1　1・2区出土遺物
図版 19 －1　2・3区出土遺物
図版 20 －1　4区調査後全景（北から）①
20 －2　4区調査後全景（南西から）
20 －3　4区調査後全景（北から）②
図版 21 －1　4区SK 1検出状況（南東から）
21 －2　4区SK 1土層断面（南東から）
21 －3　4区SK 1掘り下げ状況（南東から）
21 －4　4区SK 3検出状況（南東から）
21 －5　4区SK 3土層断面（南西から）
21 －6　4区SK 4検出状況（東から）
21 －7　4区SK 4土層断面（西から）
21 －8　4区SK 4完掘状況（西から）
図版 22 －1　4区SK 5木製品出土状況(南東から)
22 －2　4区SK 5土層断面（南東から）
22 －3　4区SK 5完掘状況（東から）
22 －4　4区SK 6土層断面（南東から）
22 －5　4区SK 6完掘状況（南東から）
図版 23 －1　4区SK 6瓦出土状況（南東から）
23 －2　4区SD 1完掘状況（北西から）
23 －3　4区SD 1完掘状況（南東から）
図版 24 －1　4区出土遺物（1）
図版 25 －1　4区出土遺物（2）
図版 26 －1　4区出土遺物（3）
図版 27 －1　5区調査後全景（南西から）
27 －2　5区調査後全景（北西から）
図版 28 －1　5区調査後全景（北東から）
28 －2　5区SI 1・2検出状況（南東から）
図版 29 －1　5区SI 1・2完掘状況（南東から）
29 －2　5区SI 1・2完掘状況（南西から）
図版 30 －1　5区SI 1・2完掘状況（北東から）
30 －2　5区SI 1・2検出状況（南西から）
30 －3　5区SI 1・2検出状況（北東から）
30 －4　5区SE 1完掘状況（南東から）
30 －5　5区SE 1（主要部）完掘状況（南東から）
図版 31 －1　5区SK 1検出状況（南西から）
31 －2　5区SK 1木炭検出状況（南西から）
31 －3　5区SK 1木炭検出状況（北東から）
31 －4　5区SK 1完掘状況（北東から）
31 －5　5区SD 1完掘状況（南東から）
31 －6　5区SD 1完掘状況（西から）
図版 32 －1　5区出土遺物（1）
図版 33 －1　5区出土遺物（2）
川東遺跡
表紙　遺跡遠景（北東から）
図版 34 －1　遺跡遠景（東から）
34 －2　川東遺跡と土井敷遺跡（真上から、上が北）
図版 35 －1　遺跡全景（真上から、上が北）
35 －2　遺跡全景（東から）
図版 36 －1　1区全景（真上から、上が北）
36 －2　2A区全景（真上から、上が北東）
図版 37 －1　1区調査後（東から）
37 －2　1区調査後（西から）
37 －3　1区中央部調査後（南から）
図版 38 －1　1区西壁土層断面（東から）
38 －2　1区南壁土層断面（北から）
38 －3　1区SP20 土層断面（北から）
38 －4　1・2区出土遺物
図版 39 －1　2A区調査後（南から）
39 －2　2A区南側調査後（北から）
39 －3　2A区北側調査後（南から）
39 －4　2A区北側調査後（北西から）
図版 40 －1　2A区北東壁土層断面（北西から）
40 －2　2A区北東壁土層断面（南から）
図版 41 －1　2A区北西部遺構完掘状況（北西から）
41 －2　2A区SK 7完掘状況（南西から）
図版 42 －1　2A区SK 7土層断面（南西から）
42 －2　2A区SP13 根石出土状況(南東から)
42 －3　2A区SP 8根石出土状況（東から）
図版 43 －1　2A区SP32 土器出土状況(南西から)
43 －2　2A区SP58 土器出土状況(南東から)
43 －3　2A区SP58 根石出土状況(南東から)
図版 44 －1　2A区出土遺物（1）
図版 45 －1　2A区出土遺物（2）
図版 46 －1　2A区出土遺物（3）
図版 47 －1　2A区出土遺物（4）
図版 48 －1　2B区調査後（南から）
48 －2　2B区調査後（北東から）
48 －3　2B区西壁土層断面（北東から）
図版 49 －1　2B区SP13 土器出土状況（北から）
49 －2　3区調査後（南から）
49 －3　3区調査後（北から）
図版 50 －1　2B区出土遺物
土井敷遺跡
表紙　遺跡全景（南西から）
図版 51 －1　遺跡全景（東から）
51 －2　遺跡全景（南から）
図版 52 －1　遺跡全景（真上から、上が北）
52 －2　1区全景（真上から、上が東）
図版 53 －1　1区調査後（南西から）
53 －2　1区調査後（北から）
図版 54 －1　1区調査後（南東から）
54 －2　1区東側調査後（南から）
54 －3　1区SP96 根石出土状況（西から）
54 －4　1区SP149 土器出土状況（南から）
54 －5　1区SP149 土器出土状況（東から）
図版 55 －1　2区調査後（北から）
55 －2　2区調査後（南から）
55 －3　2区調査後（東から）
55 －4　2区東壁土層断面（南西から）①
55 －5　2区東壁土層断面（南西から）②
図版 56 －1　2区SK 1・SK 2完掘状況（東から）
56 －2　2区SK 1土層断面（西から）
56 －3　2区SK 1完掘状況（東から）
56 －4　2区SK 1・SK 2完掘状況（西から）
56 －5　2区SK 1完掘状況（西から）
図版 57 －1　1・2区出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯と調査の概要

1　調査に至る経緯（第１図）

山口県美祢農林水産事務所では、美祢市秋芳町岩永本郷地内において、農地の生産性等の向上を図り、農業の持続可能な経営構造を確立する目的で、農業競争力強化農地整備事業として農地整備事業（中山間地域型）を進めている。事業の実施に先立ち、山口県教育委員会では、平成 27・29 年度に、対象地内の埋蔵文化財の取扱いに係る情報を得るために試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から中世にかけての柱穴や土坑等を検出し、弥生土器、須恵器、土師器や石器等が出土したため、工事によって影響を受ける範囲について、記録保存の措置をとることが必要となった。このうち、平成 30 年度の施行実施で影響を受ける、堀の内遺跡の約 190㎡については、平成 30 年９月から 10 月にかけて、山口県教育委員会が工事立会を実施している。

山口県美祢農林水産事務所の委託を受けた公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターと、美祢市教育委員会では、令和元（2019）年度に、堀の内遺跡（800㎡）、川東遺跡（420㎡）、土井敷遺跡（870㎡）の計 2,090㎡について、合同で発掘調査を実施した。



第１図　岩永本郷東地区調査範囲図

なお、各遺跡の調査区については、堀の内遺跡では５区（１～５区）に、川東遺跡では４区（１・２Ａ・２Ｂ・３区）に、土井敷遺跡では２区（１・２区）に、それぞれ分けて調査を実施した。

２　調査の概要

委託契約締結を受けて、４月１日から調査準備を開始し、４月 17 日に山口県美祢農林水産事務所との初回業務打合せ及び現地協議を行った。４月 18 日に、堀の内遺跡の一部（１区：90㎡）について、センター担当職員の立会いのもと、先行して重機による表土除去を実施し、４月 19 日から５月 10 日にかけて、センター担当職員による遺構掘り込み作業と写真撮影や遺構実測等の記録を行った。

その後、調査準備等を進め、６月 14 日に旧本郷小学校跡地に仮設事務所・仮設トイレ等を設置し、６月 18 日に仮設事務所への電気配線工事、６月 19 日に仮設水道工事を順次行った。６月 21 日には、旧本郷小学校（ほんごうファーム）で発掘作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。

現地調査は堀の内遺跡から開始し、６月 21 日に堀の内遺跡の駐車場整備、６月 24 日から 26 日にかけて、重機による表土除去作業（Ⅰ期）を実施した。７月２日に、発掘作業員を稼動して、発掘器材の搬入を行い、翌日から環境整備に着手した。７月４日に、堀の内遺跡４区の人力による壁面清掃作業と遺構検出作業に着手し、７月８日から暗渠の掘り込み、７月 11 日から遺構の掘り込みを開始した。また、７月４日から５日にかけて、堀の内遺跡の業者委託による国土座標杭設置（Ⅰ期）を実施している。その後、７月 30 日から２区、８月８日から３区、９月４日から５区について、それぞれ人力による壁面清掃、遺構検出作業、遺構掘り込みの順で作業を進めていった。調査員による遺構の実測や写真撮影等の記録作業についても随時行った。９月 19 日には、空中写真撮影及び空中写真測量（Ⅰ期）を実施し、土層実測等を行った後、９月 30 日に、堀の内遺跡の現地調査を終了した。なお、７月 24 日には、美祢市教育委員会主催のインターンシップの一環として、山口県立美祢青嶺高等学校２年生の３人が、堀の内遺跡で発掘体験を行った。

重機による表土除去（土井敷遺跡）

作業風景（堀の内遺跡）

川東遺跡と土井敷遺跡の重機による表土除去（Ⅱ期）は、土井敷遺跡では、７月９日から 10 日にかけて耕作土除去、７月 24

日から 25 日にかけて盤土以下除去を実施し、川東遺跡では、7 月 26 日から 31 日かけて耕作土及び盤土以下除去を実施した。その後、8 月 20 日に川東遺跡に仮設トイレを設置した。8 月 22 日には、川東遺跡と土井敷遺跡の業者委託による国土座標杭設置（Ⅱ期）を実施した。人力による発掘作業は、9 月 24 日から川東遺跡の 1 区、9 月 25 日から 3 区と 2 B区、9 月 26 日から 2 A区について、それぞれ人力による壁面清掃、遺構検出作業、遺構掘り込みの順で作業を進め、10 月 9 日に川東遺跡での掘り込み作業を終了した。

作業風景（川東遺跡）

作業風景（土井敷遺跡）

その間、10 月 2 日に堀の内遺跡駐車場の仮設トイレを土井敷遺跡に移動した後、10 月 10 日から土井敷遺跡に着手し、2 区の人力による壁面清掃、遺構検出作業、遺構掘り込みの順で作業を進め、10 月 15 日から 1 区でも同様の人力作業を行い、10 月 28 日に、土井敷遺跡の掘り込み作業を終了した。川東遺跡・土井敷遺跡ともに、調査員による遺構の実測や写真撮影等の記録作業についても随時行った。11 月 5 日から川東遺跡、土井敷遺跡の順に空撮前清掃を行い、11 月 7 日に川東遺跡の空中写真撮影と、土井敷遺跡の空中写真撮影及び空中写真測量（Ⅱ期）を実施した。

11 月 14 日には発掘器材を撤収し、発掘作業員の稼動を終了した。その後、調査員のみで、川東遺跡の遺構配置図の作成のほか、補足の掘り込みや実測等の記録作業を進め、11 月 22 日に終了した。11 月 21 日に仮設水道の撤去、11 月 22 日に仮設電気の撤去の後、11 月 26 日には仮設事務所及び仮設トイレ等の撤収を行った。11 月 26 日に山口県美祢農林水産事務所の立会いのもと、現地引き渡しを行い、すべての現地調査を終了した。

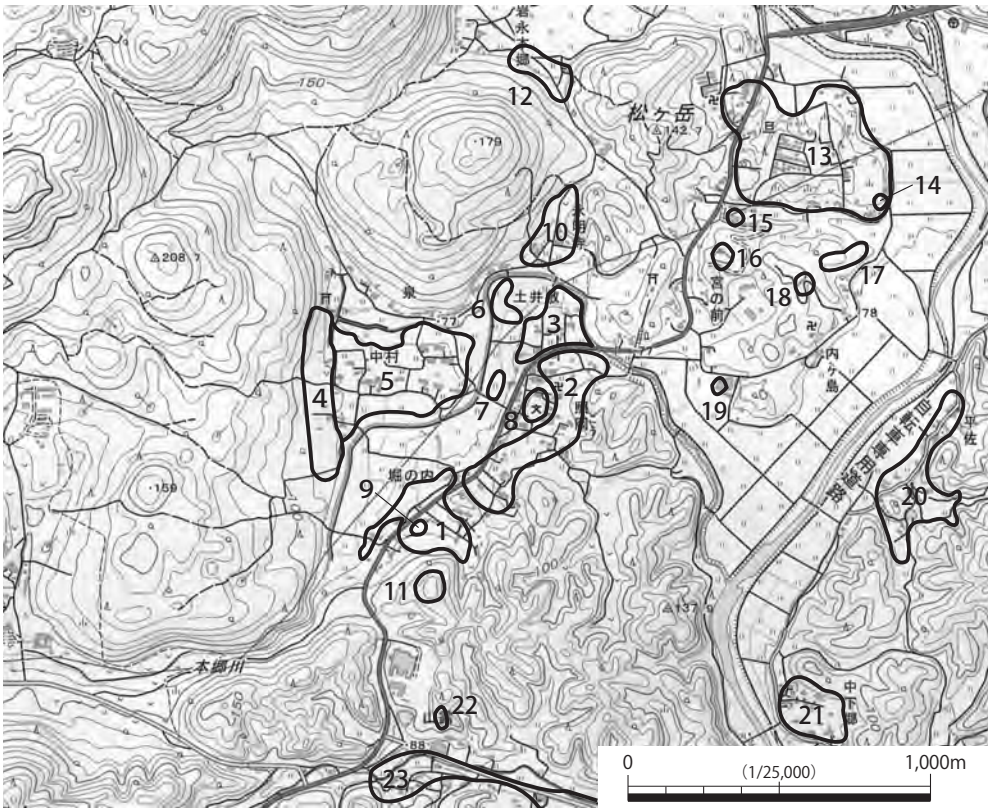
出土遺物については、現地調査中から、随時山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄、接合、復元等の整理作業を進め、遺構図面や写真等の記録類の整理も進めていった。現地調査終了後、これらの作業を本格化するとともに、遺構のデジタルトレースや遺物の写真撮影、原稿執筆等を行い、報告書を刊行するに至った。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

堀の内遺跡、川東遺跡、土井敷遺跡の３つの遺跡は、山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。美祢市は山口県の中央やや西寄りの内陸にあり、北部に中国山地の西端、長門山地が広がる。また、中央部には我が国最大のカルスト台地秋吉台があり、秋芳町域南部には小起伏丘陵地の秋吉丘陵がある。

岩永本郷は市域の中央南寄りにあって、秋吉台の南縁、厚東川の右岸側に位置する。岩永本郷全域はおおよそ南北７㎞、東西 3.5㎞の範囲にわたるが、上記の３遺跡は、いずれも岩永本郷の中でも東南域にある石灰岩地域に形成された沖積平野、秋吉台の縁辺ポリエと呼ばれる南北約１㎞、東西約 0.9 ㎞の小盆地（本郷盆地、岩永ポリエ）内にある。盆地の北西域外縁は標高約 200 m前後、南東域は標高 150 m前後の丘陵があり、盆地床は標高約 73 ～ 74 mである。地質的には、盆地の中央部を境に北西域と南東域とでは大きく異なる。北西域は秋吉台の一角をなす石灰岩層からなる岩永台があり、古生代前期石灰紀から中期ペルム紀にかけて形成された秋吉石灰岩と称するものである。そのため、岩永盆地の北西部丘陵には横穴や竪穴、竪横複合穴など多種の石灰洞があり、その丘陵縁辺には湧水地（大番の池、泉、水神様など）も存在する。一方、盆地の南東域は主に砂岩、チャートからなる大田層群で、所々に石灰岩レンズを挟んでいる。前期石灰紀から中期ペルム紀にかけて形成されたもので[註1]、秋吉石灰岩とは衝上断層で接している。また、盆地内低地の土壌は砂礫土壌である。河川は、南西から北東方向に向かって盆地中央部を貫流する厚東川支流の本郷川があり、その支流である岩永台の南裾部に水源（カルスト湧水）を有する泉川が北縁を東方に流れ、盆地内北側で本郷川に合流している。なお、気候は内陸性気候である。



1 堀の内遺跡
（岡部氏居館跡を含む）
2 川東遺跡
3 土井敷遺跡
4 的場遺跡
5 道場・中村遺跡
6 仮畑遺跡
7 国木遺跡
8 本郷小学校遺跡
9 堀の内石棺群
10 永明寺遺跡
11 向山城跡
12 下水田遺跡
13 旦遺跡
14 旦１号横穴墓
15 旦２号横穴墓
16 旦箱式石棺群
17 内ケ島遺跡
18 内ケ島箱式石棺群
19 三戸遺跡（三戸石棺）
20 平佐遺跡
21 中下郷遺跡
22 山露横穴墓
23 山露遺跡

第２図　岩永本郷地区周辺の遺跡分布

2　歴史的環境

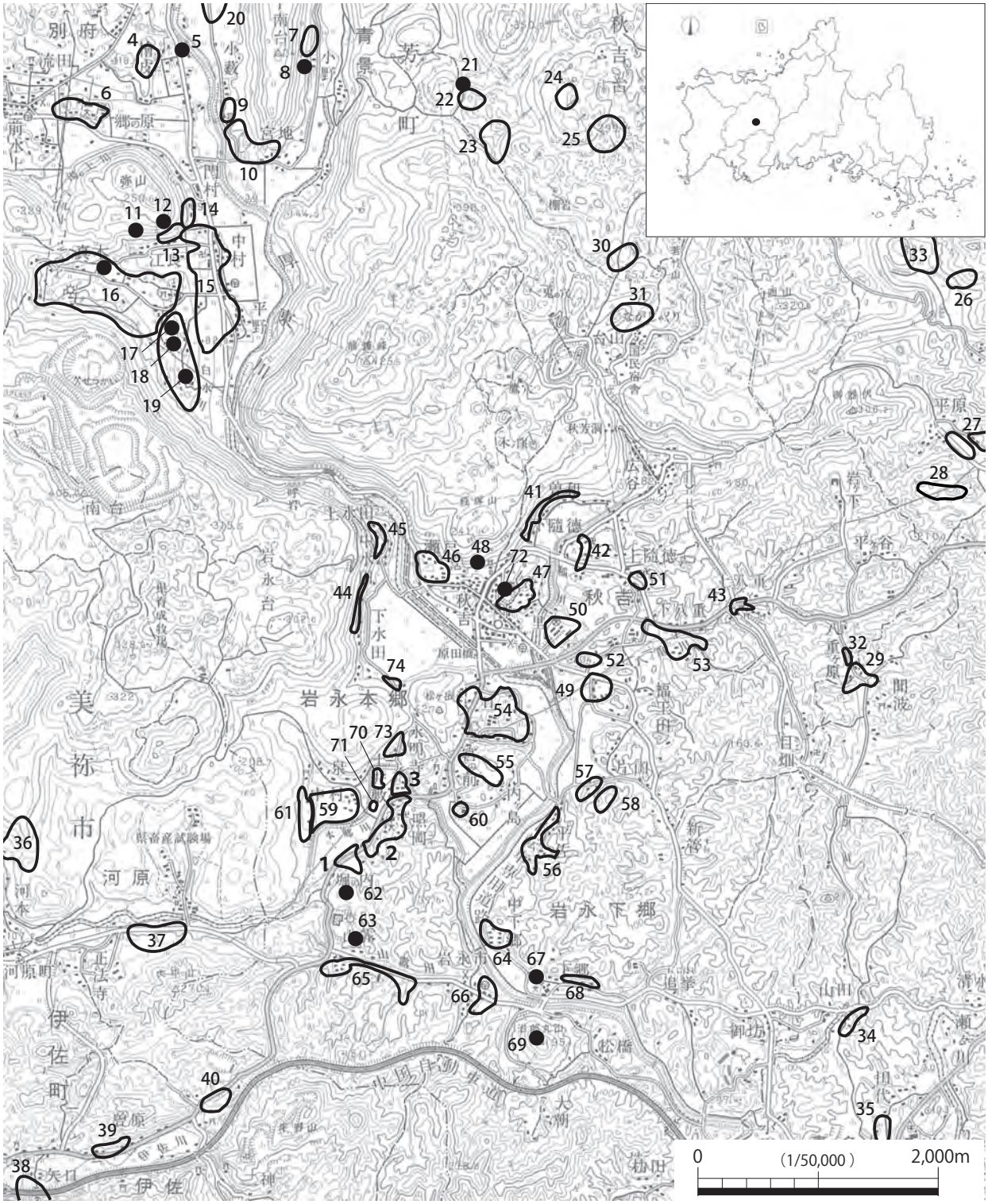
岩永本郷周辺を広域的にみると、北部の秋吉台上には秋吉台遺跡群があり、採集された石器から、旧石器時代から人の活動があったことが察せられる。縄文時代には遺跡数が多くなるが、現時点で集落跡はみつかっていない。弥生時代になると、瀬戸遺跡や松ケ迫遺跡など、厚東川流域沿いやポリエ縁辺の丘陵、段丘上を中心に集落を営み、その終末期には旦箱式石棺墓での台状墓の存在から個人首長の萌芽が窺えるようになる。古墳時代に至ると、国秀遺跡のように大きな集落を形成するところも出現し、大里古墳や秋吉八幡宮古墳にみるように、後期には在地豪族が台頭してくる。古代は美祢郡に属し、この地域特有の地質に絡んで、長登銅山跡や平原第二遺跡など各所で金属生産が盛んに行われる。中世においては大内氏の支配下に属し、近世には毛利氏の萩藩領、美祢宰判に属する。

以下、本郷盆地（岩永ポリエ）内を中心に述べる。まず、旧石器時代の遺跡は盆地内のみならず、岩永本郷全域及び近傍では皆無である。この地で最も古い時期の遺物は縄文時代早期で、盆地西側の丘陵から盆地床中央部まで伸びる舌状丘陵の先端、低段丘上にある中村・道場遺跡から楕円押型文土器が出土している[註2]。また、同遺跡からは、詳細な時期を特定していないが、縄文時代に多用された形態の石鏃が多数表採されており、今回の堀の内遺跡の調査でも出土している。

弥生時代になると遺跡数は急増し、これまで盆地内では、西側丘陵裾部域にある的場遺跡、東側丘陵裾部の本郷小学校遺跡、川東遺跡で弥生土器が採集されている。このたびの堀の内遺跡の調査で竪穴建物等の遺構を検出したが、1962（昭和 37）年、その南側に位置する国道 435 号線の堀の内バス停留所東側において、堀の内石棺群と称する、棺材に石灰岩を用いた箱式石棺がみつかり、その後も 1 基が国道法面で確認された（現在は道路拡張工事後で所在不明）。また、盆地外周辺では、北東側に位置する丘陵に、弥生時代の遺物散布地として内ケ島遺跡や旦遺跡が、埋葬遺跡として内ケ島箱式石棺群や旦箱式石棺群があり、丘陵南端の三戸遺跡では後期後半の壺棺墓が出土している。

古墳時代の遺跡は、今のところ盆地内で古墳は周知されていないが、前出の的場遺跡内の西北端では耳環や、鉄鏃とみられる鉄器が採集されており、古墳が存在した可能性がある。盆地外近傍では、北東側の内が島丘陵の南端部において、1980（昭和 55）年、工場建設に伴う造成工事中に、三戸石棺と称する、鉄鏃を副葬した古墳時代前半の箱式石棺が発見されている（現在、岩永八幡宮境内に移築保存）。同じく、盆地外北東側の旦丘陵には、旦 1 号横穴墓、旦 2 号横穴墓があったとされ、とくに前者は、1965（昭和 40）年、土砂採取中にみつかり、土師器壺、鹿角柄付き鉄製刀子、鉄鎌が出土したとの報告がある。また、堀の内遺跡から南方約 800 mに位置する比高 20 mの丘陵部中腹には、現在も玄室が確認できる山露横穴墓があり、1955（昭和 30）年の発見時には、須恵器や鉄製刀子、人骨片が出土している。さらに埋葬遺跡以外では、1995（平成 7）年に、今回、堀の内遺跡の調査で、古墳時代の竪穴建物を検出した地点から東方約 100 mに位置する国道の法面において、時期不詳ながら、竪穴建物の一部が確認できたという。なお、古墳時代のものか古代のものかを確認していないが、須恵器の散布地として、本郷小学校遺跡、的場遺跡、堀の内遺跡、川東遺跡、道場・中村遺跡、永明寺遺跡が周知されており、盆地内の主に丘陵裾部の各所、広範囲に散在している。

古代律令制下において、この地域一帯は、長門国美祢郡五郷の 1 つで、厚狭郡久喜郷に属したとの説がある。地名にある郷は、古代の郡郷制に由来するものかは不明であり、また岩永の平地には条



1 堀の内遺跡　2 川東遺跡　3 土井敷遺跡　4 大目遺跡　5 檜皮遺跡　6 岡台遺跡　7 厄神遺跡　8 厄神石棺
9 小藪遺跡　10 宮地遺跡　11 バクチ穴遺跡　12 観音洞遺跡　13 江良遺跡　14 門村遺跡　15 中村遺跡　16 真木遺跡
17 ヒメヅカ　18 共栄経塚　19 共栄の塚　20 大領田遺跡　21 出来水遺跡　22 小郡久保遺跡　23 船が窪遺跡　24 笠木遺跡
25 久保遺跡　26 長登銅山烏帽子岩山遺跡　27 平原第Ⅱ遺跡　28 平原遺跡　29 聞波遺跡　30 見原遺跡　31 長ジャクリ遺跡
32 八重ヶ原遺跡　33 水溜 (大田) 遺跡　34 山田遺跡　35 徳坂遺跡　36 河原銅山跡　37 正法寺遺跡　38 宗国遺跡
39 下曽原遺跡　40 上曽原遺跡　41 曽和遺跡　42 下随徳遺跡　43 八重遺跡　44 中水田遺跡　45 水田遺跡　46 瀬戸遺跡
47 大里遺跡　48 秋吉八幡宮古墳　49 福王田遺跡 B 地区　50 松ケ迫遺跡　51　随徳遺跡　52 福王田遺跡 A 地区
53 下八重遺跡　54 旦遺跡　55 内ケ島遺跡　56 平佐遺跡　57 片山遺跡　58 鳥栖遺跡　59 道場・中村遺跡
60 三戸遺跡 (三戸石棺)　61 的場遺跡　62 向山城跡　63 山露横穴墓　64 中下郷遺跡　65 山露遺跡　66 岩永市遺跡
67 太郎丸城跡　68 下郷遺跡　69 治郎丸城跡　70 仮畑遺跡　71 国木遺跡　72 大里古墳　73 永明寺遺跡　74 下水田遺跡

第３図　遺跡の位置と周辺の主な遺跡

里が存在したとする説もあるが今日確証を得ていない。埋蔵文化財に関しては、盆地内の古代の遺物は、このたび堀の内遺跡、川東遺跡の調査で須恵器が出土したが、盆地外周辺では、川東遺跡から東方に約 500 m、本郷川左岸に位置する三戸遺跡でも古代の須恵器、緑釉陶器が出土している。

中世になると、この地は岡部氏の所領地となる。岡部氏は武蔵七党の 1 つである猪俣党に属し、猪俣忠兼の子忠綱が岡部六郎大夫を称した。岡部忠澄の孫（一説には次男）の景澄は、1220（承久 2）年に長門国岩永地頭職に補任され、下向して岩永本郷の堀ノ内に居館を構えたといわれ、後に大内氏に仕えている。1551（天文 20）年、大内義隆が陶晴賢の反乱で山口を追われた際に、領主の岡部右衛門隆景が即心庵（岩永八幡宮社坊。盆地内中央部の中村に所在した。現在は廃寺）で接待している。当所領は、大内氏滅亡後、毛利氏の支配下に入り、大内義隆の重臣であった内藤興盛の子、隆春に与えられた。隆春の姉は毛利輝元の生母であり、輝元の祖母にあたる隆春の母はこの地に移り住んで岩永の大方と呼ばれ、1604（慶長 9）年、この地で没している。なお、「堀の内」の地名の由来となったと思われる岡部氏の居館は、向山の北側丘陵裾部から谷部にかけて存在したとされ、現状は耕地等になっている。館跡の範囲は東西 50 m、南北 30 mとの説があり、遺構として石垣、堀が設けられていたとするが、1887（明治 20）年頃、県道拡幅のため幅二間の堀は埋められ、1953（昭和 28）年の工事では、大半が破壊されたといわれる。ただし、少なくとも 1963（昭和 38）年頃までは、道路に沿って小溝を残し、館跡の北方に「堀の跡」と称する土塁の一部が現存している。加えて、岡部氏の城跡として、居館跡の後背にある向山（城山）の山頂（標高約 142.1 m、比高約 60 m）に向山城跡（別称、岡部城跡）があり、今日、遺構が部分的に残るとされるが、詳細は不詳である。

また、中世の埋蔵文化財包蔵地としては、今回調査を行った堀の内遺跡（岡部氏館跡を含む）及び川東遺跡があるほか、盆地内北部の谷部に立地する永明寺遺跡で遺物が採集されている。中世におけるこの地域での社寺の動向としては、現在、盆地の東を画する丘陵部に所在する岩永八幡宮が、1562（永禄 5）年に本郷三戸山から移されている。本宮は旧郷社で、715（霊亀元）年に日向国から勧請されたといわれ、はじめに朸田河内森にあったが、後に下郷才ヵ尾、三戸山に移動していた。

近世における岩永本郷は、1600（慶長 5）年の検地帳に「岩永郷」、同 15 年の検地帳には「岩永村」の名で称されている（岩永本郷と岩永下郷の両域を含む）。慶長 15 年の検地帳には、村高 2,663 石余、田 179 町で高 2,089 反余、畠 101 町 5 反余で高 422 石高余、百姓屋敷 224 軒等とあり、その後、天保年間には、村高 3,051 石余、田は 253 町 8 反余、畠 143 町 3 反余、409 軒となっている。また、蔵入地及び給領地は、1829（享保 14）年にそれぞれ 3,018 石余、1,871 石余、天保 13 年には 3,494 余石、1,672 石余で、藩の米蔵は岩永村全域に 6 か所あり、本郷盆地内では土井敷に設置されていた。ただし、後述するように、現在の字土井敷の場所とは異なる可能性がある。

なお、近世の本郷盆地の歴史的環境で看過できないものに赤間ヶ関街道がある。本街道は、萩藩が江戸時代初めに、萩と赤間ヶ関（下関）を結ぶために整備した道で、北浦道筋、北道筋、中道筋があるが、とくに本盆地の南東側丘陵裾部を北東－南西方向に通る中道筋は、萩と下関とを最短ルートで結び吉田往還ともいわれ、幕末には、吉田松陰や高杉晋作等の多くの志士がこの道を利用している。このたびの川東遺跡の調査区 3 区及び堀の内遺跡 4 区のすぐ南側にある道路はその街道を踏襲する道である。なお、岩永本郷の地は秋吉宿と河原宿の間にあって、宿場は置かれていない。

社寺に関しては、本郷盆地の南東側の字照岡に現存する、浄土真宗本願寺派の明巌寺が 1656（明暦２）年に開創している。同じく照岡には、創建年代や寺歴が不詳である曹洞宗の蓮華寺が、1615（元和元）年に存在した記録があるが、その後、いつしか廃絶する。また堀の内には、正徳年中に開創した浄土真宗本願寺派の大乗寺が、1870（明治３）年まで存続している。なお、創建時期は不明であるが、盆地内及び周辺丘陵部の各所には、荒神社、秋葉社、水神様、祇園社、観音堂、大師堂、金毘羅社、天満宮などの小社が点在し、今回の堀の内遺跡の調査区南側近郊には荒神社があり、川東遺跡３区南東端近くの丘陵裾部には、現在、三戸八幡宮が祀られている。

ちなみに、1862（文久２）年頃に作成されたとする『美禰郡細見繪圖』をみると、本郷盆地内の土井敷のところには、「河野孫右衛門の知行所入交り」と書かれ（畔頭、石高 87 石３計４升３合）、とくに川東遺跡の北側辺りと推定される箇所には御米倉が記されている。また堀の内には、桂隼人の知行とあり（畔頭、石高 129 石９計４升１合）、同地には荒神社や前述の大乗寺も載っている。

近現代になると、江戸時代から続いた岩永村は、1879（明治 12）年、岩永本郷村と岩永下郷村に分かれ、戸長役場は６年間、本盆地内の字土井敷に置かれた（なお、現在、岩永公民館に保管されている明治 20 年の地籍図によると、当時の字名「土井敷」は、今回、川東遺跡として発掘調査を実施した場所周辺を指し、今の土井敷は「後土井敷」と称されている。一方、堀の内遺跡として今回調査した地点は、当時は堀の内とは別字名で、「下堀の内」と称しており、時代による変遷がみられる）。なお、1883（明治 16）年の村の戸数は 228 戸、人口は 1,024 人である。1889（明治 22）年、再び両村は合併して岩永村に戻り、村役場は 1897（明治 30）年まで本盆地の照岡の地に設置された。1955（昭和 30）年の町制施行で、岩永村は秋吉村、別府村、共和村と合併して秋芳町となり、2008（平成 20）年、平成の大合併により、秋芳町は旧美祢市、旧美東町と合併して新・美祢市となった。

現在の本郷盆地は、盆地の南縁を国道 435 号線が東西に通っており、周辺地域間を結んでいる。産業は古来同様に農業を主とした地域であるが、丘陵縁辺では秋芳町特産の梨の栽培も行っている。なお、本郷地区における人口は、2020（令和２）年１月末時点 520 人で減少化傾向にあり、2014（平成 26）年には本郷盆地内の照岡にあった本郷小学校が閉校になるなど、少子高齢化も進んでいる。

註

１．地質の時期は、秋吉台科学博物館の教示による。
２．2014（平成 26）年、美祢市教育委員会が実施した工事立会調査において出土している。

引用・参考文献

山口県文書館 1962『防長風土注進案』第 17 巻　美禰宰判
山口県 1976『都道府県土地分類基本調査　山口』
山口県地方史学会 1980『防長地下上申』第四巻
平凡社 1980『日本歴史地名大系第 36 巻 山口県の地名』
秋芳町教育委員会 1981『三戸遺跡―美祢郡秋芳町大字岩永本郷―』
山口県教育会 1983『山口県教育会』
角川書店 1988『角川日本地名辞典 35　山口県』
秋芳町教育委員会 1991『秋芳町史』
秋芳町教育委員会 1995『秋芳町の遺跡　秋芳町内遺跡詳細分布調査結果の報告』
秋芳町地方文化研究会 2014『美禰郡細見繪圖』（復刻版）
山口県教育委員会 2017『山口県中世城館遺跡総合調査報告書―長門国編―』　その他

Ⅲ　堀の内遺跡の調査成果

1　遺跡の概要

（1）概要（第４図、図版１～４）

堀の内遺跡は、本郷盆地の南域に位置し、盆地の南方を画する向山の裾部から谷筋にかけて広がる。今回の調査地は遺跡の北端域にあたり、盆地床に張り出す丘陵先端部およびその直下に立地する。

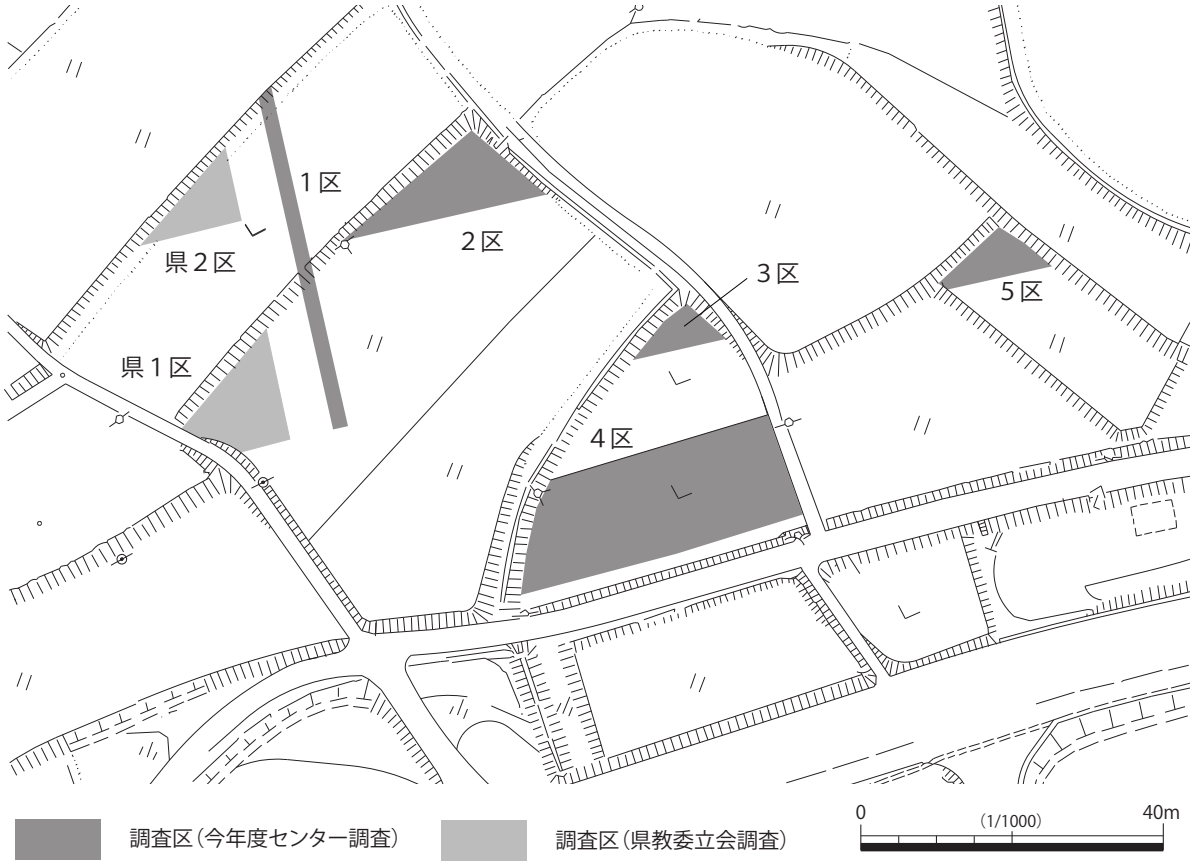
令和元（2019）年度に実施した今回の調査区は５箇所に分かれ、北西側から東側に１～５区と称した。検出した遺構は全区合わせて、竪穴建物４棟、掘立柱建物２棟、井戸２基、土坑８基、溝７条、柱穴約 650 個等がある。遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、陶器、土製品、石器等があるが、出土量は総じて少ない。時期は弥生時代から近世までの各時代のものがある。

（2）層序

１～５区の基本層序は、１区の南東域及び４区の南西半部では耕作土直下に盤土、地山があり、１区北西域、２区、３区、４区北東半部、５区では旧耕作土や旧盤土、遺物包含層も認められた。なお、遺構の大半は地山面上で検出したが、５区の一部では堆積土（遺物包含層）面で確認した。

（3）既往調査資料

本章では、はじめに参考として、山口県教育委員会がほ場整備事業に伴い、平成 30 年度に実施した堀の内遺跡の立会調査の概要報告、並びに平成 27・29 年度の堀の内遺跡を含む本郷盆地内広域での試掘調査で出土した主な遺物について紹介しておきたい。



第４図　堀の内遺跡調査区設定図

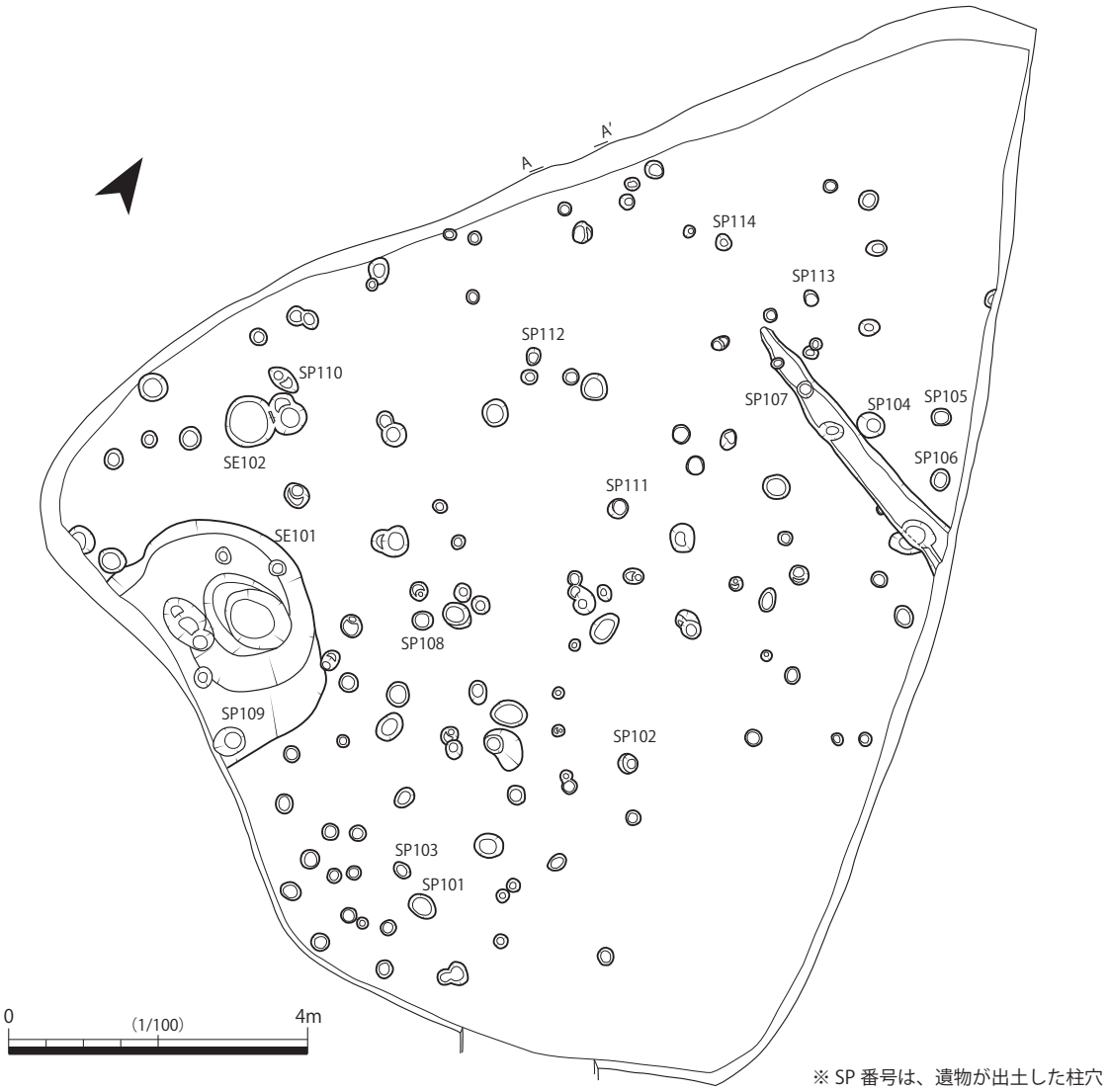
2　平成 30 年度堀の内遺跡の立会調査

2019（令和元）年度の堀の内遺跡の発掘調査に先立ち、平成 30 年度に、山口県教育委員会は山口県美祢農林水産事務所から依頼を受け、岩永本郷地区ほ場整備の施行工事で埋蔵文化財に影響を受ける範囲について立会調査を実施した。その範囲は、本年度実施した堀の内遺跡の調査区に隣接しており、このたびの調査成果とも関連するため、概要を報告する。

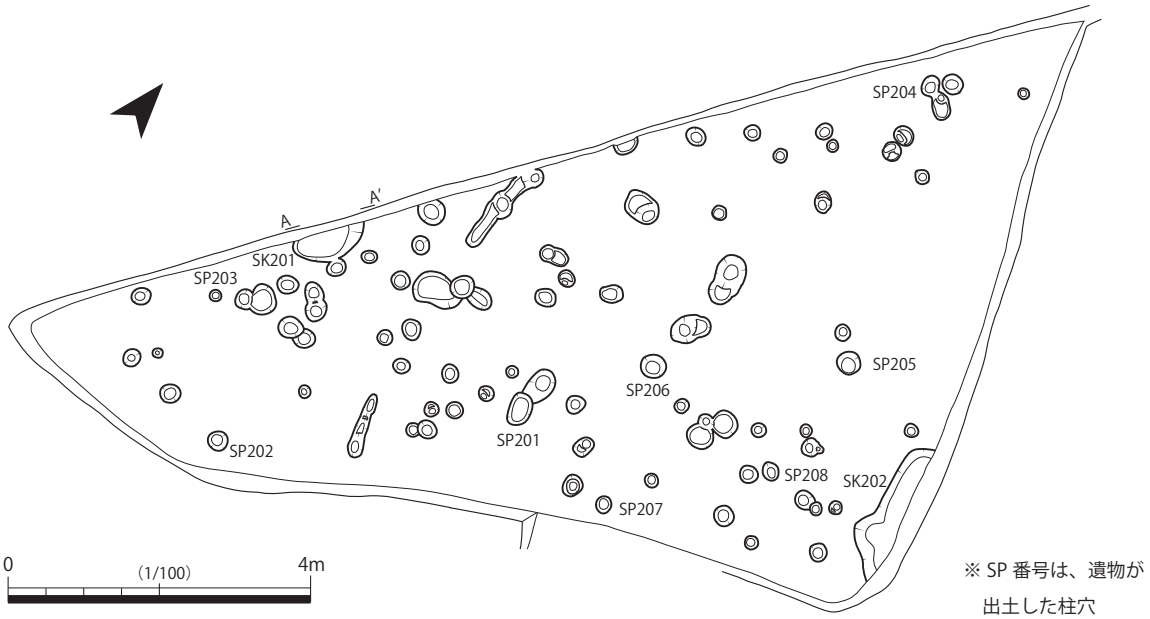
立会調査は、平成 30 年 9 月から 10 月にかけて実施し、3 か所の調査地点のうち、2 地点で遺構を検出した（以下、北側を県立会 1 区、南側を県立会 2 区と称する）。当該地点は、堀の内遺跡の北端に位置し、本年度実施した調査区 1 区とは農道を挟んで西側に対峙する。層序は、地山面上の褐灰色～黒褐色粘質土が遺物包含層で、遺構は地山面で検出した。以下、各区について述べる。

（1）県立会 1 区（第 5 図、図版 5・6）

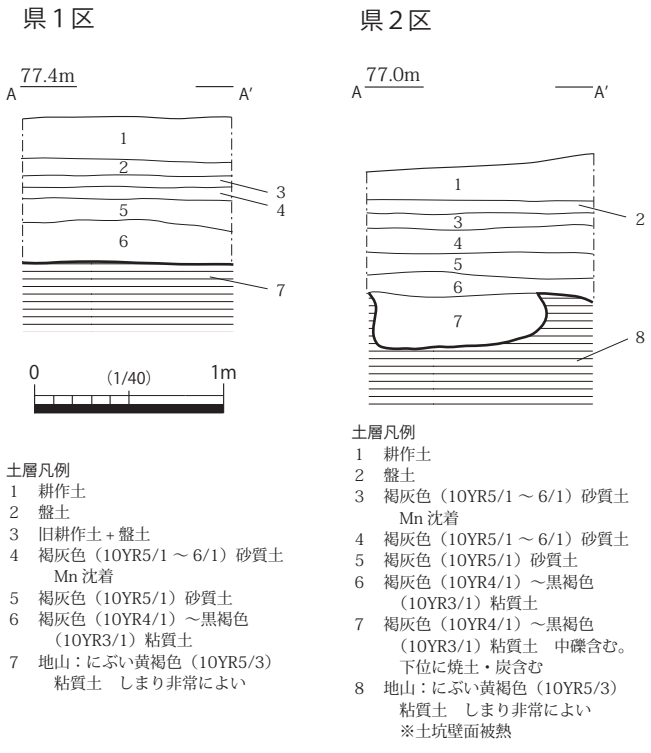
検出した遺構は、井戸、溝、柱穴等がある。井戸は 2 基あり、SE101 は調査区内の南側に位置し、一部調査区外に及ぶ。二段掘りで、南側に段がつく。最上面は、平面径が不整隅丸方形状で、径が 3.2 m × 2 m以上となる。主体部は北寄りにあり、平面が長径 92cm、短径 69cm の不整楕円形を呈する。中段からの深さは 86cm を測る。出土遺物は中世の土師器小片がある。SE102 は小規模で、大



第 5 図　県立会 1 区遺構配置図



第６図　県立会２区遺構配置図



第７図　県立会１・２区土層断面図

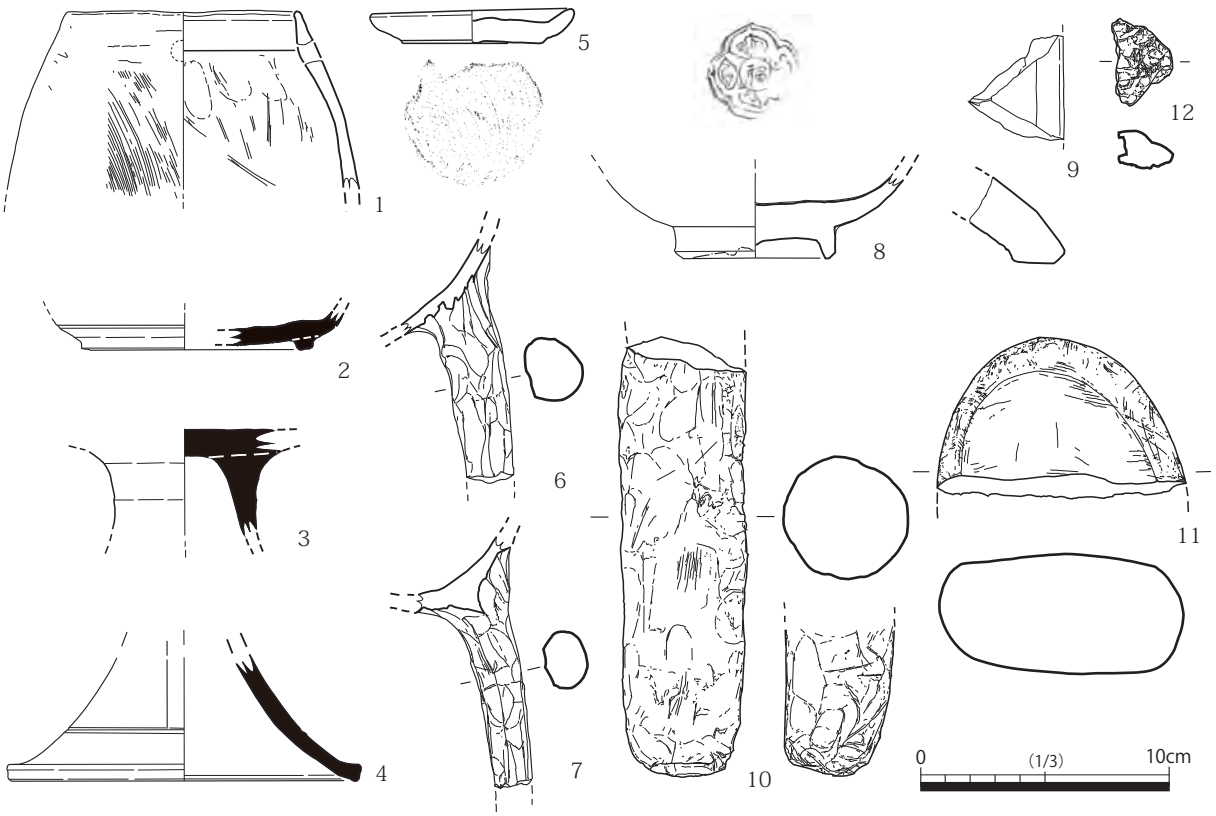
きさは径が約 70cm、深さが 50cm を測る。出土遺物はない。

溝は、東壁中央部から西方向に延びる１条がある。長さが 4.1 m以上、中央幅が 45cm、深さは 6cm を測る。出土遺物は中世の土師器小片がある。柱穴は、14 個から遺物が出土し、SP111 では中世の土師器杯が出土した。

（２）県立会２区（第６図、図版７）

検出した遺構は、土坑、溝、柱穴等がある。土坑は大小２基があり、調査区西壁にかかる SK201 は長径が１m以上、短径が 40cm、深さが 23cm で、出土遺物はない。SK202 は調査区東南隅に位置し、一部調査区外に及ぶ。長さが２m以上、幅が 60cm 以上、深さが 15cm を測る。遺物は、弥生土器１片が出土した。柱穴は、８個から遺物が出土している。

なお、１区・２区ともに多数の柱穴を検出した。これらは、掘立柱建物や柵等に伴うものと推察するが、復元はできなかった。また、遺物は少なく、全て小片である。時期は、主に古代から中世にかけてのものであるが、古墳時代と弥生時代の土器も含まれている。



第８図　試掘調査出土遺物実測図

3　平成 27・29 年度岩永本郷地区試掘調査の出土遺物（第８図、図版８）

山口県教育委員会は、平成 27 年度と、平成 29 年 10 月から 12 月にかけて、岩永本郷地区ほ場整備工事に伴い、試掘調査を実施している。調査の結果、盆地内の多数の地点から遺物が出土した。ここでは、主な遺物を紹介し、本年度の発掘調査の参考資料とする。１・５・７・10・11 は道場・中村遺跡、２・３・６・８・９は川東遺跡、４は土井敷遺跡から出土し、12 は表面採集した。１は土師器の無頸壺である。口縁部は内傾しながら窄まって尖り気味になり、端部は丸くおさめる。口縁直下には径 1 cm 弱の丸い形状の穿孔がある。胴部は丸味を呈し、内面には指頭圧痕による凹凸も残る。２は須恵器の杯の底部である。外底部端に断面台形状の短い高台が貼り付く。外底部はヘラ切りで、粘土紐痕を残す。また外底部にヘラ記号「―」を有する可能性がある。３・４は須恵器の高杯で、３は脚部の上部にあたる部分である。４は下方に外反しながら大きく開く脚部の下半部である。端部は若干肥厚する。外面下位に１条の沈線が廻り、縦方向に透かしが入る。５は土師器の小皿である。口縁は外上方に短く立ち、端部は丸い。外底部に明瞭な回転糸切り痕が残る。６・７は瓦質土器の足鍋の足部である。いずれも外面は指オサエ調整、指頭圧痕が顕著に残り、一部、二次的被熱による煤の付着が認められる。６の内面には同心円文当て具痕が残る。８は青磁椀の底部である。内外面に薄く施釉があるが､外底部は無施釉である。外底面は回転ヘラケズリをする。また内底面には印刻があり、その中央には「福」の漢字を認める。９は丸瓦の側縁の一部である。外面はヘラナデし、内面には布目が残る。10 は土製支脚で、表面は指頭圧痕し、一部荒いナデ調整が残る。11 は磨石で、全面研磨がよく施され、上面と側面の境には稜が入る。上端と一側面に敲打痕が顕著に残る。石材は花崗岩である。12 は鉱滓である。表面は凹凸が著しく、全体に摩滅している。

4　１区の調査

（１）概要（第９・10 図、図版９）

１区は、南方の丘陵部が盆地中央に向って緩やかに下降するその裾部付近に立地する。調査区は北西－南東方向に、全長が 44 m、幅が２mの範囲で設置した。層序は、調査区北側の東壁（SI １付近）をみると、盤土直下から地山面までは約 30cm あり、その間に２層の遺物包含層の堆積がある。

なお、検出した地山面の高低差は、調査区の南東端と北西端では約１mあり、北西端側が低い。

（２）遺構

遺構は、調査区内全域で検出し、とくに中央部から北側に多い。検出した遺構には竪穴建物２棟、溝３条、柱穴約 190 個があり、いずれも地山面で検出した。以下、主な遺構について述べる。

①竪穴建物

平面円形プランの２棟を検出した。調査区の幅が２mのため、当該遺構は調査区外にも及ぶが、全様は明らかではない。とくに、調査区南端で確認した SI ２は検出部分がわずかである。

SI １（第 11 図、図版 10・11）

調査区の北西端近くに位置する。平面形は円形で、復元径が約 4.8 mと推定する。竪穴壁は、最も高い場所で約 30cm 程残る。壁沿いには壁溝があり、幅が 20 ～ 30cm、深さは床面から最も深い場所で 8.5cm である。床面は平坦で、貼床は確認できなかった。炉は、被熱部分や焼土痕を伴う土坑が確認されず、明らかではない。主柱穴は、床面で検出した大小 16 個の柱穴のうち、位置や深さ等から、SP120、SP127、SP128 がその可能性がある。その場合、柱間間隔が 2.0 ～ 2.2 mの５本柱となる。なお、床面直上での出土遺物はないが、住居埋土である黒褐色粘質土内で弥生土器小片が出土した。遺構の時期は、周辺から出土した土器も含め勘案すれば、弥生時代中期の可能性が高い。

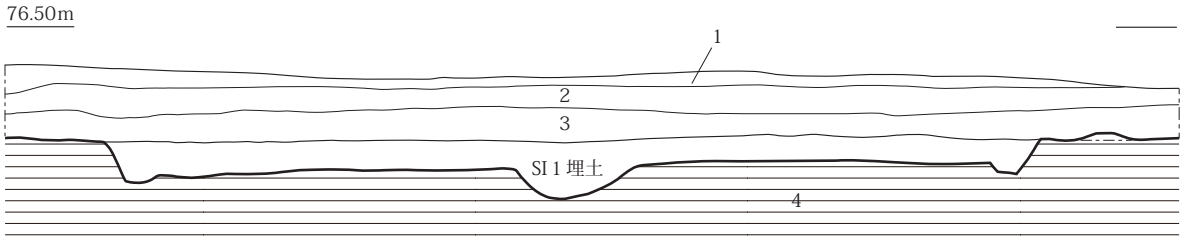
SI ２（第 10 図、図版９）

調査区の南東端に位置する。上端の平面形が円弧状を呈し、長さが 80cm、最大幅が 50cm、深さが約 10cm を測る。床面外周には、建物の壁溝とみる幅が 15cm、深さが３cm の溝を確認した。貼床はなく、検出した範囲が限定的なため、主柱穴等も確認できなかった。遺物は出土していない。

②溝

溝は３条を検出した。いずれも小規模なものであり、SD ３が最も大きい。

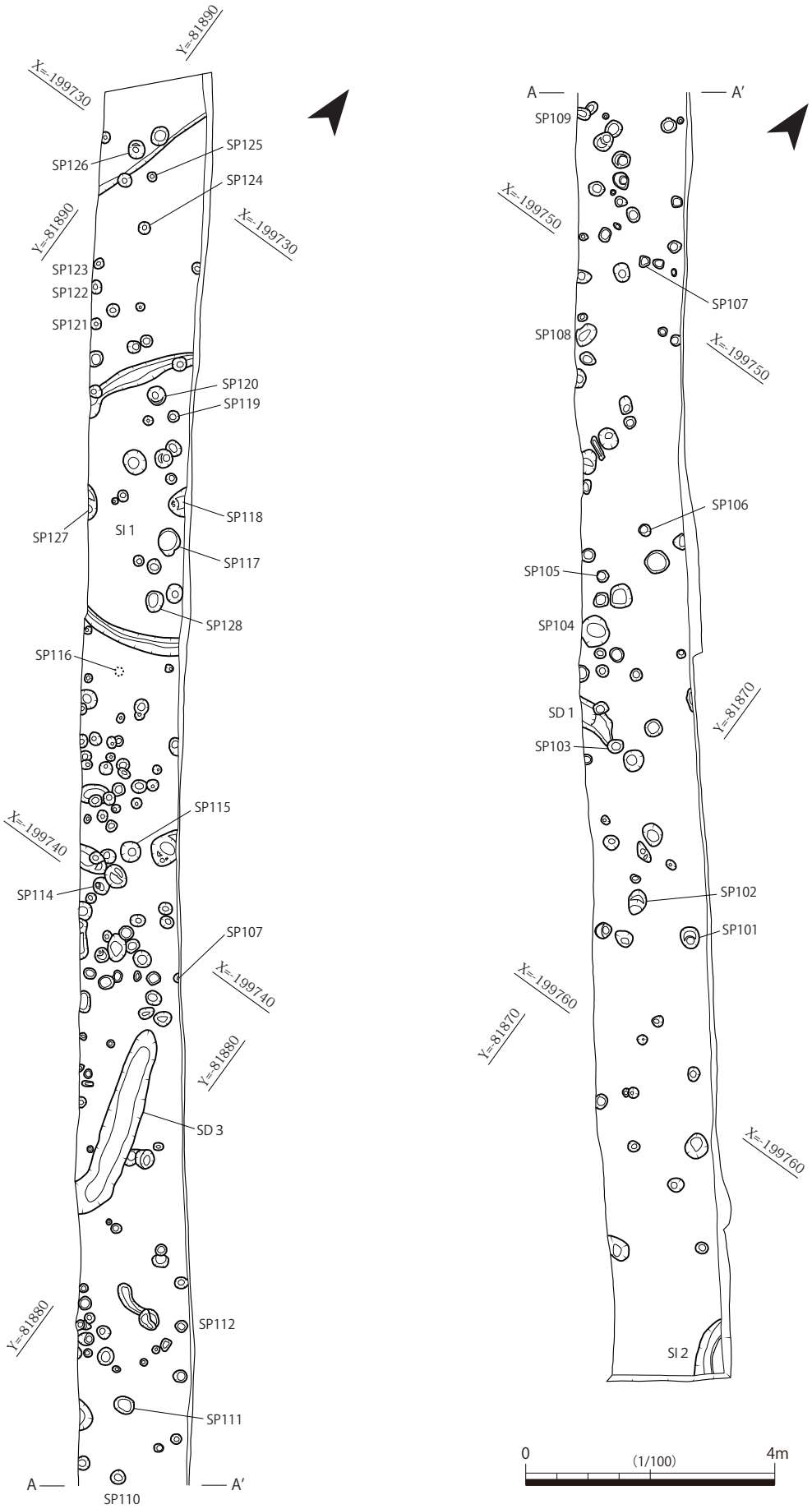
１区東壁（SI１付近）



土層凡例
1　にぶい褐色（10YR5/4）粘質土　砂礫が混じる
2　褐色（7.5YR4/3）粘質土
3　にぶい黄橙色（10YR5/1）粘質土
4　淡黄色（2.5Y8/3）粘質土　地山

0　(1/40)　1m

第９図　１区東壁土層断面図



第 10 図　1 区遺構配置図

SD 1（第 10 図）

調査区南東域に位置する。長さが 85cm、幅が 35cm、深さが 21.6cm で、北西―南東方向にやや湾曲しながら延びる。北西端では調査区外に至る。出土遺物に石鏃（16）がある。

SD 3（第 12 図、図版 12）

調査区中央部に位置する。長さが 3 m以上、幅が 55cm、深さが 21.6cm で、断面は概して逆台形状を呈する。北―南方向に直線的に延びるが、南端は湾曲して調査区外に至っている。出土遺物に弥生土器がある。

③柱穴

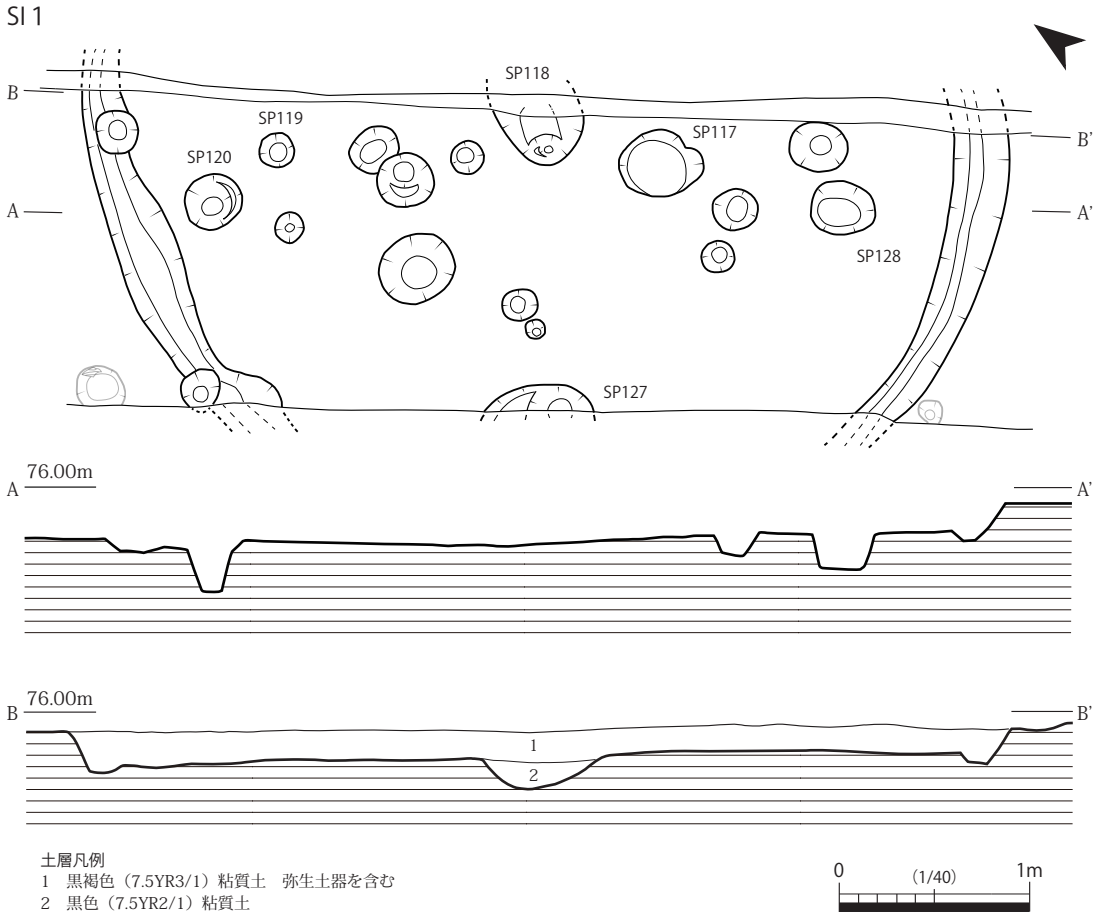
柱穴は調査区全域で検出したが、とくに中央北寄り部分に集中する。径が 20cm 以下の小規模な平面円形のものが多く、柱痕跡を認めたものはない。また組み合わせによる建物等の復元もできなかった。なお、遺物が出土した柱穴は 24 個を数える。

SP101（第 10 図）

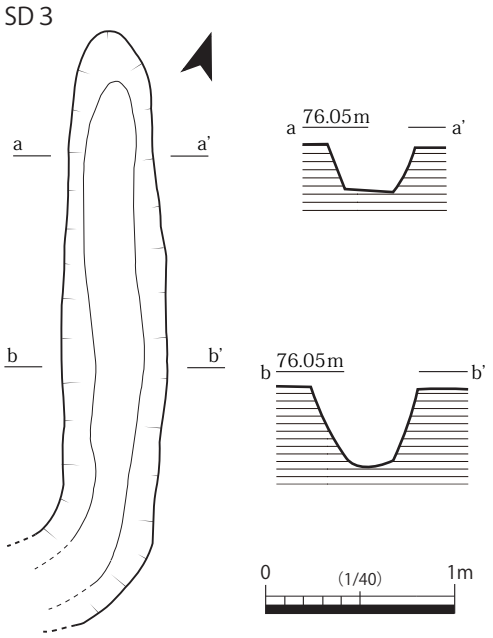
調査区南東域に位置する。平面形は長径が 35cm、短径が 30cm の不整円形で、内部の北西側に段を有する。深さは約 20cm である。出土遺物に土師器がある。

SP104（第 10 図）

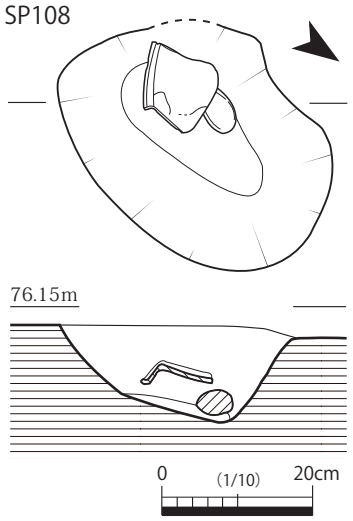
調査区南東域の中央寄りにあり、遺構の一部は調査区北西壁にかかる。平面形は不整円形で、径が約 50cm、深さが約 31cm を測る。出土遺物に弥生土器がある。



第 11 図　1 区竪穴建物 SI 1 実測図



第 12 図　1 区溝 SD 3 実測図



第 13 図　1 区柱穴 SP108 実測図

SP108（第 13 図、図版 12）

調査区中央部西壁際に位置する。平面形は長径が 37.5cm、短径が 28.5cm の不整円形で、深さが 17.5cm を測る。底面は北西側に傾斜している。底面近くから弥生土器の甕（13）、その下から磨石（15）が出土した。

SP111（第 10 図）

調査区中央部に位置する。平面形は長径が 30cm、短径が 28cm の不整円形で、深さは本調査区の中では比較的深く、約 36cm を測る。出土遺物に土師器がある。

SP117（第 11 図）

調査区北西側、SI 1 の床面に位置する。平面形は長径が 44cm、短径が 35cm の一部に膨らみをもつ不整円形で、深さが約 40cm を測る。出土遺物に土師器がある。

SP118（第 11 図）

SP117 と同じ SI 1 内の床面中央付近にあり、遺構の一部は調査区外に至る。平面形は、長径が 38cm 以上、短径が 35cm、深さが 12cm で、内部に小穴を有する。SI 1 の中央付近に位置するため、埋土が黒色粘質土で焼土痕や被熱を示す状況が皆無であるものの、SI 1 の炉の可能性もある。

SP120（第 11 図）

SI 1 内の北西側にある。平面形は、長径が 31cm、短径が 30cm のほぼ円形で、深さが 25cm を測る。出土遺物に弥生土器がある。

その他の柱穴では、SP107・111・119 で弥生土器、SP102・103・105・114 ～ 116・121・123・125 等で土師器、SP109 で安山岩製の剥片、SP126 で炭化物が出土している。

（3）遺物（第 22 図、図版 18）

1 区の遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、石器等がある。総じて少なく、かつ大半は小片で、良好に図化できる資料はわずかである。13 は SP108 出土の弥生土器甕の上部で、口縁は上端部が上方に肥厚するいわゆる跳ね上げ口縁である。14 は遺物包含層出土の白磁椀の玉縁口縁である。15 は SP108 出土の磨石で、全体に研磨が施され、中央面は平坦である。上下端面および側面に敲打痕を認める。砂岩製である。16 ～ 18 は安山岩製の石鏃で、16 は SD 1 、17 は遺物包含層、18 は SI 1 付近の遺物包含層から出土した。16 は凹基式で、器面が風化している。17 は平基式で、片面は全面を調整剥離するが、他方は周縁のみを調整剥離する。18 は平基式で幅広である。器面は風化している。

5　２区の調査

（１）概要（第 14・15 図、図版 13）

２区は１区の北東側に位置し、調査区南端は１区中央部に近接する。丘陵下の微高地上に立地し、遺構面は、地山（砂礫混じりの橙色粘土）上で、南東壁中央では盤土下約 30cm、南西側ではさらに深く約 50cm を測る。盤土と地山の間は、旧耕作土、旧盤土、遺物包含層（灰褐色粘質土）がある。調査区中央部での遺構面の標高は約 76.5 mで、全域の高低差は比較的少なく、概ね平坦面である。

（２）遺構

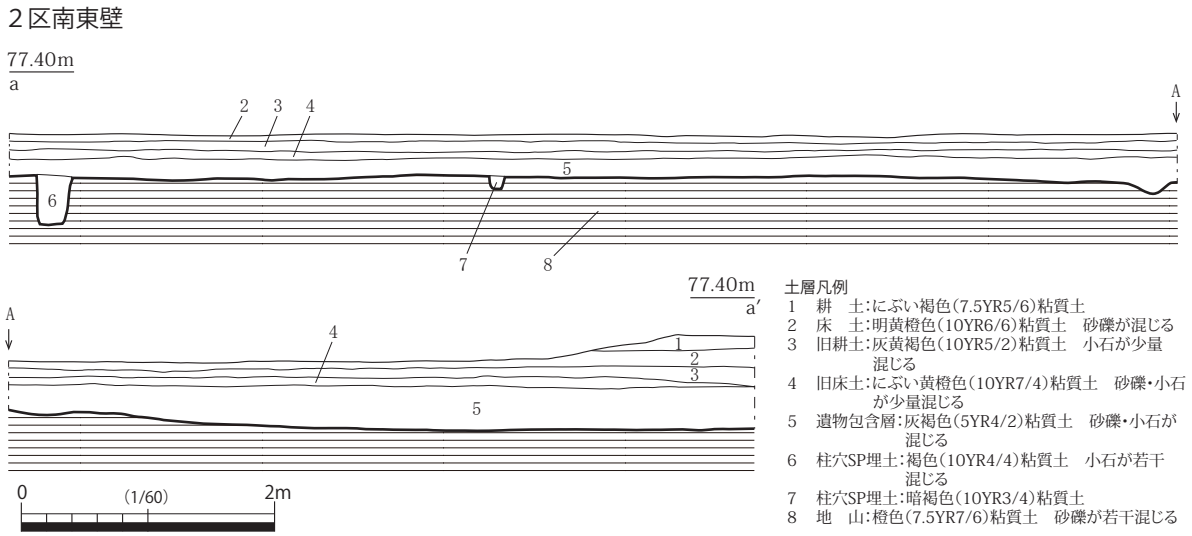
遺構は全て地山面で検出し、掘立柱建物２棟、土坑１基、柱穴 165 個等がある。以下、主な遺構について述べる。

①掘立柱建物

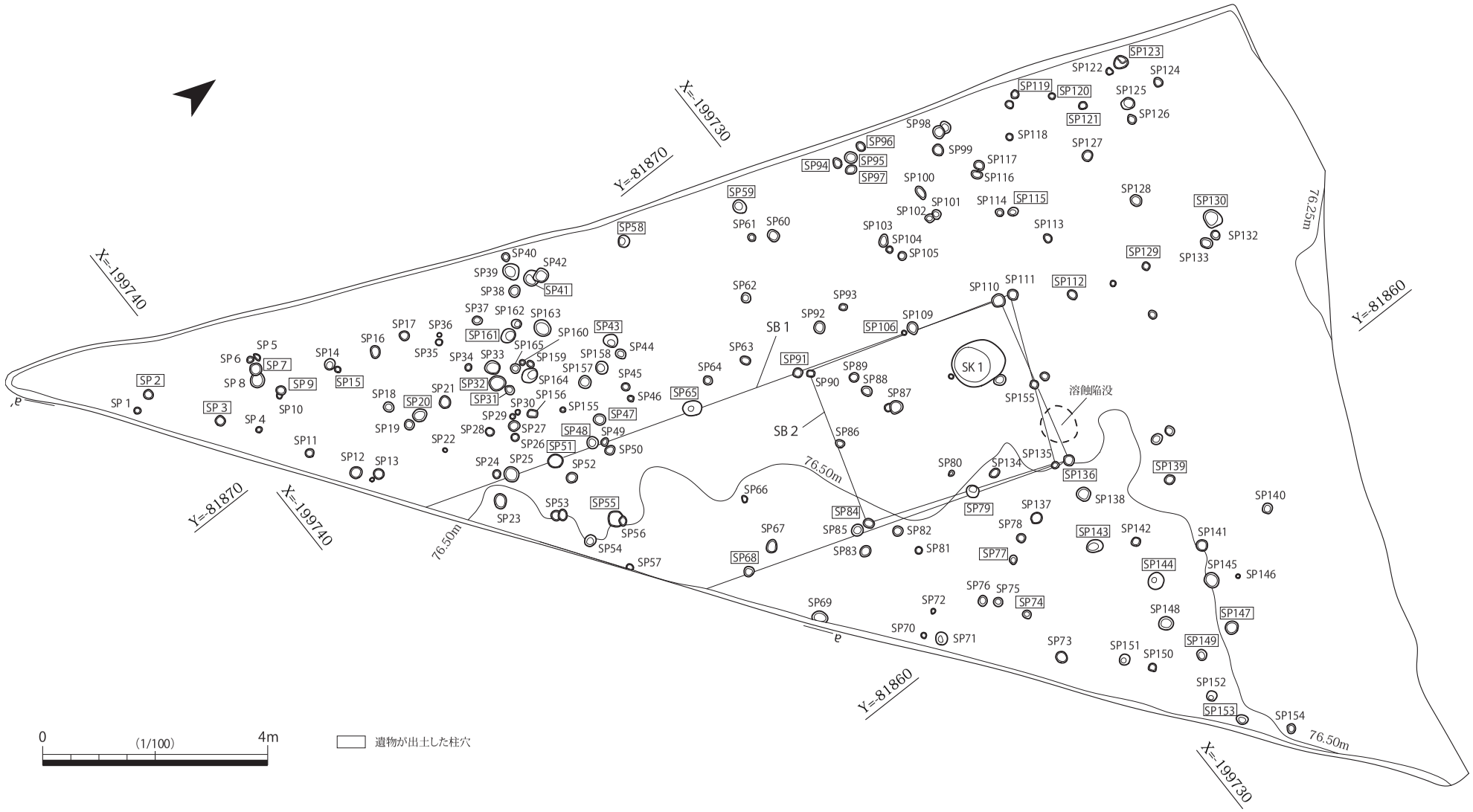
２区では多数の柱穴を検出し、その組み合せによって２棟の掘立柱建物を復元することができた。いずれも棟筋を北北東―南南西方向にとる。

SB １（第 16 図、図版 14）

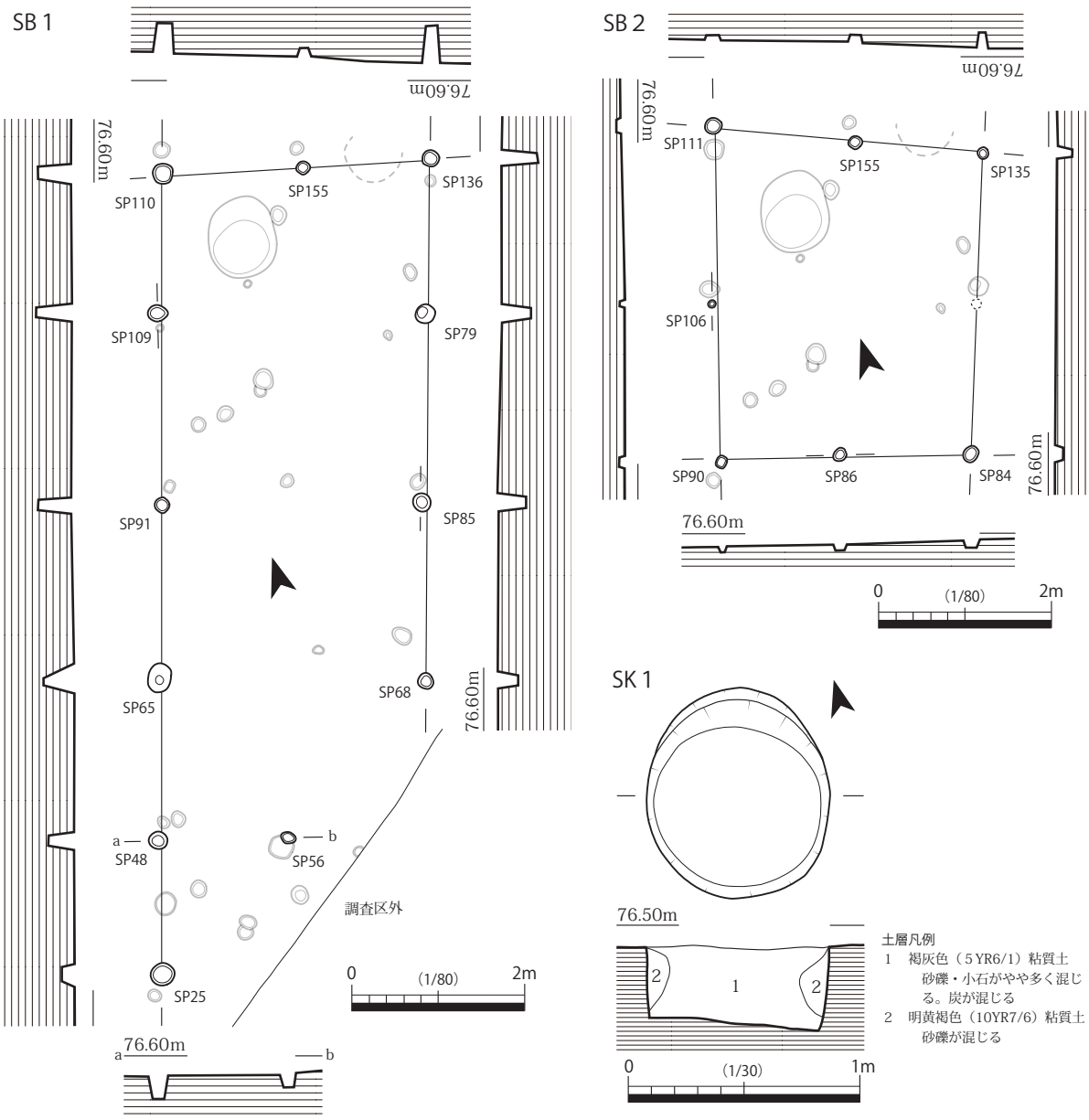
調査区中央部から南西方向にかけて位置する建物で、一部は調査区外に及ぶ。桁行が５間以上×梁行が２間で、床面積は 26.5㎡以上である。棟筋方向はＮ 19°Ｅである。なお、北辺の中間の柱穴 SP155 が、両隅の柱穴 SP110 と SP136 に比べて小さく浅いため、この柱穴が建物の構成柱穴ではなく、桁行が１間となる可能性もある。その場合、北辺の梁行は 3.1 mでかなり幅広くなる。建物規模は、柱の芯々間で、西辺桁行は北から 1.61 m（SP110 － SP109）、2.18 m（SP109 － SP91）、2.02 m（SP91 － SP65）、1.84 m（SP65 － SP48）、1.53 m（SP48 － SP25）で、東辺桁行は同じく北から 1.79 m（SP136 － SP79）、2.19 m（SP79 － SP85）、2.06 m（SP85 － SP68）、北辺の梁行は西から 1.63 m（SP110 － SP155）、1.47 m（SP155 － SP136）である。また、北辺から桁行４間付近の建物中央に小柱穴（SP56）があり、間仕切柱の可能性がある。柱穴はいずれも平面形が円形で、径が 20cm 前後のものが多い。いずれも柱痕跡は認められなかった。遺物を伴う柱穴は SP48・65、68・79・91・136 があり、出土遺物から建物の時期は中世前期に比定する。



第 14 図　２区南東壁土層断面図



第 15 図　2 区遺構配置図



第 16 図　２区掘立柱建物 SB １・２、土坑 SK １実測図

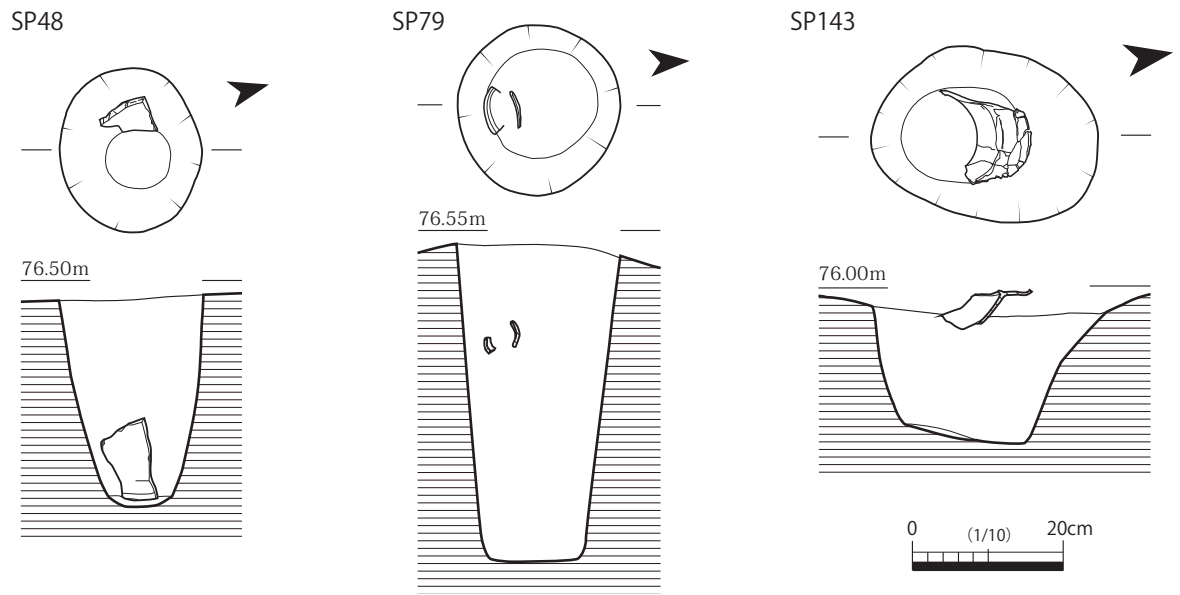
SB ２（第 16 図、図版 14）

調査区中央部に位置し、SB １の北側部分と重複する。桁行が２間（西辺 3.77 m、東辺 3.5 m）×梁行が２間（北辺 3.1 m、南辺 2.92 m）の略方形状を呈するが、東辺では中間の柱穴を確認できず、現状１間となっている。床面積は約 11㎡を測り、棟筋を北北東―南南西方向にとる。柱穴はいずれも径が８～ 20cm で小さく、深さは 10cm 未満のものが多い。なお、確認できなかった東辺中間の柱穴は、対峙する西辺中間の柱穴が他に比べて一回り小さく、深さもわずか５cm と浅いため、後世、削平された可能性もあろう。柱痕跡は皆無で、遺物は SP84 と SP106 から出土している。時期は中世前期で、SB １との先後関係は不明である。

②土坑

SK １（第 16 図、図版 14）

調査区中央北寄りに位置する。平面形が不整円形で、長径が 91cm、短径が 80cm、深さが 46cm



第 17 図　２区柱穴実測図

を測る。床面は平坦で、埋土の大半は細かい炭を少量含み、砂礫・小石が混じる褐灰色粘質土であるが、壁周囲には砂礫が混じる明黄褐色粘質土がみられた。出土遺物は土師器、瓦質土器がある。

なお、SK 1の北東側に約２m離れた地点で、カルスト地形特有のドリーネの一種、地元で「ジバス」と称する溶蝕陥没を確認した。平面形は不整円形で、長径が 69cm、短径が 63cm、深さが 21cm を測る。

③柱穴

検出した柱穴は、掘立柱建物に伴うものをはじめ、165 個を数え、遺物出土のものは 48 個である。

SP48（第 17 図、図版 14）

調査区中央部南側にある掘立柱建物 SB 1の構成柱穴である。平面形は不整円形で、長径が 22cm、短径が 20cm、深さが 27cm を測る。底面から口縁部を下にした須恵質土器の鉢（25）が出土した。

SP79（第 17 図、図版 15）

調査区中央部やや東側にある SB 1の構成柱穴である。平面形は不整円形で、長径が 22cm、短径が 20cm、深さが約 40cm を測る。底面から約 25cm 上で、土師器皿（22）が２つに割れて出土した。

SP143（第 17 図、図版 15）

調査区北東隅付近に位置する。平面形は不整円形で、長径が 29cm、短径が 22.2cm、深さが 19.8cm を測り、床面は若干傾斜する。検出面付近で、底面から 15cm 上位で弥生土器（19）が出土した。

（３）遺物（第 22 図、図版 18・19）

遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、陶器、石鏃、磨石等があるが、図化できるものは少ない。19 は SP143、21 は SP65、22 は SP79、23 は SP41、25 は SP48 出土で、他は遺構外出土である。19 は弥生土器の壺である。口縁は大きく外反し、端部を欠損する。内面に貼付突帯をもつ。器表がかなり摩耗する。綾羅木Ⅳ式に比定する。20 は弥生土器の甕で、外面に４条の沈線が廻る。21 は須恵器の杯で、立ち上がりが短く内傾する。22・23 は土師器の小皿で、底面は回転糸切りである。24 は土師器の台付杯の脚部で、底面は平底である。25 は東播系の須恵質の鉢で、口縁外面に自然釉が掛かる。26 は白磁の玉縁口縁である。27 は砂岩製の磨石で、両端面及び両側面に敲打痕が

ある。28 は黒曜石製の凹基式石鏃で、平面幅広を呈し、全面に細かい調整剥離が施される。29 は黒曜石の剥片である。大半が大剥離面であるが、一方の縁辺に調整剥離があり、一部に自然面を残す。

6　3区の調査

（1）概要（第 18・19 図、図版 16・17）

２区の東側に位置し、南方から張り出した丘陵の先端部にある。層序は調査区北東壁をみると、現地表面、地山面ともに南東から北西に向かって大きく傾斜しており、最上位層の耕作土下に、一部盤土が残り、さらにその下に厚めの黄褐色土が続いて地山に至っている。

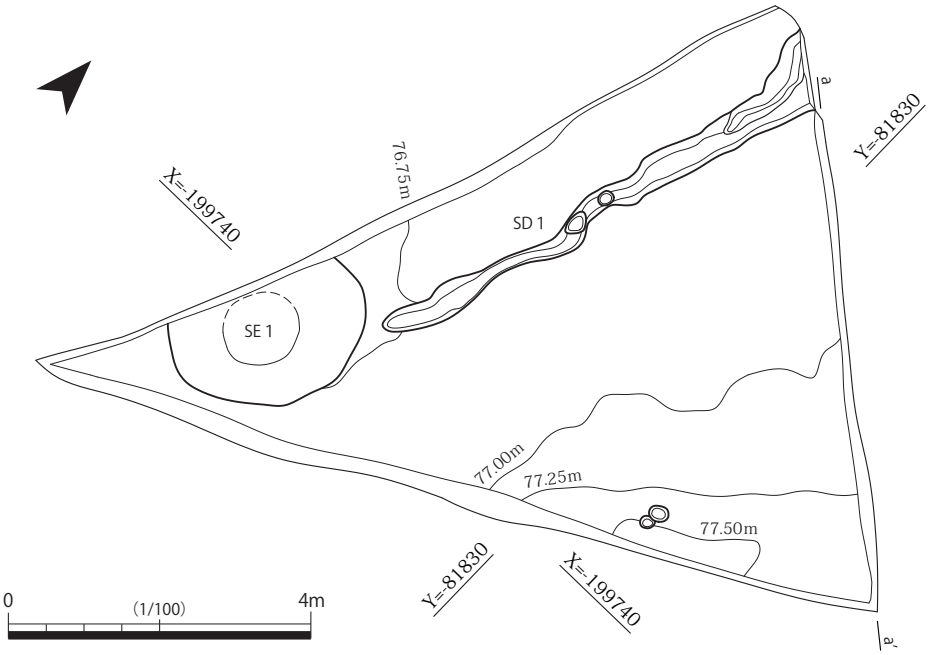
（2）遺構

遺構は地山面で検出し、井戸 1 基、溝 1 条、柱穴 4 個がある。

①井戸

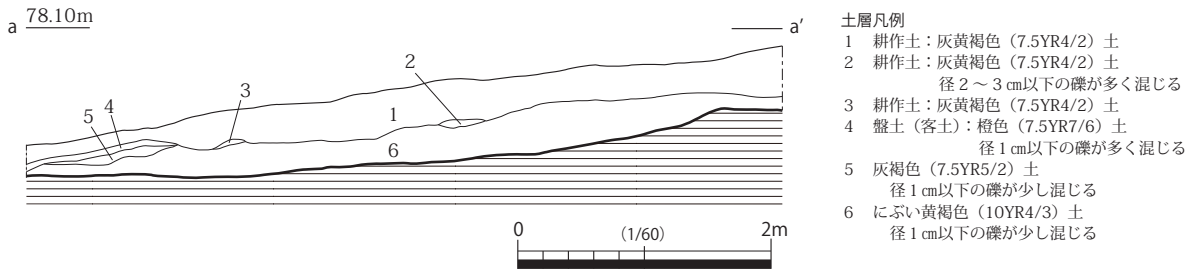
SE 1 （第 20 図、図版 17）

調査区南側に位置し、遺構の西側が調査区外に及ぶため全様は明らかではないが、平面形が不整円形の素掘りの井戸である。規模は上面で径が約 2.65 m前後、深さ及び底面径は著しい湧水のため

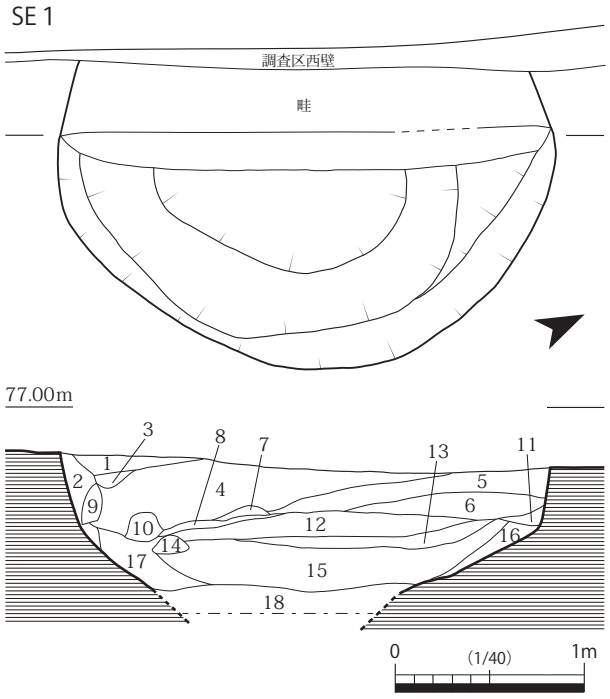


第 18 図　3区遺構配置図

3 区北東壁



第 19 図　3区北東壁土層断面図



土層凡例
1　灰褐色（7.5YR6/2）粘質土
2　黄橙色（7.5YR8/8）粘質土
　褐灰色（7.5YR6/1）粘質土が混じる。
　地山の二次堆積
3　灰褐色（7.5YR5/2）粘質土
4　黒褐色（7.5YR5/2）砂礫混じり粘質土
　砂礫が多く混じる
5　橙色（7.5YR7/6）粘質土
　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土が混じる
6　黄橙色（10YR7/8）粘質土
　小石が混じる
7　黄橙色（10YR8/6）粘質土
8　褐灰色（10YR6/1）粘質土
9　青灰色（5PB6/1）粘質土
10　青灰色（5PB6/1）粘質土
11　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土
12　灰黄橙色（10YR6/2）粘質土
13　灰褐色（7.5YR6/2）粘質土
14　10と同じ
15　にぶい褐色（7.5YR6/3）粘質土　砂礫・小石が混じる
16　灰褐色（10YR5/2）粘質土
17　明黄橙色（10YR7/6）粘質土
18　灰褐色（7.5YR5/2）粘質土　砂礫・小石が混じる

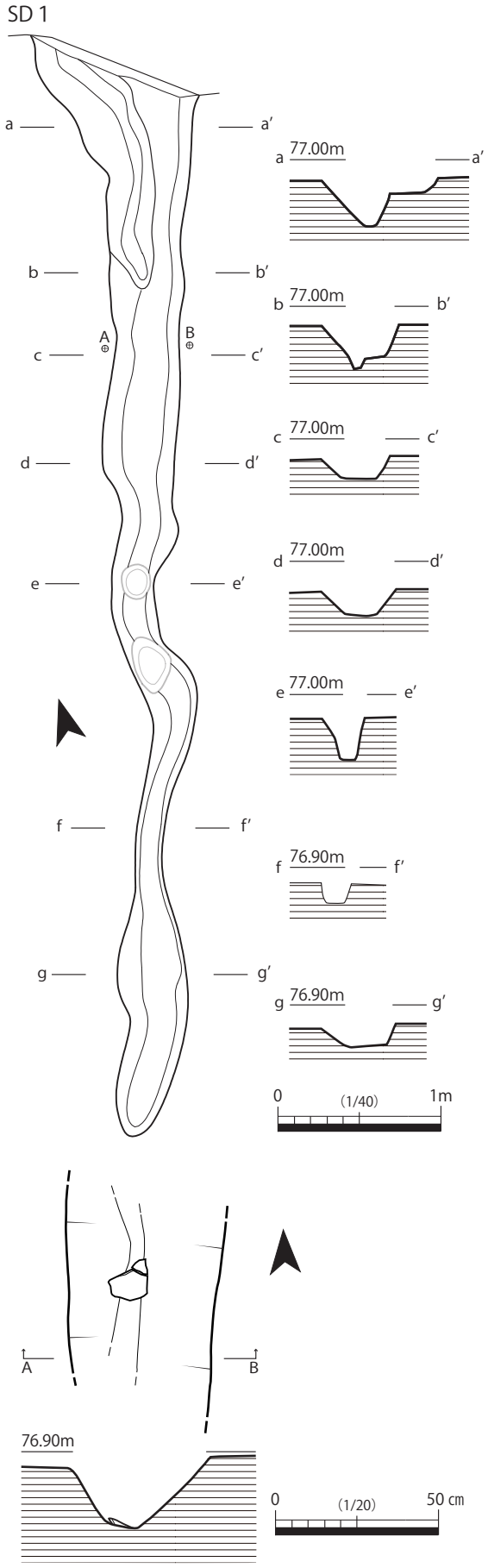
第 20 図　3 区井戸 SE 1 実測図

確認できなかった。断面形はロート状を呈し、埋土は多数の層に分かれる。出土遺物は希少で、埋土上位から、須恵器、土師器、瓦質土器、炭化物の合計 10 点が出土した。埋没時期は中世以降と推定する。

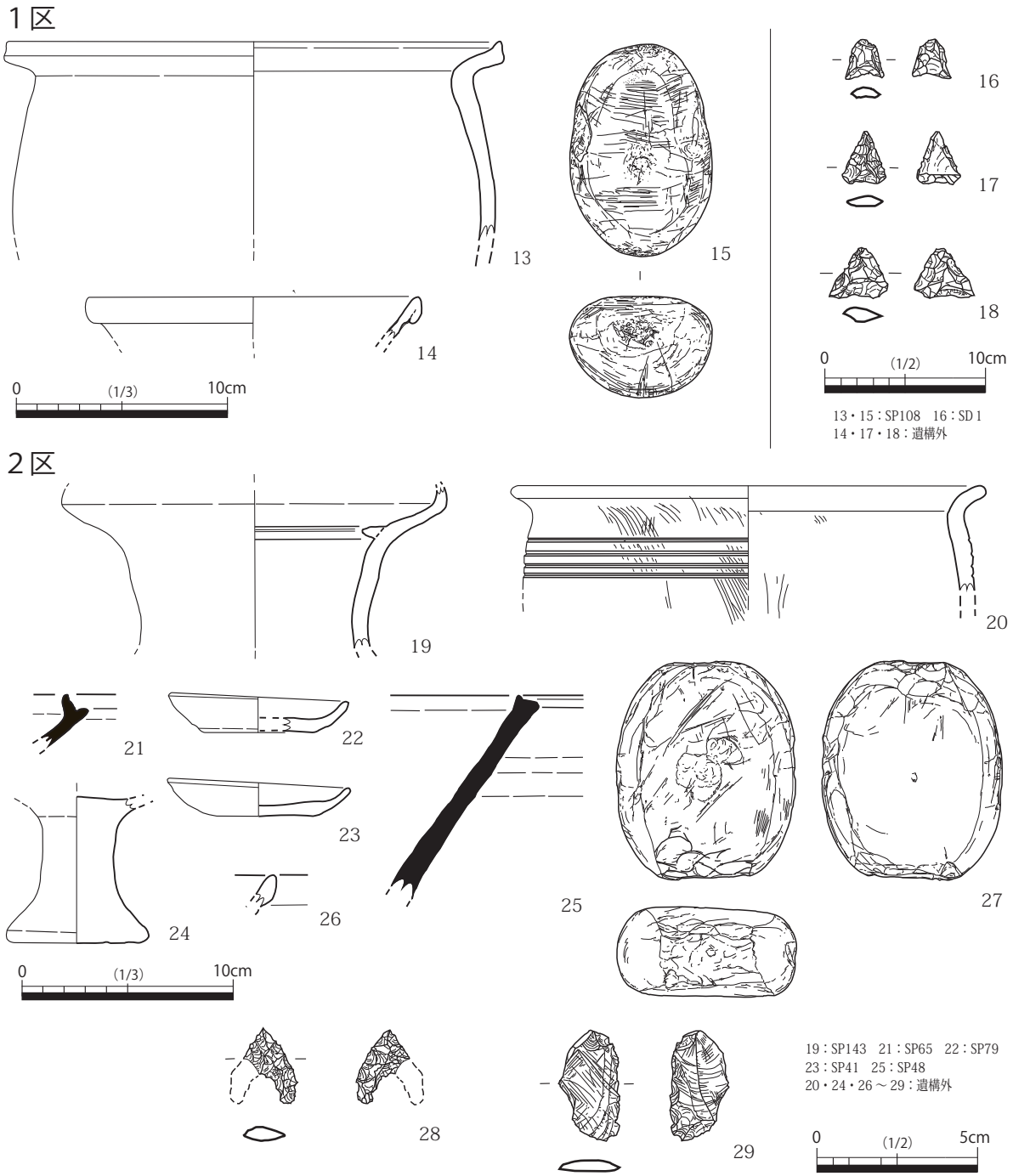
②溝

SD 1（第 21 図、図版 17）

調査区西側壁に沿う。若干蛇行しながら延びており、長さが 6.74 m以上、最大幅は中央部で 45cm で、一部狭まっている。底面も一律に平坦ではない。水流方向は、底面の高低差から SE 1 の方に向っていたと推定する。出土遺物は、須恵器、土師器、瓦質土器のほか、鞴羽口と推定する土製品等が少量ある。須恵器の壺片（30）が北寄りの底面で出土した。SE 1 に関連する、自然流路の可能性が高い。埋没時期は中世以降と考える。



第 21 図　3 区溝 SD 1 実測図



第 22 図　1～3 区出土遺物実測図

③柱穴（第 18 図）

南東壁に近い傾斜面上で隣接する２個、溝 SD １中央部の床面で近接する２個を検出した。遺物は出土していない。なお、SD １内のものは溝に伴う自然による凹みの可能性もある。

（３）遺物（第 22 図、図版 19）

土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、土製品、炭化物等があるが、すべて小片で、総数もわずかである。30 は SD １底面出土の須恵器壺の胴部である。31 は SD １出土の瓦質土器鉢の口縁部である。

７　４区の調査

（１）概要（第 23・24 図、図版 20）

３区の南側に位置し、両地区間の距離は最短約 11 mである。南から盆地中央部に張り出す丘陵の先端部近くに立地する。遺構面までの層序と深さは、調査区南半部では表土（耕土）直下が黄褐色土の地山面（遺構面）であり、深さが約 20cm 程度と浅い。北側の SD １付近では表土下が、２層（盤土が約 20cm、遺物包含層が約 20cm）あり、深さが 40cm 程度である。調査区全域は総じて平坦面を形成するが、北東隅では地山面が緩やかに下降し、表土面からの深さが 60cm となる。

（２）遺構

調査区全域から、大半が地山面上で検出した。土坑６基、溝２条、柱穴 287 個等がある。以下、主な遺構について述べる。なお、調査区全域で、北北西―南南東の方向に約２m間隔で並走する幅が 30cm 前後、長さが平均 10.3 m、深さが約 10 ～ 20cm の溝 14 本を検出したが、その底面に重機の爪とみる痕跡を認めたことから、現代の田圃耕作に伴う暗渠と判断する。また、調査区北東側壁に沿う長さが 9.5 m、幅が 1.5 m以上、深さが約 15cm の幅広い凹みも、現代の掘削によるものである。

①土坑

６基あり、いずれも調査区北半部に位置する。平面形は、概して径が１m前後の円形が多い。

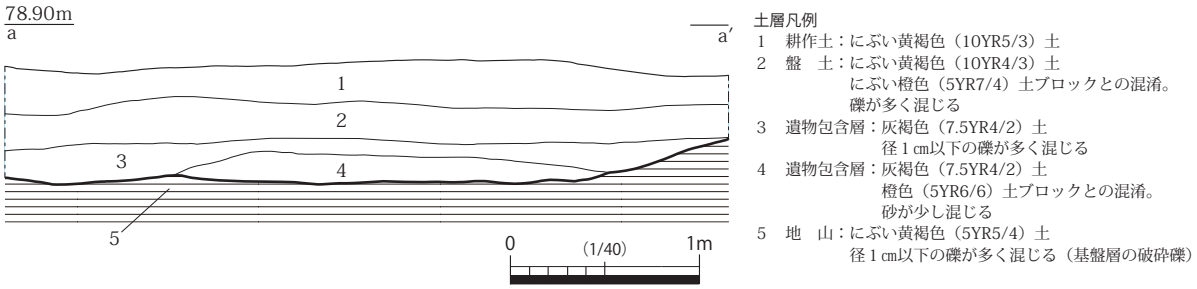
SK １（第 25 図、図版 21）

調査区の北側に位置する。平面形は長径が 1.59 m、短径が 1.15 mの楕円形で、底面は湧水のため検出できなかったが、深さは 85cm 以上を測る。埋土は内外２層からなり、内側が灰褐色粘質土、外側が暗灰褐色粘土混じり土である。遺物は、両層から土師器が出土したが、いずれも小片である。

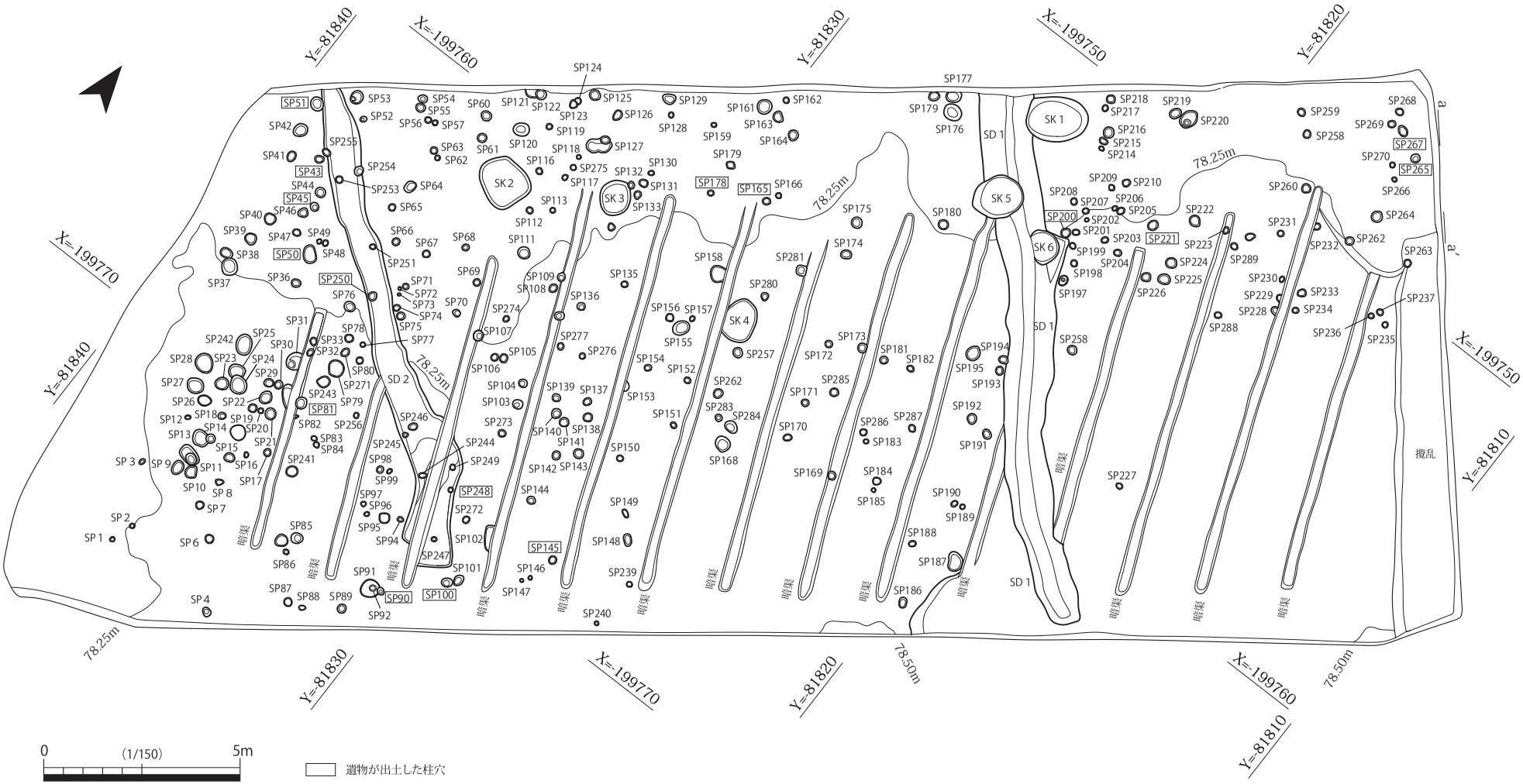
SK ２（第 25 図）

調査区の西寄りに位置する。平面形は隅丸不整方形で、長径が 1.11 m、短径が 1.27 m、深さが

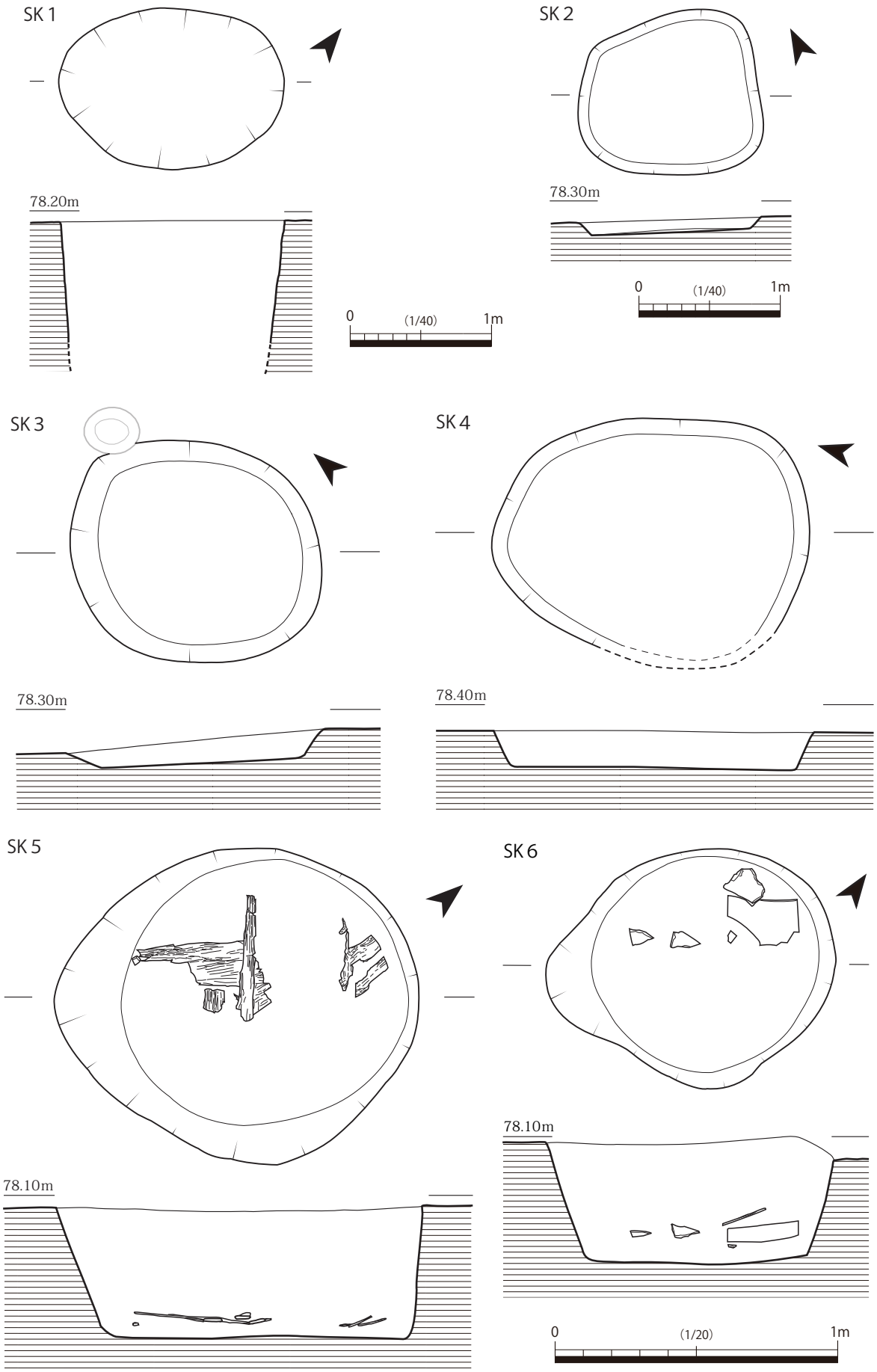
４区北東壁



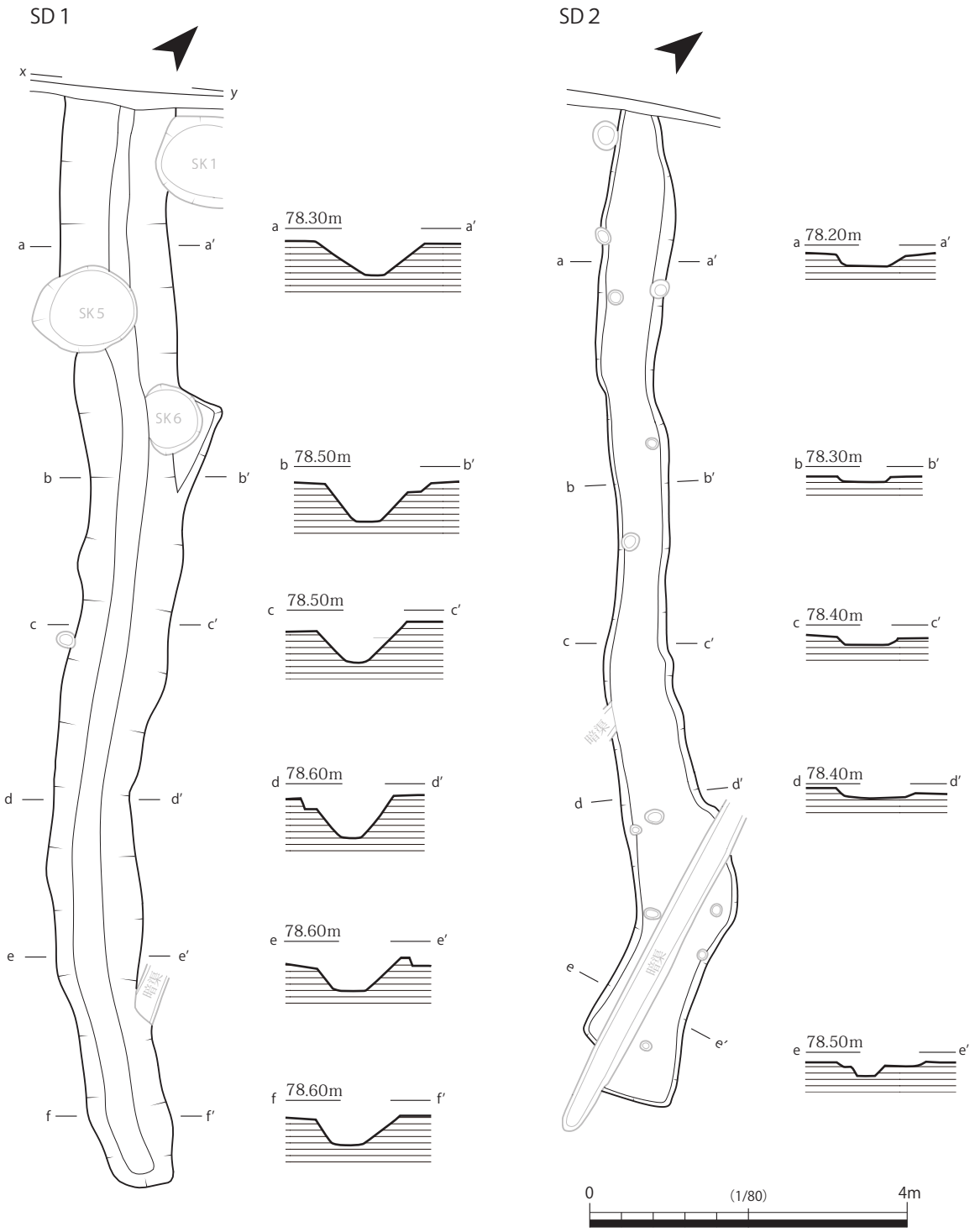
第 23 図　４区北東壁土層断面図



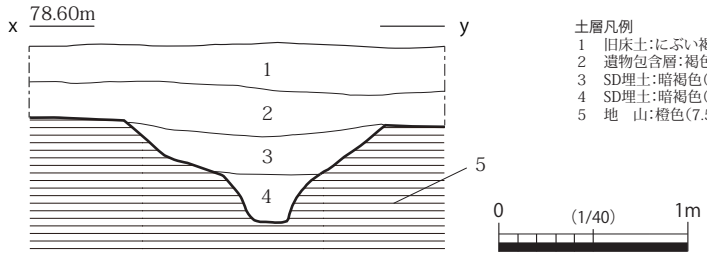
第 24 図　4 区遺構配置図



第 25 図　4 区土坑（SK）実測図



SD 1 土層



土層凡例
1　旧床土:にぶい褐色(7.5YR6/3)粘質土　砂礫・小石が混じる
2　遺物包含層:褐色(7.5YR4/3)粘質土　砂礫・小石が混じる
3　SD埋土:暗褐色(7.5YR3/3)粘質土　石や砂礫が少し混じる
4　SD埋土:暗褐色(7.5YR3/4)砂礫混じり粘質土　砂礫・小石が多く混じる。しまり強
5　地　山:橙色(7.5YR6/8)粘質土　花崗岩バイラン土。砂礫・小石が混じる

第 26 図　4 区溝 SD 1・2 実測図

12cmを測り、底面は平坦である。埋土は暗褐色粘質土の単層である。出土遺物は弥生土器(32)がある。

SK 3（第 25 図、図版 21）

SK 2の近くに位置し、平面形は不整円形で、長径が 0.9 m、短径が 0.7 m、深さが 13cm を測り、底面は平坦である。出土遺物はない。

SK 4（第 25 図、図版 21）

調査区の中央に位置する。南西縁辺が現代の暗渠で一部壊されている。平面形は不整楕円形で、長径が 1.12 m、短径が 0.9 m、深さが 13cm を測り、底面は平坦である。出土遺物は土師器がある。

SK 5（第 25 図、図版 22）

調査区の北寄りにあり、溝 SD 1の埋没後に掘り込まれる。平面形はほぼ円形で、長径が 1.29 m、短径が 1.13 m、深さは 47cm を測る、底面は平坦である。底面付近で朽ちた状態の板材を検出した。桶ないし樽が埋設されていたと推定する。出土遺物に瓦（44 ～ 46）、土師器、須恵器（34・35）、瓦質土器、陶器（42）、用途不明品（50）がある。

SK 6（第 25 図、図版 22・23）

SK 5付近にあり、SK 5と同様、溝 SD 1の埋没後に掘り込まれる。平面形は概ね直径が 0.85 m の円形であるが、西側で一部膨らむ。深さは約 43cm で、底面は平坦である。遺物は、底面付近で瓦(47 ～ 49）及び陶器（43）が出土したほか、埋土中で白磁（41）と土師器が出土した。

②溝

SD 1（第 26 図、図版 23）

調査区北東寄りに位置し、北西－南東方向に延びる。北西端は調査区外に至り、長さは 13.7 m以上、幅は南東端付近で約 1.0 m、中央部で 1.2 m、北東端で 1.4 mであり、深さは最深で 51cm を測る。南東端から北西端に向けて底面が低くなり、その高低差は 51cm である。底面は平坦面をなすが、幅が 20cm 未満の地点もあることと、法面の傾斜が直線的であることから、概して断面形はＶ字状となる。埋土は、上下２層に分かれる。出土遺物には、弥生土器、須恵器（37）、土師器等がある。

SD 2（第 26 図）

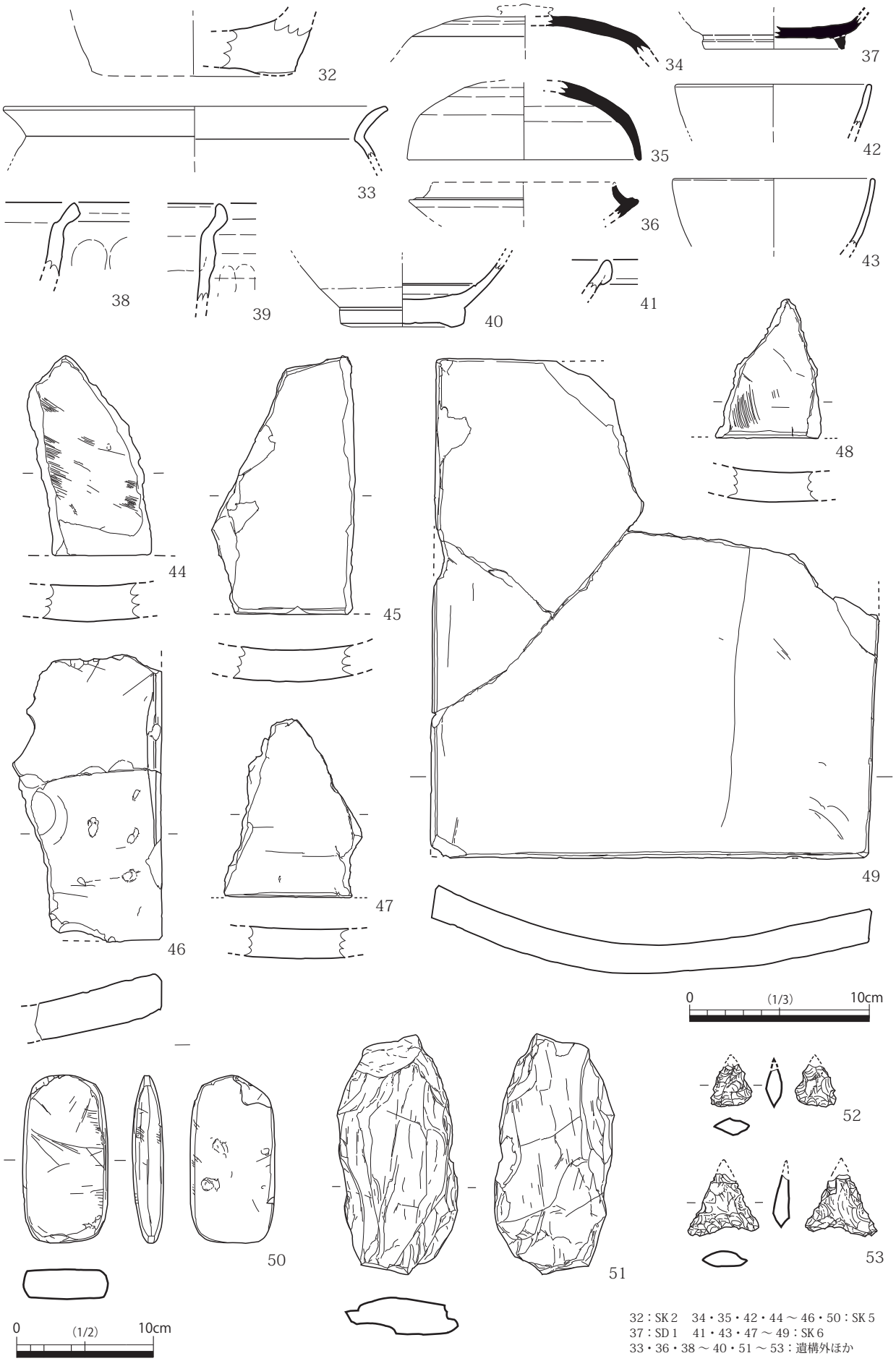
調査区南西寄りに位置し、北西－南東方向に延びる。北西端は調査区外に至り、長さは 12.5 m以上、幅は南東端付近で約 1.15 m、中央部で 0.64 m、北東端で 0.45 mであり、深さは平均 10cm 前後で、北東側は 5cm 程度と浅い。底面は平坦面をなし、南東端から北西側に緩やかに下がる。出土遺物には、土師器、瓦質土器等がある。

③柱穴

柱穴の大半は、径が 20cm 未満の小規模なもので、建物は復元できなかった。遺物が出土した柱穴は 16 個で、SP43・45・50・51・81・90・100・145・165・178・200・221・248・250・265・267 である。総じて数量は少なく、土器はほとんどが小片である。

（３）遺物（第 27 図、図版 24 ～ 26）

32 は SK 2、34・35・42・44 ～ 46・50 は SK 5、33・36・51・53 は遺物包含層、37 は SD 1、38 ～ 40・52 は遺構外、41・43・47 ～ 49 は SK 6から出土した。32 は弥生土器の壺底部で、器壁は厚い。33 は弥生土器の甕で、大きく外反する口縁部である。34 ～ 35 は須恵器の蓋で、34 は



32：SK 2　34・35・42・44 ～ 46・50：SK 5
37：SD 1　41・43・47 ～ 49：SK 6
33・36・38 ～ 40・51 ～ 53：遺構外ほか

第 27 図　4 区出土遺物実測図

つまみをもつ。36 は須恵器の杯身で、口縁は外反しながら短く立ち上がる。37 は須恵器の杯底部で、底面周縁部に短い高台が貼り付く。38・39 は瓦質土器の鍋の口縁部である。40 は白磁椀の底部で、内底面に砂目が残る。41 は白磁の玉縁口縁である。42・43 は萩焼の椀である。44 ～ 49 は近世の平瓦で、最も大きな 49 は四方の縁に面取りがあり、凸面に滑り止めがつく。48 は凹面にコビキ痕がある。45 は焼成不良である。50 は用途不明品で、楔状の形状を呈す。全面を丁寧に研磨する。材質は凝灰岩と推定するが、近世瓦片を転用した可能性もある。51 は打製石斧の未製品で、荒割段階のものである。緑色片岩製である。52・53 は石鏃で、ともに先端を欠く。52 は円基式で、黒曜石製である。53 は抉りが浅い凹基式で、安山岩製である。

8　5区の調査

（1）概要（第 28・29 図、図版 27・28）

3区と4区の北東側にあり、4区とは最短で約 28 m離れている。南側から派生する丘陵の先端部直下にある。層序は、調査区南東壁でみると、表土下にまず近現代の埋土があり、その下層に砂礫や小石が混じる褐色粘質土が、約 50cm 前後の厚さで地山上面まで堆積している。

（2）遺構

竪穴建物 2 棟、井戸 1 基、木炭焼成坑 1 基、溝 1 条、柱穴 55 個があり、一部を除き地山面で検出した。

①竪穴建物

調査区東域で、平面形が方形状の竪穴建物 2 棟を重複した状況で検出した。いずれも北東側の床面が溝 SD 1 に壊され、南側は調査区外に至っている。

第 28 図　5 区遺構配置図

SI 1（第 30 図、図版 28 ～ 30）

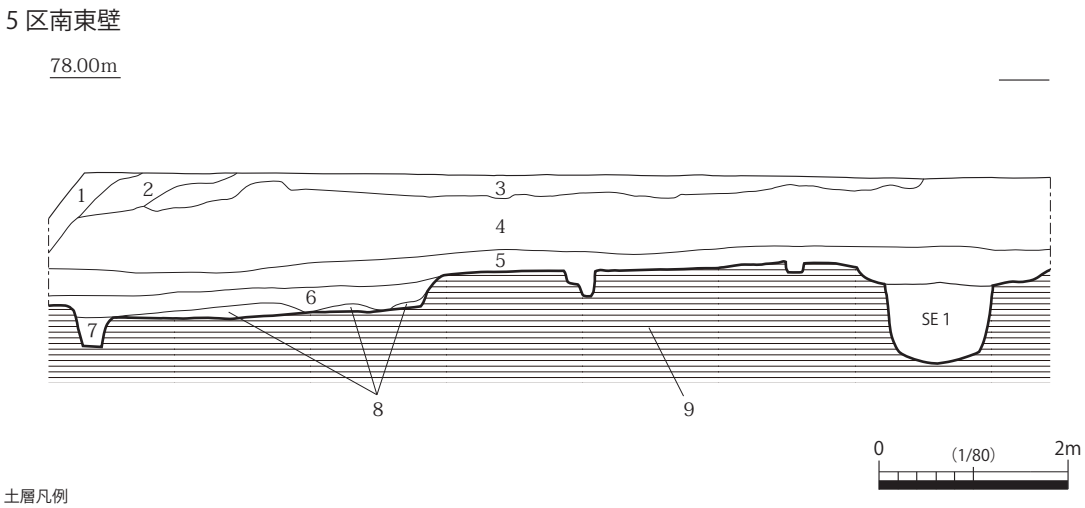
竪穴建物の壁溝と判断する平面Ｌ字状の小溝を検出した。溝は、北西―南東方向で長さが 2.8 m、幅が約 12cm、深さが 6 ～ 8cm、北東－南西方向で長さが 1.8 m、幅が 8 ～ 14cm、深さが 7cm を測る。北西―南東方向の溝の主軸方位は、後述する SI 2 の北西―南東方向の外壁の方向と平行ではないため、SI 2 によって建物の壁は完全に削平されたと考えられる。

また、北西－南東方向の溝の北西側延長線上にある SI 2 の壁に、その痕跡を認めないことから、SI 1 の北西壁は SI 2 の範囲内にあったと考えられる。このことから、SI 1 の南西壁の長さは約 2.9 m前後と推定する。床面はほぼ平坦で、貼り床の痕跡は認めなかった。主柱穴は、床面南隅にある SP 1 とその北西側の SP 4 が該当する。SP 1 は、平面形が不整楕円形で、長径が 53cm、短径が 42cm、深さが 8cm を測る。SP 4 は、平面形が不整円形で、長径が 47cm、短径が 36cm、深さが 12cm を測る。なお、炉やベッド状遺構等は検出していない。

遺物は、SP 1 と SP 2 から土師器小片と炭が出土した。遺構の時期は、周辺の出土遺物を含めて勘案すれば、古墳時代後期の可能性が高い。

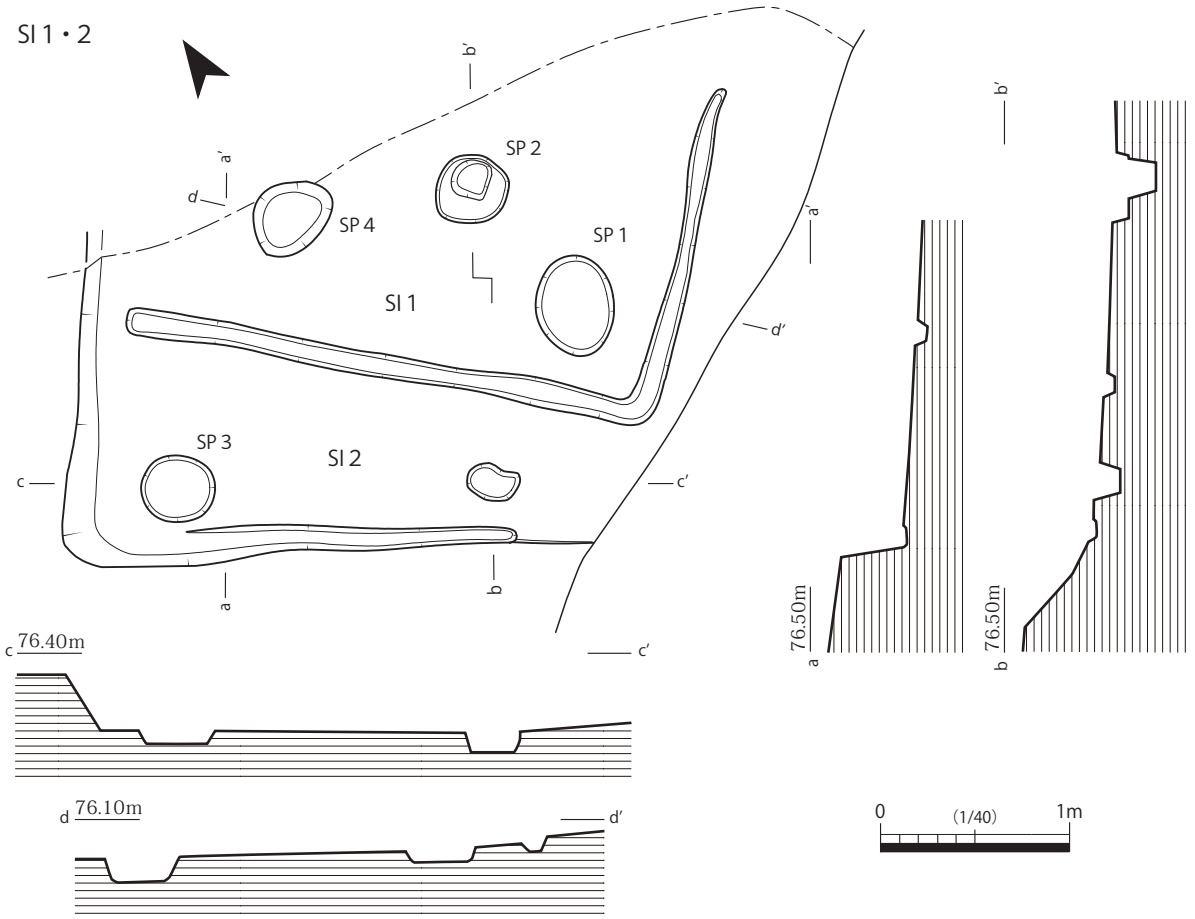
SI 2（第 30 図　図版 28 ～ 30）

建物の南西側と北西側の壁及び床面の一部を検出した。北西壁は、長さが 1.6 m以上、高さは北端で 10cm、西側で 30cm を測る。南西壁は、長さが 2.7 m以上、深さは約 40cm であり、壁際には、長さが 1.7 m、幅が約 10cm、深さが 3cm の壁溝の一部がある。床面は平坦で、貼り床は認められなかった。主柱穴は、床面北西隅に位置する、平面形が円形で、長径が 39cm、短径が 35cm、深さが 7cm の柱穴 SP 3 があるが、それ以外は明らかにできなかった。また、炉やベッド状遺構等は検出していない。遺物は、SI 2 出土と限定できるものはなかった。時期は、SI 1 と同様の平面プランを示すことから、大きな時期差はないと推察する。なお、SI 1 と SI 2 のどちらに伴うものか判断できないが、遺構検出中に土師器と滑石の原石が出土している。



土層凡例
1　表　土：にぶい褐色（7.5YR5/6）軟質土
2　埋　土：にぶい褐色（5YR5/4）土
3　埋　土：橙色（2.5YR6/8）粘質土　にぶい橙色（7.5YR6/3）粘質土ブロックが混じる。近現代
4　包含層：褐色（7.5YR4/4）粘質土　砂礫・小石が混じる
5　包含層：褐色（7.5YR5/3）粘質土　砂礫・小石が混じる
6　SI 1 埋土：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土　砂礫・小石が混じる
7　SI 1 SP 埋土：褐色（7.5YR4/3）粘質土　地山ブロックが若干混じる
8　SI 1 埋土：灰褐色（7.5YR4/2）粘質土
9　地山：黄橙色（10YR7/5）粘質土

第 29 図　5 区南東壁土層断面図



第 30 図　5 区竪穴建物 SI 1 実測図

②井戸

SE 1（第 31 図、図版 30）

調査区南側に位置する。南東半分が調査区外にあり、北東縁は柱穴に一部壊されている。地山を掘り込んだ素掘りの井戸で、上端の平面形は不整円形状で、規模は径が約 2 m前後と推定する。井戸内部の西側、検出面から約 20cm の深さで、広く、平坦なテラス面を検出した。井戸の主体部分は、調査区北東壁寄りに位置し、平面形は楕円形を呈する。テラス面から底面までの深さは 85cm 前後で、底面は平坦である。埋土は、テラス面以下で上下 2 層に分かれる。遺物は、テラス面より上位で土師器・須恵器、下位の暗褐色土層内で弥生土器小片が出土した。

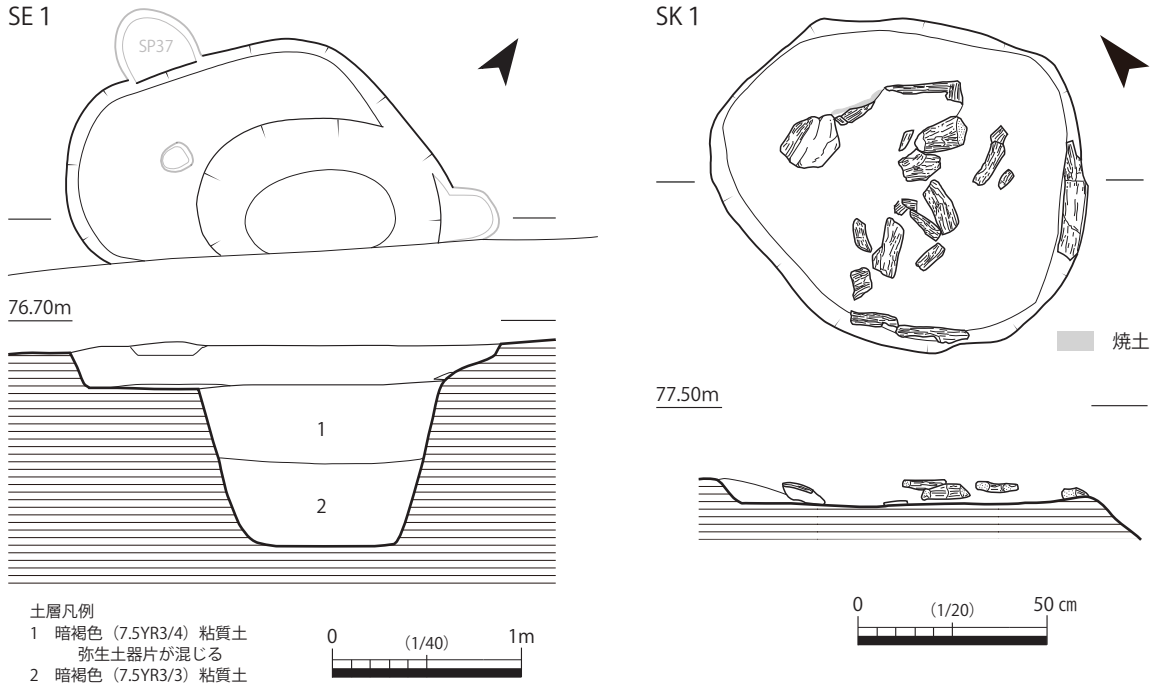
③土坑

SK 1（第 31 図、図版 31）

調査区南側に位置する。遺物包含層を掘り込んだもので、底面は地山まで達していない。平面の上端は、南東側の一部が壊されており、現状で平面形が不整円形を呈し、長径が 1.02 m、短径が 0.87 m、深さが 6cm を測る。底面中央から周縁にかけて木炭が散在するが、長短があり、最長で 36cm を測る。また、底面北寄りで、粘土と焼土を検出したが、底面及び壁面で被熱による硬化は認められなかった。遺構の性格は、木炭焼成坑と考えられる。土器類の出土はなかった。

④溝

調査区北端で 1 条を検出した。今回調査した全調査区の中で最も大きな規模の溝である。



第 31 図　5 区井戸 SE 1・土坑 SK 1 実測図

SD 1（第 32 図、図版 31）

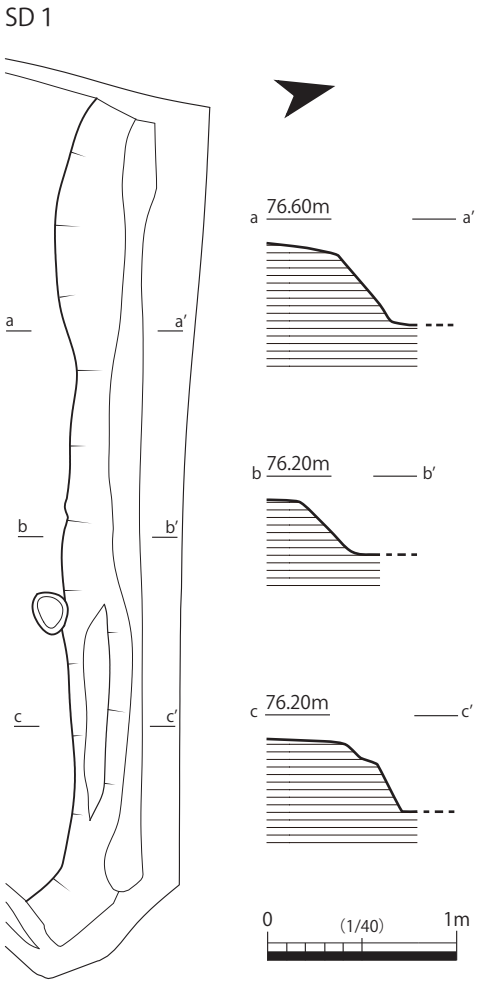
調査区北壁沿いで検出した。遺構は調査区外にも広がり、溝の南岸から底面にかけての一部のみ検出した。流路は東南東―西北西方向で、長さが 9 m以上、幅が 0.75 m以上、最深で 74cmを測る。底面は西北西に向かって低くなり、法面の大部分は直線的に傾斜するが、東南端付近では、斜面に段をもつ。遺物は、須恵器、土師器（55 ～ 59）、砥石が出土した。なお、北側の調査区外の地表上には、流路方向を同じくする自然水路が通っており、SD 1 を踏襲する可能性がある。

⑤柱穴

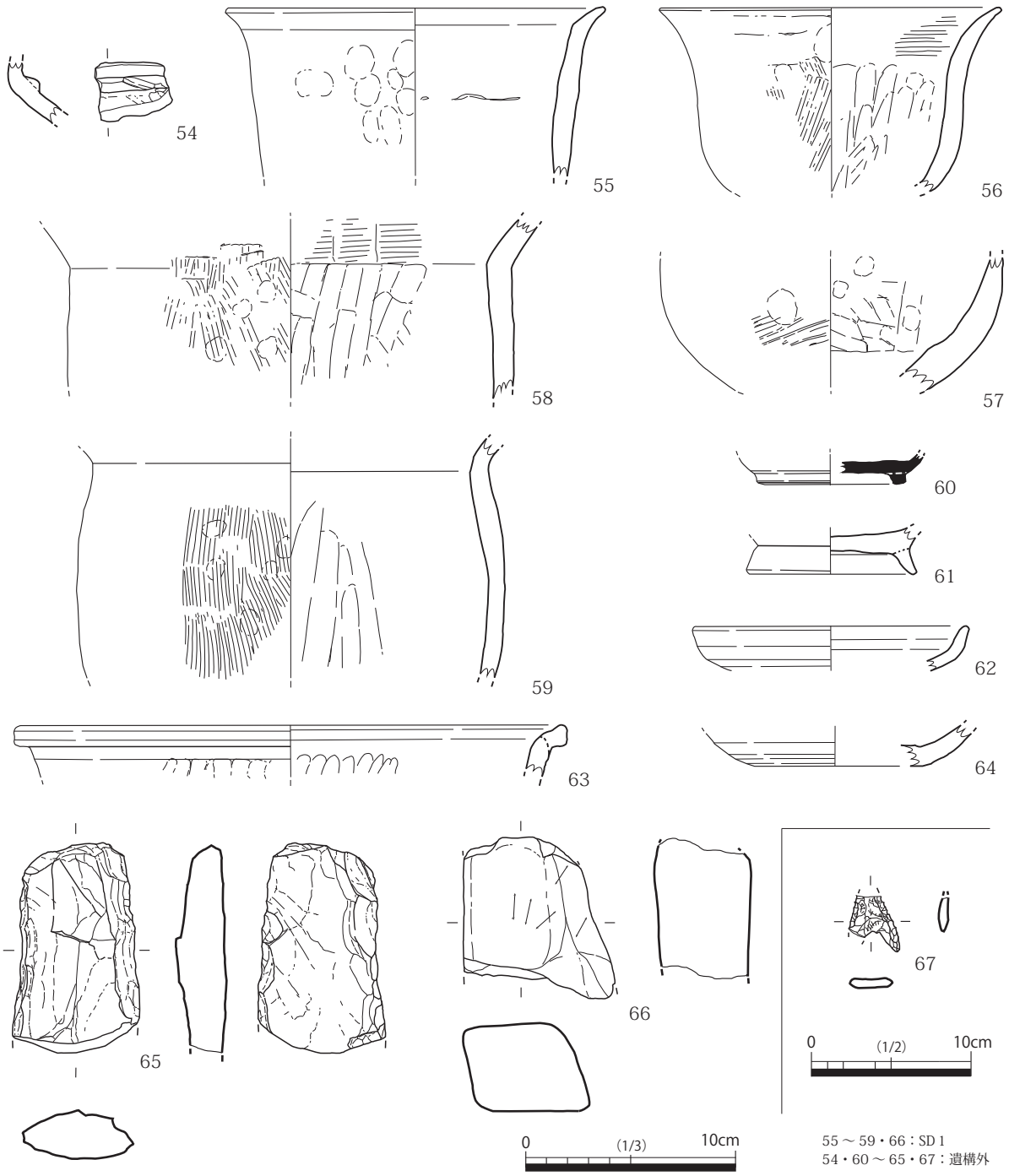
規模は、径が 10 ～ 45cm で大小がある。柱穴の組み合わせによる掘立柱建物の復元はできなかったが、一部が竪穴建物に付随する。遺物が出土した柱穴は、SI 1 内の SP 1・2・4、それ以外では SP15・26・30 の 3 個があり、いずれも土師器や炭の小片が出土している。

（3）遺物

弥生土器、須恵器、土師器、石製品、木炭があり、土器類は全て破片で、数量は総じて少ない。54・60 ～ 65・67 は遺構外、55 ～ 59・66 は SD 1 から出土した。54 は弥生土器の壺の頸部で、外面に斜めに刻みを施し



第 32 図　5 区溝 SD 1 実測図



第 33 図　5 区出土遺物実測図

た突帯が貼り付く。外面に丹塗りを認める。55 ～ 59 は土師器で、いずれも器表が摩滅する。55 ～ 57 は鉢で、56 は内外面に煤が付着する。57 は胴部下位で、厚みがある。58･59 は甕の胴部である。60 は須恵器で、貼付高台をもつ。61 は土師器の椀で、外底面を回転糸切りする。62 は土師器の皿で、胎土が精良で、内外面にわずかに丹塗りの痕跡がある。63 は土師器の鍋で、外反する短い口縁を有する。内外面に多くの指頭圧痕が残る。64 は青磁の椀と考える底部で、内面に釉溜まりがある。65 は打製石斧で、刃部側が欠損する。基部及び両側縁は調整剥離によって成形する。砂質片岩製である。66 は砥石で、上下部面は欠損するが、残存する 4 面全てを砥面に使用する。火山岩または凝灰岩製である。67 は凹基式の石鏃で、周縁は細かい調整剥離を施す。安山岩製である。

第１表　堀の内遺跡出土土器・陶磁器観察表（１）

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm）口径（復元値）	器高（残存値）	底径（復元値）	最大径（復元値）	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
1	8	8	道場・中村遺跡（TR66）	土師器	壺	9.2	(7.1)	—	残存部（14.0）	粗	良	にぶい赤褐色　2.5YR5/3 にぶい赤褐色　2.5YR5/3	指オサエ、粗いナデ ハケ、ヨコナデ	
2	8	8	川東遺跡（TR79）	須恵器	杯	—	(1.5)	9.4	—	やや密	良	灰白色　N7/ 灰白色　N7/	回転ナデ 回転ナデ	ヘラ切り 外底面にヘラ記号「—」か
3	8	8	川東遺跡（TR98）	須恵器	高杯	—	(4.2)	—	残存部（7.6）	やや粗	良	灰白色　N6/ 灰白色　N6/	ナデ、回転ナデ 回転ナデ	
4	8	8	土井敷遺跡（TR15）	須恵器	高杯	—	(4.9)	脚裾径 13.7	—	やや密	良	灰色　5Y6/1 灰色　5Y6/1	回転ナデ 回転ナデ	
5	8	8	道場・中村遺跡（TR57）	土師器	皿	7.9	1.4	5.4	8.1	やや粗	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/4	回転ナデ、回転ヘラケズリ 粗いナデ	回転糸切り 作りが粗い
6	8	8	川東遺跡（TR79）	瓦質土器	足鍋	—	(9.6)	—	—	やや粗	やや良	灰白色　N7/ 灰白色　N8/～灰色　N5/	同心円叩き、ナデ 指オサエ、指ナデ	外面煤付着
7	8	8	道場・中村遺跡（TR39）	瓦質土器	足鍋	—	(10.0)	—	—	密	良	灰白色　2.5Y8/1 灰白色　2.5Y8/1	ナデか 指オサエ、指ナデ	
8	8	8	川東遺跡（TR68）	青磁	椀	—	(3.1)	5.8	—	—	良	施釉　オリーブ灰色 10Y6/2 露胎　灰色　N6/	回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ	
13	22	18	1 区 SP108	弥生土器	甕	(23.0)	(9.0)	—	(12.6)	粗	良	灰白色　10YR8/2 黄橙色　7.5YR7/8	器面全体が摩滅する 表面剥離も一部あり	
14	22	18	1 区排土	白磁	椀	15.4	(1.95)	—	—	—	良	灰色　7.5Y7/1 灰色　7.5Y7/1		
19	22	19	2 区 SP143	弥生土器	壺	—	(7.6)	—	—	粗	不良	灰白色　7.5YR8/1 灰白色　7.5YR8/1		
20	22	18	2 区遺構検出面	弥生土器	甕	(21.6)	4.9	—	—	粗	やや良	明褐灰色　7.5YR7/1 灰褐色　7.5YR6/2	ナデ、ハケ ハケ	
21	22	18	2 区 SP65	須恵器	杯身	—	(2.3)	—	—	やや密	良	青灰色　5PB6/1 青灰色　5PB6/1	回転ナデ 回転ナデ	
22	22	19	2 区 SP79	土師器	皿	8.2	1.85	6.0	8.4	やや粗	不良	浅黄橙色　7.5YR8/6 浅黄橙色　7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
23	22	19	2 区 SP41	土師器	皿	8.4	1.8	4.5	8.6	やや粗	やや良	黄橙色　7.5YR8/8 黄橙色　7.5YR8/8	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
24	22	19	2 区遺構検出面	土師器	台付皿	—	(6.8)	5.8	—	やや密	不良	灰白色　7.5YR8/2 灰白色　7.5YR8/2		底部糸切りか
25	22	19	2 区 SP48	須恵質土器	鉢	—	(9.5)	—	—	やや密	良	灰色　N6/ 灰色　N6/	回転ナデ 回転ナデ	口縁部に自然釉がかかる
26	22	18	2 区遺構検出面	白磁	椀	—	(1.5)	—	—	—	良	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　7.5Y7/1	回転ナデ 回転ナデ	玉縁口縁
30	22	17	3 区 SD1	須恵器	壺	—	(9.7)	—	—	やや密	良	青灰色　5PB6/1 暗青灰色　5PB4/1	回転ナデ 回転ナデ	回転方向は時計回り
31	22	19	3 区 SD1	瓦質土器	鉢	(26.6)	(2.5)	—	—	やや粗	不良	暗灰色　N3/ 灰白色　N8/	ハケ ナデか	
32	27	24	4 区 SK2	弥生土器	壺または甕	—	(3.0)	—	—	粗	良	橙色　5YR6/6 橙色　2.5YR6/8		底部指オサエ
33	27	24	4 区北東隅遺物包含層	弥生土器	甕	(20.8)	(2.7)	—	—	粗	不良	黄灰色　2.5YR4/1 黄橙色　7.5YR7/8		
34	27	24	4 区 SK5 南半	須恵器	杯蓋	—	(2.1)	—	—	やや粗	良	青灰色　5PB5/1 青灰色　5PB6/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転方向は反時計回り
35	27	24	4 区 SK5 南半	須恵器	杯蓋	(12.6)	(5.3)	—	—	やや粗	良	青灰色　5PB5/1 青灰色　5PB5/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ	
36	27	24	4 区北東隅遺物包含層	須恵器	杯身	—	(2.8)	—	(12.6)	密	良	青灰色　5PB6/1 青灰色　5PB6/1	回転ナデ 回転ナデ	
37	27	24	4 区 SD1	須恵器	杯	—	(1.8)	(7.5)	—	やや密	良	青灰色　5PB6/1 青灰色　5PB6/1	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
38	27	24	4 区遺構検出面	瓦質土器	鍋	—	(4.0)	—	—	やや粗	良	灰色　N6/ 黄灰色　2.5Y6/1	ヨコナデ、指オサエ ヨコナデ	
39	27	24	4 区遺構検出面	瓦質土器	鍋	—	(5.3)	—	—	やや密	不良	浅黄橙色　7.5YR8/3 黒褐色　7.5YR3/1	ナデか ナデ、指頭圧痕	外面に煤付着
40	27	24	4 区遺構検出面	白磁	椀	—	(3.5))	7.4	—	—	良	施釉　灰白色　10Y7/1 露胎　灰白色　7.5Y8/1	回転ヘラケズリ	
41	27	24	4 区 SK6 埋土下層	白磁	椀	—	(1.75)	—	—	—	良	施釉　灰白色　7.5Y7/2		
42	27	24	4 区 SK5 下位	陶器	椀	(10.4)	(2.4)	—	—	密	良	施釉　灰白色　10YR8/1 施釉 にぶい黄色 2.5Y6/3	回転ナデ 回転ナデ	萩焼、藁灰釉
43	27	24	4 区 SK6 埋土下層	陶器	椀	(10.8)	(3.8)	—	11.2	密	良	明オリーブ灰色 2.5GY7/1 明オリーブ灰色 2.5GY7/1	回転ナデ 回転ナデ	萩焼（深川窯）
54	33	32	5 区遺構検出面	弥生土器	壺	—	(2.8)	—	—	やや密	良	にぶい黄橙色　10YR7/4 にぶい黄橙色　5YR7/4	ヨコナデ	外面に丹塗り
55	33	32	5 区 SD1 埋土	土師器	鉢か	(17.8)	(7.9)	—	—	密	良	橙色　7.5YR7/6 にぶい橙色　7.5YR7/4	ナデ、指頭圧痕	内面の摩滅が著しい
56	33	32	5 区 SD1 埋土	土師器	鉢	(15.8)	(8.7)	—	—	密	良	灰黄褐色　10YR6/2 にぶい橙色　7.5YR6/4	ヨコハケ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	表面やや摩滅 内外面に煤付着
57	33	32	5 区 SD1	土師器	鉢	—	(6.2)	—	16.2	やや密	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	ヘラケズリ、ナデ、指頭圧痕 ハケ目、ナデ、指頭圧痕	表面は摩滅する
58	33	33	5 区 SD1	土師器	甕	—	(8.4)	—	—	やや密	良	浅黄橙色　10YR8/3 にぶい橙色　7.5YR7/4～にぶい橙色　10YR7/4	ヨコハケ、ヘラケズリ ナデ、ハケ目	外面やや摩滅する

第２表　堀の内遺跡出土土器・陶磁器観察表（２）

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm）				胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
						口径（復元値）	器高（残存値）	底径（復元値）	最大径（復元値）					
59	33	33	5 区 SI1 － SP4 上	土師器	甕	—	（11.3）	—	（20.2）	やや密	良	にぶい黄橙色　10YR7/4 浅黄橙色　10YR8/4 ～ 黒褐色　10YR3/1	ヘラケズリ ハケ目、指頭圧痕	内面は摩滅が著しい
60	33	32	5 区壁面	須恵器	杯身	—	（1.4）	（7.0）	—	やや密	良	灰白色　10Y7/1 灰白色　10Y7/1	ヨコナデ後不定方向ナデ、ヨコナデ ヨコナデ	底部ヘラ切り後一部ハケ状圧痕 貼付高台
61	33	32	5 区表土	土師器	高台杯	—	（2.2）	—	—	やや密	良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/4	ヨコナデ	摩滅が著しい 回転糸切りか
62	33	32	5 区遺構検出面	土師器	皿	（12.6）	（2.1）	（11.6）	—	密	良	にぶい黄橙色　10YR7/2 にぶい黄橙色　10YR7/2	ヨコナデ ヨコナデ	内外面にかすかに丹塗り痕 回転ヘラケズリ
63	33	33	5 区表土	土師器	鍋	（25.4）	（2.4）	—	（26.0）	やや密	良	灰白色　10YR8/2 ～ にぶい黄褐色　10YR8/3 灰白色　10YR8/3 ～ 淡赤橙色　2.5YR7/3	回転ナデ、指頭圧痕 回転ナデ、ナデ、指頭圧痕	
64	33	33	5 区表採	青磁	椀か	—	1.9	—	—	—	良	灰オリーブ色　5Y6/2 灰オリーブ色　5Y6/2	回転ナデ 回転ヘラケズリか	

第３表　堀の内遺跡出土瓦・土製品観察表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm）				胎土	焼成	色調	主な調整	備考
						長さ（残存値）	幅（残存値）	厚さ	最大径					
9	8	8	川東遺跡（TR109）	瓦	丸瓦	（3.8）	—	2.0	—	やや密	良	凹面　灰白色　N7/	布目圧痕 ヘラナデ	
10	8	8	道場・中村遺跡（TR66）	土製品	支脚	（17.4）	—	—	2.6 × 2.4	粗	良	上部　橙色　2.5YR6/8 下部　にぶい黄橙色　10YR7/2	手づくね、指頭圧痕、一部粗いナデ	
44	27	—	4 区 SK5	瓦	平瓦	（11.0）	（6.8）	1.9	—	密	良	凹面　灰色　N4/ 凸面　灰色　N6/	ナデ ナデ	
45	27	25	4 区 SK5	瓦	平瓦	（14.1）	（7.9）	1.75	—	密	不良	両面　浅黄橙色　7.5YR8/6	ナデ ナデ	
46	27	25	4 区 SK5 南半	瓦	平瓦	（15.6）	（8.2）	2.2	—	密	良	凹面　灰白色　10Y7/1 凸面　灰色　N4/	ナデ ナデ	
47	27	25	4 区 SK6	瓦	平瓦	（9.8）	（7.6）	1.7	—	密	良	凹面　灰色　N5/ 凸面　灰色　N6/	ナデ	
48	27	25	4 区 SK6	瓦	平瓦	（7.6）	（5.3）	1.65	—	やや密	良	凹面　灰色　N4/ 凸面　灰色　N5/	ナデ ナデ	
49	27	26	4 区 SK6 南半	瓦	平瓦	27.4	24.5	1.7	—	やや密	良	両面　暗青灰色　5P4/1	ナデ	器表に一部光沢あり 滑り止め付

第４表　堀の内遺跡出土石製品・鉱滓観察表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	法　量（cm）			重さ（g）	石材	備　考
					長さ（残存値）	最大幅	最大厚			
11	8	8	道場・中村遺跡（TR68）	磨石	（6.4）	9.8	5.75	425	花崗岩	
12	8	8	表採	鉱滓（からみ）	3.4	2.5	1.6	14.6	—	摩滅する
15	22	18	1 区 SP108	敲石（磨石）	9.9	6.6	4.8	470.0	砂岩	
16	22	18	1 区 SD101	石鏃	1.25	1.3	0.3	0.3	安山岩	風化する
17	22	18	1 区中央部遺構検出面	石鏃	1.65	1.4	0.3	0.6	安山岩	
18	22	18	1 区 SB2 付近 遺物包含層	石鏃	1.6	1.9	0.45	0.9	安山岩	風化する
27	22	19	2 区遺構検出面	磨石	10.2	8.4	3.2	610	砂岩	
28	22	19	2 区遺構検出面	石鏃	2.3	—	0.4	0.9	黒曜石	
29	22	19	2 区遺構検出面	剥片	3.4	1.8	0.4	2.7	黒曜石	一部自然面を残す
50	27	26	4 区 SK5 南半床面	用途不明品	6.1	3.1	1.1	23.3	凝灰岩か	
51	27	26	4 区北東隅 遺物包含層	打製石斧	8.7	4.3	1.3	68.7	緑色片岩	未製品
52	27	26	4 区耕土下	石鏃	（1.5）	1.5	0.6	1	黒曜石	姫島産
53	27	26	4 区遺構面上 遺物包含層	石鏃	（2.2）	2.6	0.5	2.6	安山岩	
65	33	33	5 区表土	打製石斧	（9.7）	6	2.3	190	砂質片岩	
66	33	33	5 区溝 SD1	砥石	（6.2）	7	4.1	330	火山岩または凝灰岩	4 面すべて砥面として利用
67	33	33	5 区 SB 上位 遺物包含層	石鏃	（1.8）	2.0	3	0.5	安山岩	

Ⅳ　川東遺跡の調査成果

1　遺跡の概要

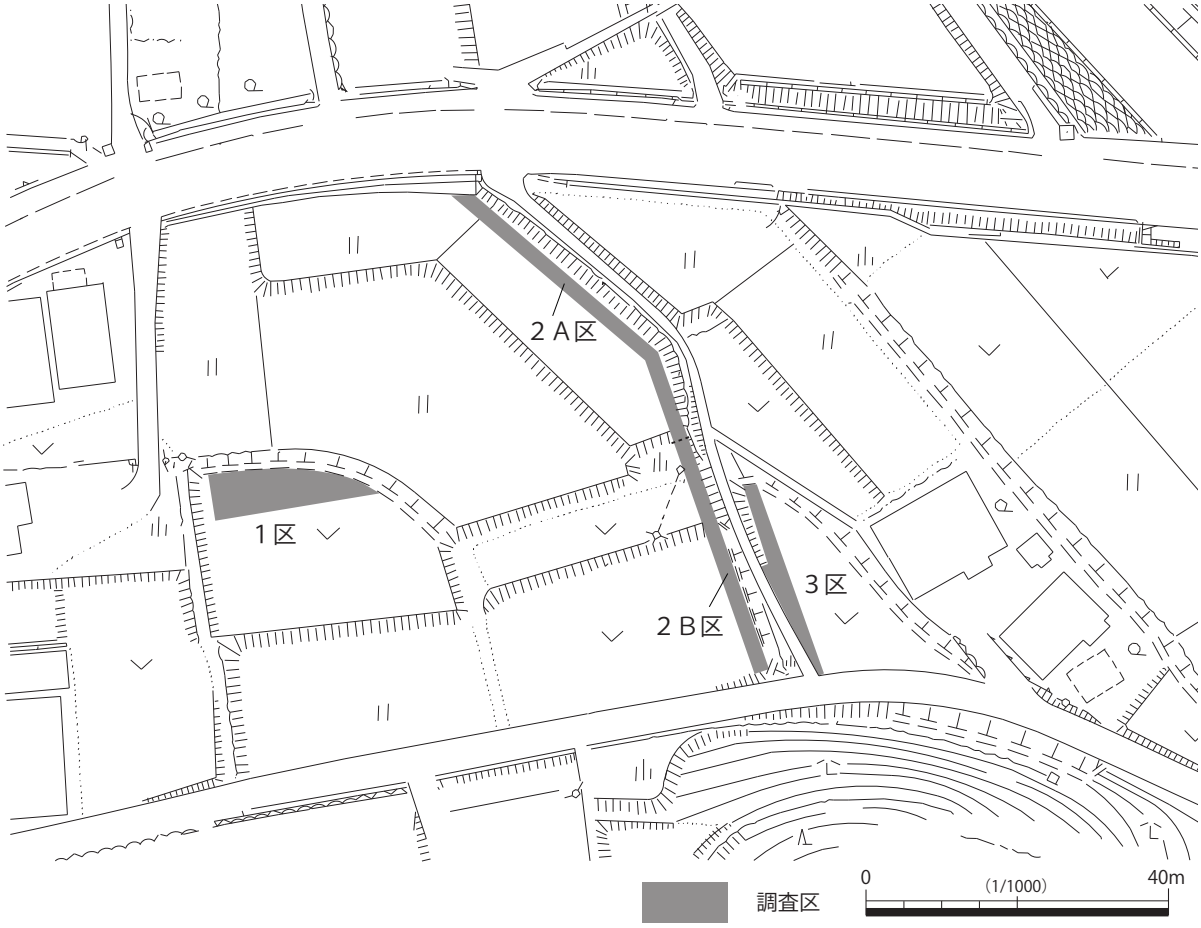
（1）概要（第 34 図、図版 34・35）

川東遺跡は、本郷盆地の北東域、本郷川が大きく湾曲して、北方向から南東方向に流れを変える付近の右岸に位置する。遺跡は、向山から北方の盆地床に向かって伸びる舌状丘陵の北西端に広がり、調査区はその北寄り、標高 76.0 ～ 79.0 m付近の低地部から低丘陵部にかけて立地する。

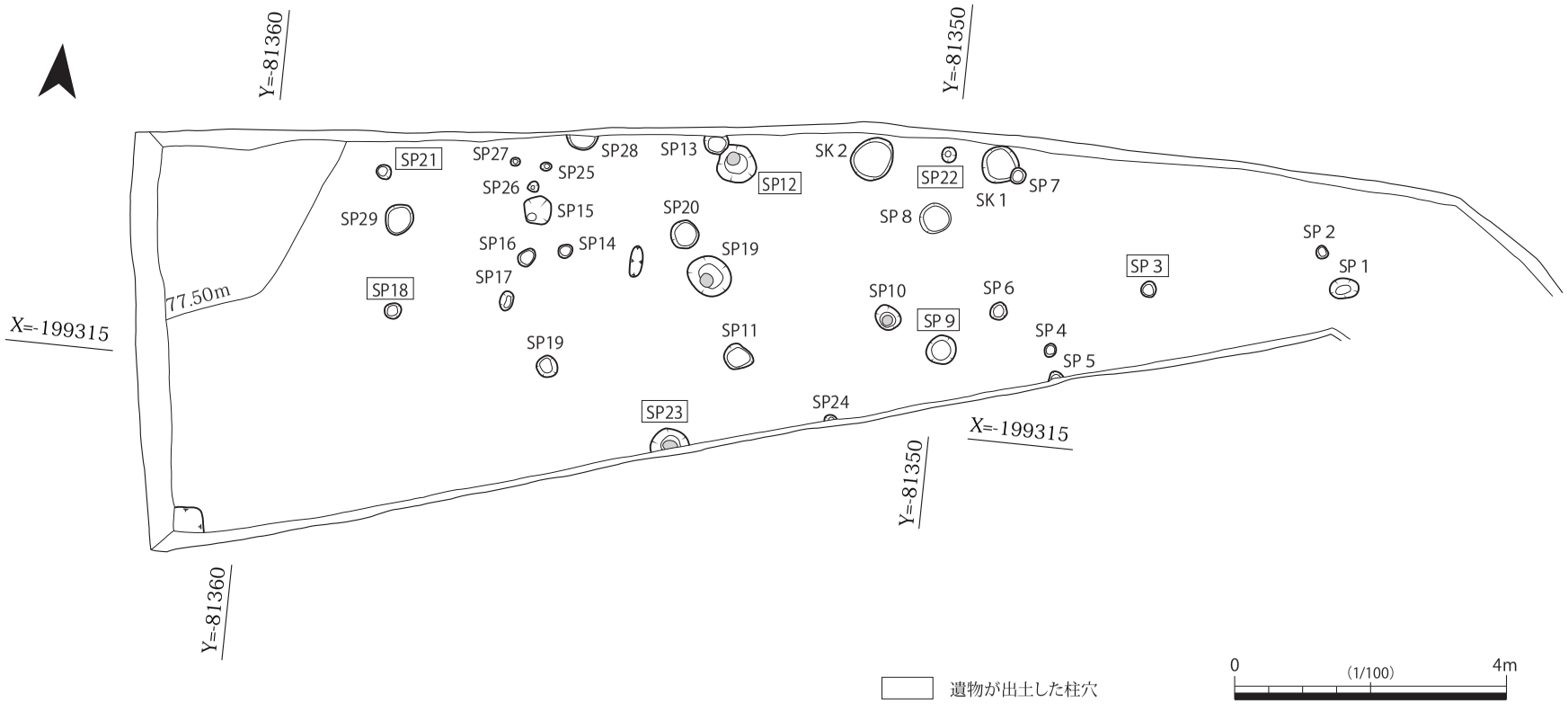
調査区は、大きく３箇所に分かれており、西から１区、２区、３区と呼称する。そのうち、２区は概ね北西－南東方向に細長く、低地部と丘陵上で様相が大きく異なるため、標高 78.0 m付近を境に、それより北西側の低地部～丘陵斜面を２Ａ区、南東側の丘陵上を２Ｂ区に分けることとした。検出した遺構は、全地区を合わせて、土坑 14 基、溝５条、柱穴 122 個以上がある。遺物は、須恵器、土師器、瓦質土器、白磁、青磁、砥石、鞴羽口、取鍋、鉱滓等がある。時期は、古代から中世にかけてで、中世の遺物が主体である。

（2）層序

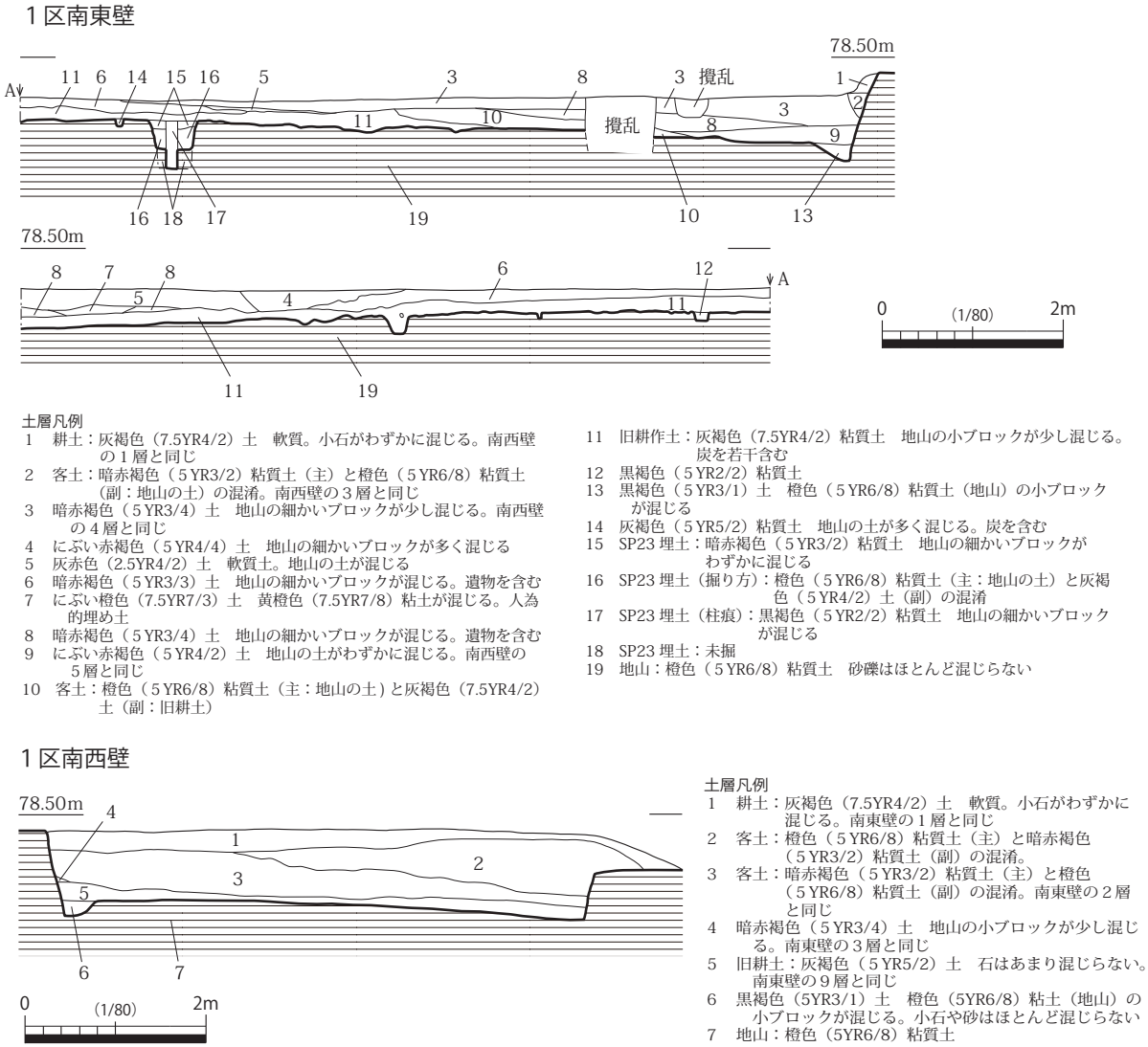
調査前の現況は、２Ａ区が田圃、他が畑地であり、後世の圃場造成のため、表土下は大部分が客土となっていた。１区では地山の直上に薄い旧耕土層を認めた。２Ａ区の北西隅付近の地山直上は、造



第 34 図　川東遺跡調査区設定図



第 35 図　1 区遺構配置図



第 36 図　１区南東壁・南西壁土層断面図

成の影響を比較的受けておらず、一部に遺物包含層を認めた。２Ｂ区と３区は、造成の影響が地山に及んでいた。２Ｂ区では、地山の攪乱を埋め戻して、擬地山状を呈しており、３区では、他地区に比べて、地山が大きく削平を受けていた。遺構は各地区とも地山面で検出した。

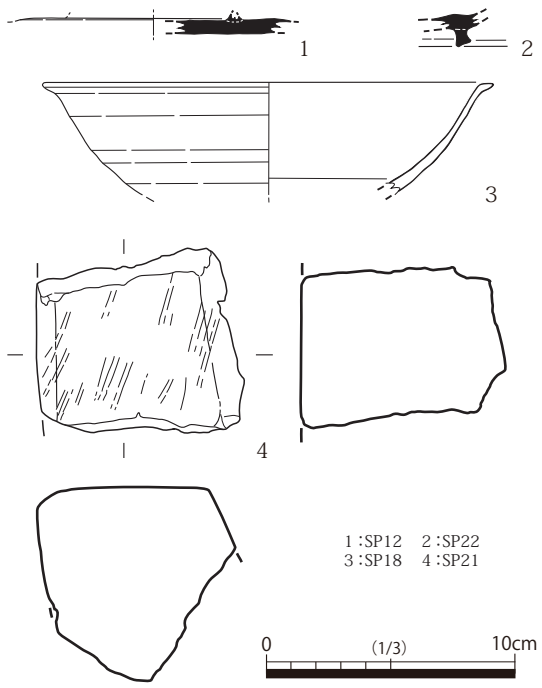
２　１区の調査

（１）概要（第 35・36 図、図版 36 ～ 38）

１区は、遺跡南側の丘陵部から北側の低地部に向かって緩やかに下降する裾部付近に当たり、標高が 77.5 m付近のほぼ平坦面に立地する。調査区は、平面形が三角形に近く、ほぼ直角に交わる２辺の長さが、それぞれ南北方向で約６m、東西方向で約 21 mの範囲を対象とする。層序は、表土が約 20cm、その下層は客土が 40 ～ 60cm 程度堆積しており、調査区北西寄りで厚くなる。客土下には、旧耕土が約 20cm 程度、堆積する。現地表面から地山面までの高低差は、最大で約１mである。

（２）遺構

調査区の西寄りは希薄で、中央部に集中する。土坑２基、柱穴 29 個がある。以下、主な遺構につ



第 37 図　１区出土遺物実測図

いて述べる。

①柱穴

29 個を検出した。大部分は小規模で、深さも 10cm 以下と浅い。埋土は、暗褐色または黒褐色系土が主体である。このうち、柱痕を残す柱穴は、SP10・12・19・23 の 4 個である。柱の組み合わせによる掘立柱建物等の復元はできなかった。

また、遺物が出土した柱穴は、SP ３・９・12・18・21 ～ 23 の 7 個である。時期は、出土遺物から、古代を主体とすると考える。なお、SP18 出土の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果は、960 ± 20yrBP で、暦年較正年代（1 δ）は 1025 ～ 1147calAD の範囲と、古代末～中世初期の年代を示していた。

SP12・19・23（第 35・36 図、図版 38）

調査区中央付近に位置し、ほぼ南北方向に３個の柱穴が並ぶ。いずれも平面形がわずかに楕円形を呈し、規模は、SP12 の長径が 57cm、短径が 56cm、SP19 の長径が 64cm、短径が 54cm で、SP23 は長径が 56cm を測る。いずれも直径が 20cm 程度の柱痕を残しており、南東壁際にある SP23 埋土の観察から、柱痕埋土は黒褐色粘質土で、その周囲を地山の橙色粘質土を主体とする土で固めていた。柱の抜き取り痕等は確認できなかった。各柱穴の芯々間距離は、SP12 と SP19 間が 1.83 m、SP19 と SP23 間が 2.50 m と等間隔にはならない。これらの柱穴の列と対称となる柱列も検出できないため、掘立柱建物等を構成しないと考える。遺物は、SP12 から土師器片や須恵器の杯蓋（１）、SP23 から土師器小片が出土した。遺構の時期は、８～９世紀代と考える。

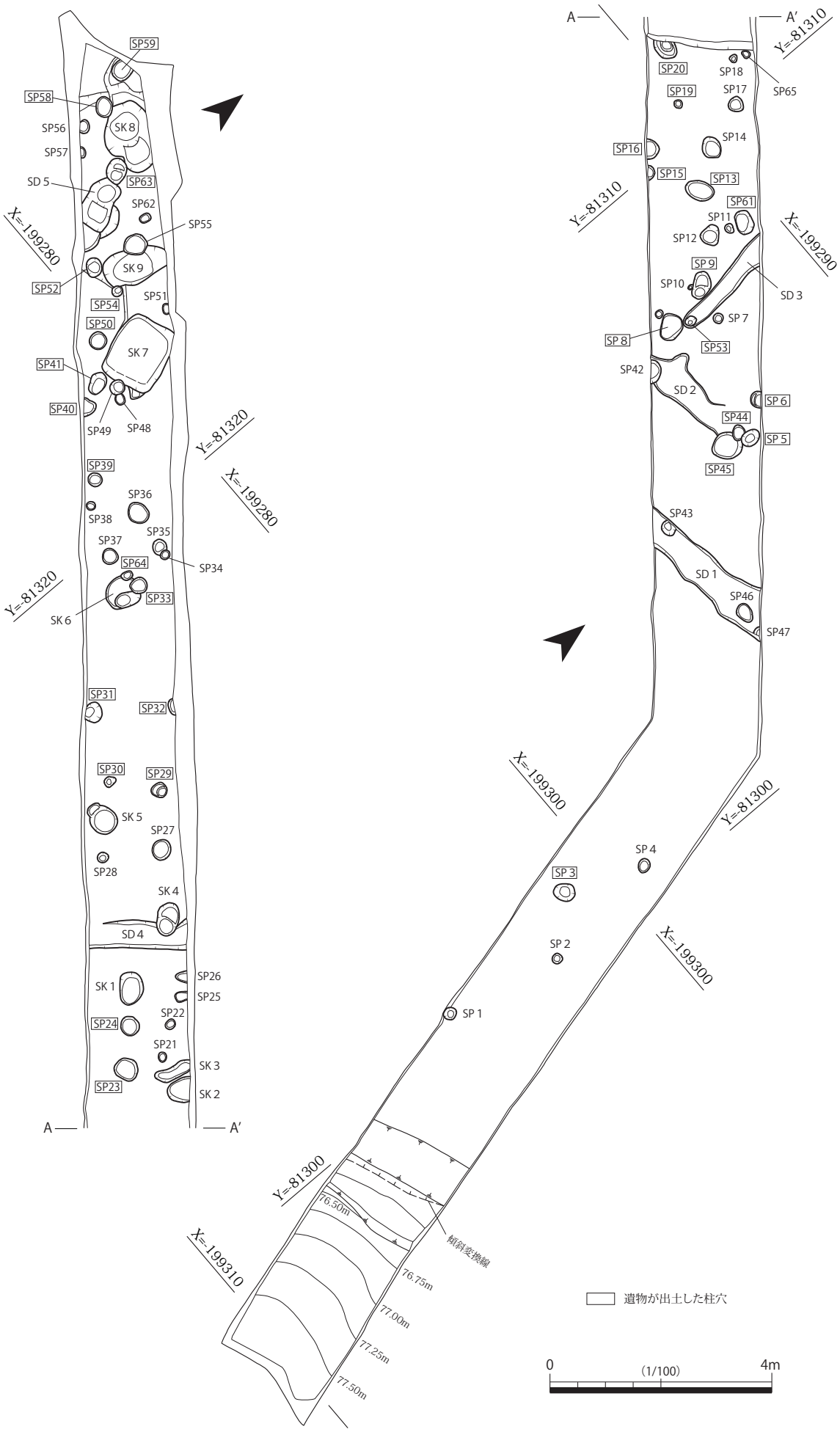
（３）遺物（第 37 図、図版 38）

須恵器、土師器、白磁、砥石等がある。出土数は少ない。１と２は須恵器である。１は SP12 出土の杯蓋で、輪状つまみをもつ。２は SP22 出土の杯身の高台部分である。１・２はいずれも８世紀代に比定できる。３は SP18 出土の白磁の椀の破片で、口縁端部がわずかに外反する。12 世紀頃と考える。４は SP21 出土の砥石片で、砥面は表面と両側面の３面があり、裏面は欠損する。石材は、流紋岩の可能性が高い。

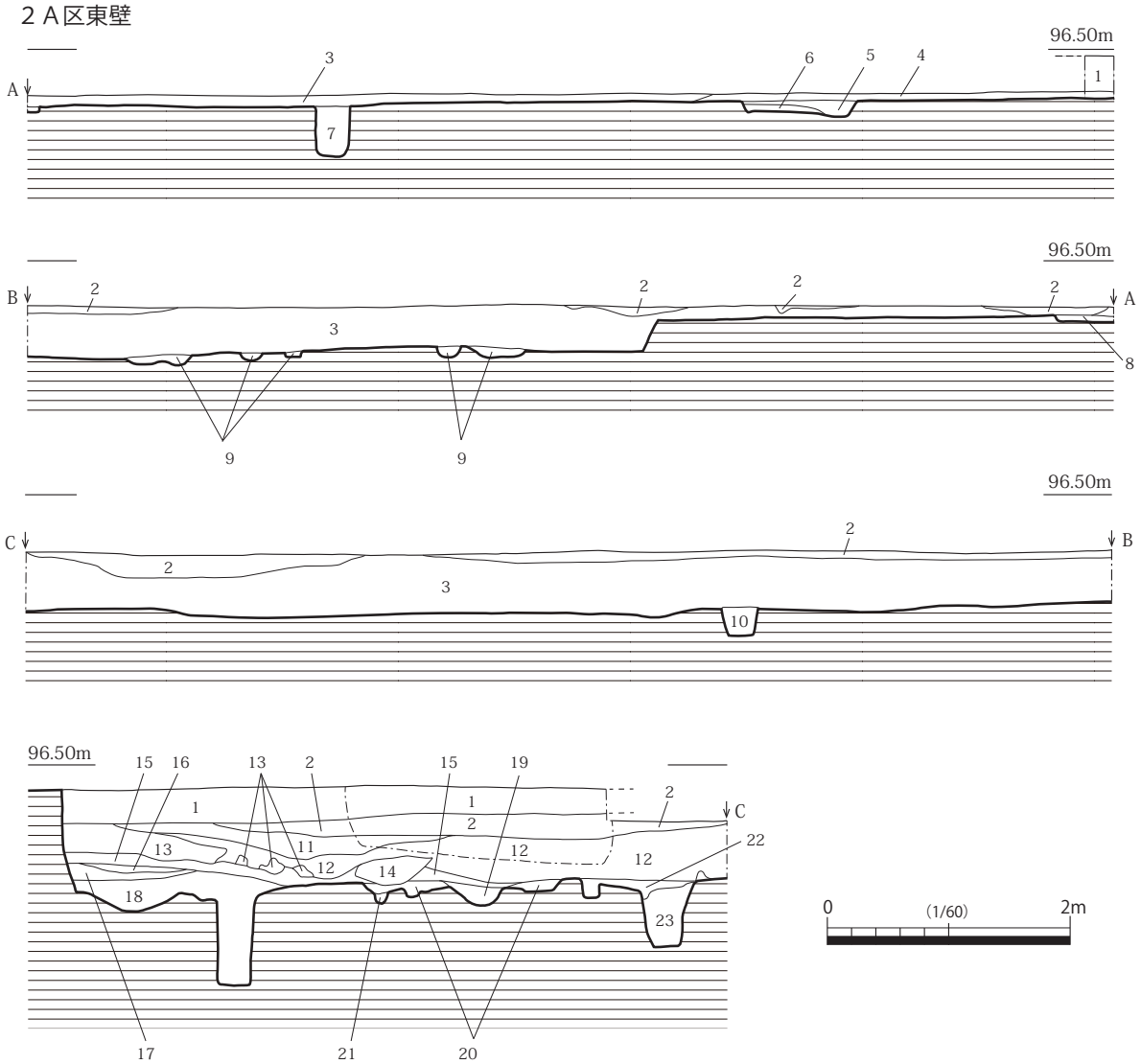
３　２Ａ区の調査

（１）概要（第 38・39 図、図版 39・40）

２区のうち、南側丘陵先端部の北斜面から北西側の低地部にかけての範囲である。標高が 76.0 m 付近の平坦な低地面を主体とし、北西隅付近で緩やかに北西側に向かって下降する。調査区は、長さが約 45 m、幅が２ｍの細長い範囲で、調査区の南東寄りで角度を変え、それより南東側が北北西－



第 38 図　２Ａ区遺構配置図



土層凡例
1　耕土：灰褐色（7.5YR5/2）土
2　客土：灰褐色（5YR4/2）粘質土～橙色（5YR7/8）粘質土
3　客土：灰褐色（5YR4/2）粘質土　地山と黒褐色（7.5YR3/1）粘質土の小ブロックが混じる。小石が混じる
4　床土（盤土）：橙色（5YR7/8）粘質土
5　SD１埋土：褐灰色（5YR5/1）粘質土　炭・小石が混じる
6　SD１埋土：にぶい褐色（5YR6/4）粘質土　地山の小ブロックが混じる
7　SP６埋土：暗赤褐色（5YR3/2）粘質土　地山ブロックが混じる。炭・土器片が混じる
8　SD３埋土：褐灰色（5YR5/1）粘質土
9　SK２・３、SP25・26、SD４埋土：褐色（5YR4/3）土　地山の土が混じる
10　SP32 埋土：黒褐色（5YR2/2）粘質土　炭・土器片が混じる
11　客土：黒褐色（5YR3/1）粘質土　地山の土がわずかに混じる。炭が混じる
12　客土：褐灰色（5YR5/1）粘質土
13　客土：橙色（5YR7/8）粘質土　地山の二次堆積
14　客土：明赤褐色（2.5YR5/8）粘質土
15　客土：灰褐色（2.5YR5/2）粘質土　細炭がわずかに混じる
16　客土：黒褐色（5YR3/1）粘質土　地土の土がわずかに混じる
17　客土：暗赤褐色（5YR3/2）粘質土と橙色（5YR7/8）粘質土（地山の土）の混淆
18　遺物包含層・SK８埋土：黒褐色（5YR3/1）粘質土　橙色（5YR7/8）粘質土（地山の土）の小ブロックが混じる。炭が混じる
19　遺構埋土：黒褐色（5YR3/1）粘質土と橙色（5YR7/8）粘質土（地山の土）との混淆。遺物を含む
20　遺構埋土：褐灰色（5YR4/1）粘質土
21　遺構埋土：暗赤褐色（5YR3/2）粘質土
22　黒褐色（5YR3/1）粘質土　地山の土がわずかに混じる
23　SK７埋土

第 39 図　２Ａ区東壁土層断面図

南南東方向、北西側が北西－南東方向となる。層序は、表土が約 40cm であり、その下層は、地山面までの大部分が客土となる。調査区北西寄りの北東壁の観察から、客土の厚さは、調査区中央付近にある段差の南東側では約５cm、その北西側では 15 ～ 30cm 程度となり、北西隅付近で最も厚くなる。調査区北西隅には一部、遺物包含層となる黒褐色粘質土層がみられる。現地表面から地山面までの高低差は、最大で約 80cm である。

（２）遺構

遺構は、調査区南東隅の丘陵斜面には皆無で、低地部でも、調査区の屈曲部より南東側は希薄であ

る。屈曲部より北西側に多く分布し、とくに調査区北西隅付近に密集する。検出した遺構は、土坑が10基、溝が5条、柱穴が65個である。以下、主な遺構について述べる。

①土坑（第38図）

10基を検出した。平面形が楕円形（SK 1・2・6・8）・円形（SK 4・5・10）・隅丸方形（SK 7）・不整形（SK 3・9）のものがある。古代から中世にかけてのものと考える。なお、SK 5出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）の結果は、870±20yrBPで、暦年較正年代（1δ）は1160～1210calADと、中世前期の年代を示す。また、同土坑出土の炭化材の樹種は、二次林に多いヒサカキ属で、薪炭木等として利用されたものである［第Ⅵ章参照］。

SK 7（第40図、図版41・42）

調査区北西寄りに位置する。平面形は隅丸方形で、断面形は壁面と底面との境が緩やかな逆台形状を呈し、底面は両壁から中央に向かって緩やかに下降する。検出面での規模は、長さが1.25 m、幅が1.05 mで、底面での規模は、長さが1.03 m、幅が0.90 mを測る。検出面から底面までの深さは0.55 mである。主軸方向は、N 25°Wである。埋土は10層からなり、褐色系と橙色系の粘質土を主体とする。最下層の10層では炭が多く混じる。遺物は、須恵器杯（7）と土師器杯（11）・皿等が出土した。遺構の時期は、8～9世紀と考える。遺構の性格は不明である。

②溝（第38図）

5条を検出した。SD 1～SD 4は、検出面での幅が30～80cm程度で、検出面から底面までの深さは、いずれも5cm程度と浅い。SD 5は、深さが最深で約80cmと深く、底面が段状になる。遺物は、SD 1から土師器皿（13・14）・土師器杯（19）・青磁椀（20）・木炭等が、SD 5から土師器皿（15～18）・土師器杯・瓦質土器火鉢（22）・鞴羽口（21）・木炭等が出土したほか、SD 3でも土師器小片が出土した。いずれも中世の溝と考える。

③柱穴

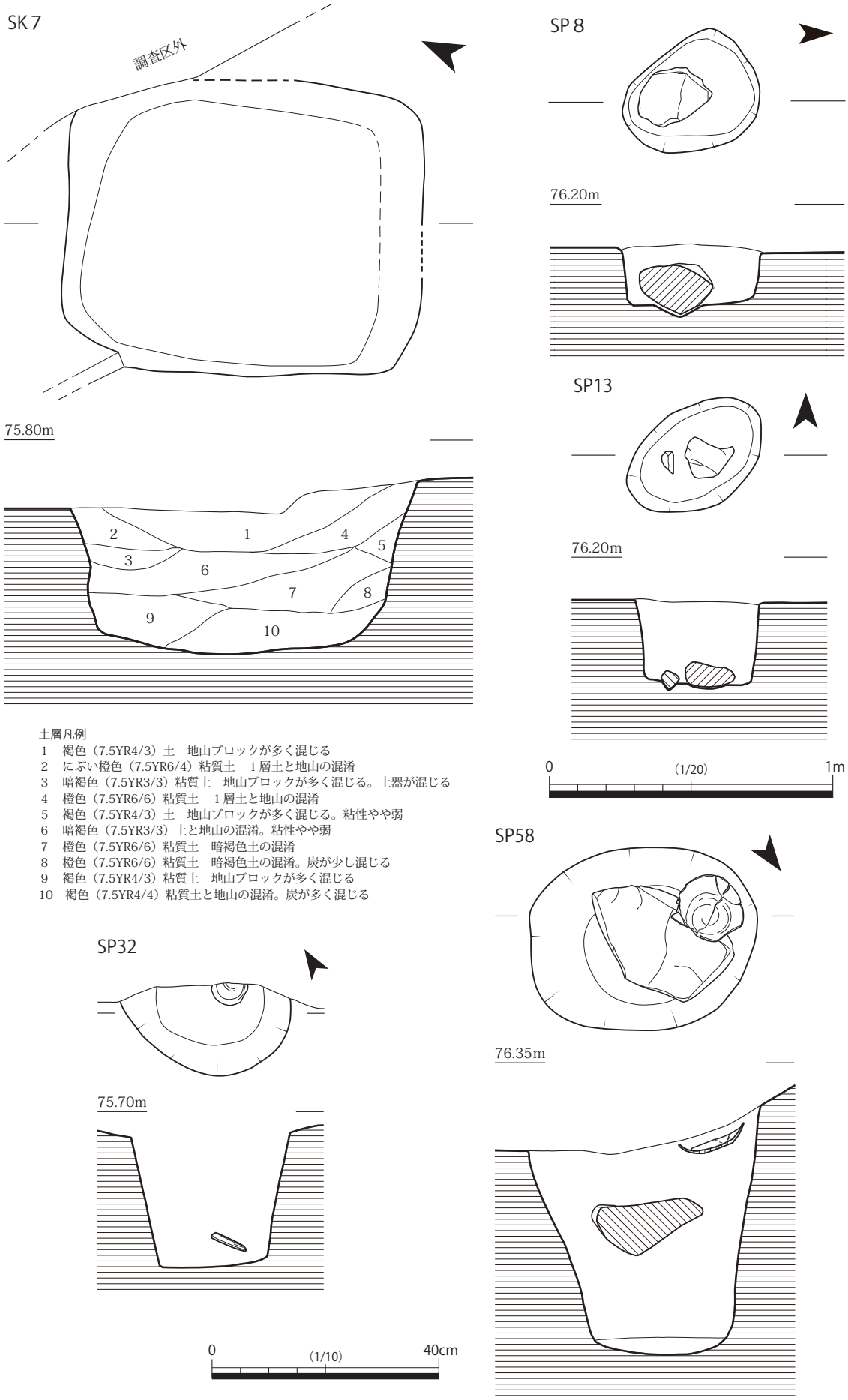
65個を検出した。平面形は円形や楕円形があり、規模は直径が10～20cm程度から、直径が40～50cm程度のものまである。埋土は、褐色系土を主体とし、大部分の柱穴で炭や焼土が混じっていた。柱穴の組み合わせによる掘立柱建物等の復元はできなかった。遺物が出土した柱穴は、SP 3・5・6・8・9・11・13・15・16・19～21・23・24・27・29～33・39～41・43～45・49・50・52～55・58～61・63～65の39個と多い。遺構の時期は、中世を主体とすると考える。なお、SP53出土炭化材の樹種は、SK 5と同様、ヒサカキ属であった。

SP 8（第40図、図版42）

調査区中央付近の南西壁寄りに位置し、北端を溝SD 3と接する。平面形は、北西側が膨らむ不整楕円形である。規模は長径が48cm、短径が最大で42cmであり、検出面からの深さは21cmを測る。埋土は褐色土の単層で、炭と焼土が少し混じる。底面を掘り込んで、根石を据えていた。根石は、平面形が不整形で、最大長が26cm、最大厚が17cmを測り、平坦な面を上に向ける。遺物は、土師器皿（26）等が出土した。遺構の時期は、14世紀中頃～後半頃と考える。

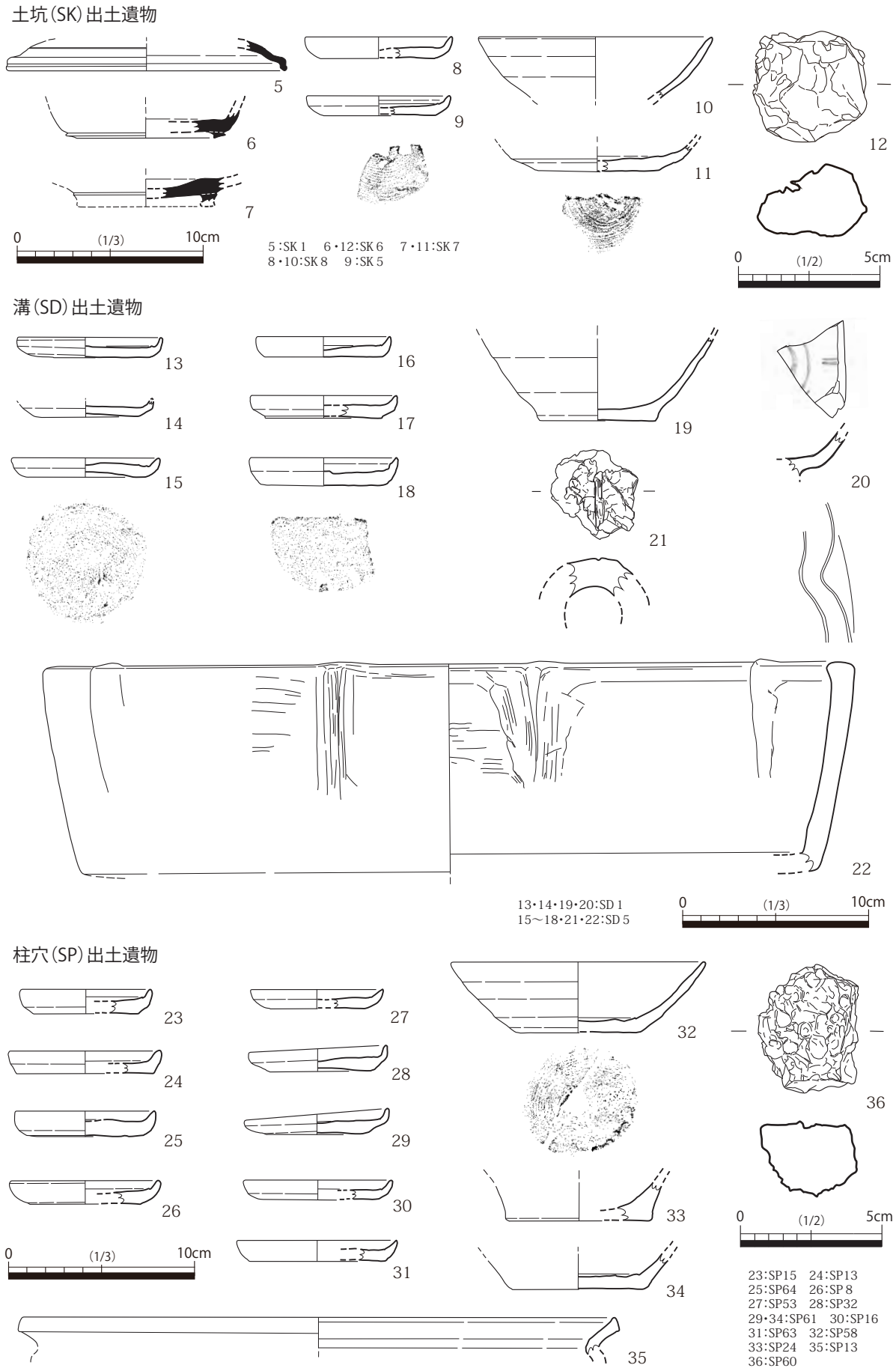
SP13（第40図、図版42）

調査区中央付近に位置する。平面形は北東－南西方向に長い楕円形を呈する。規模は長径が



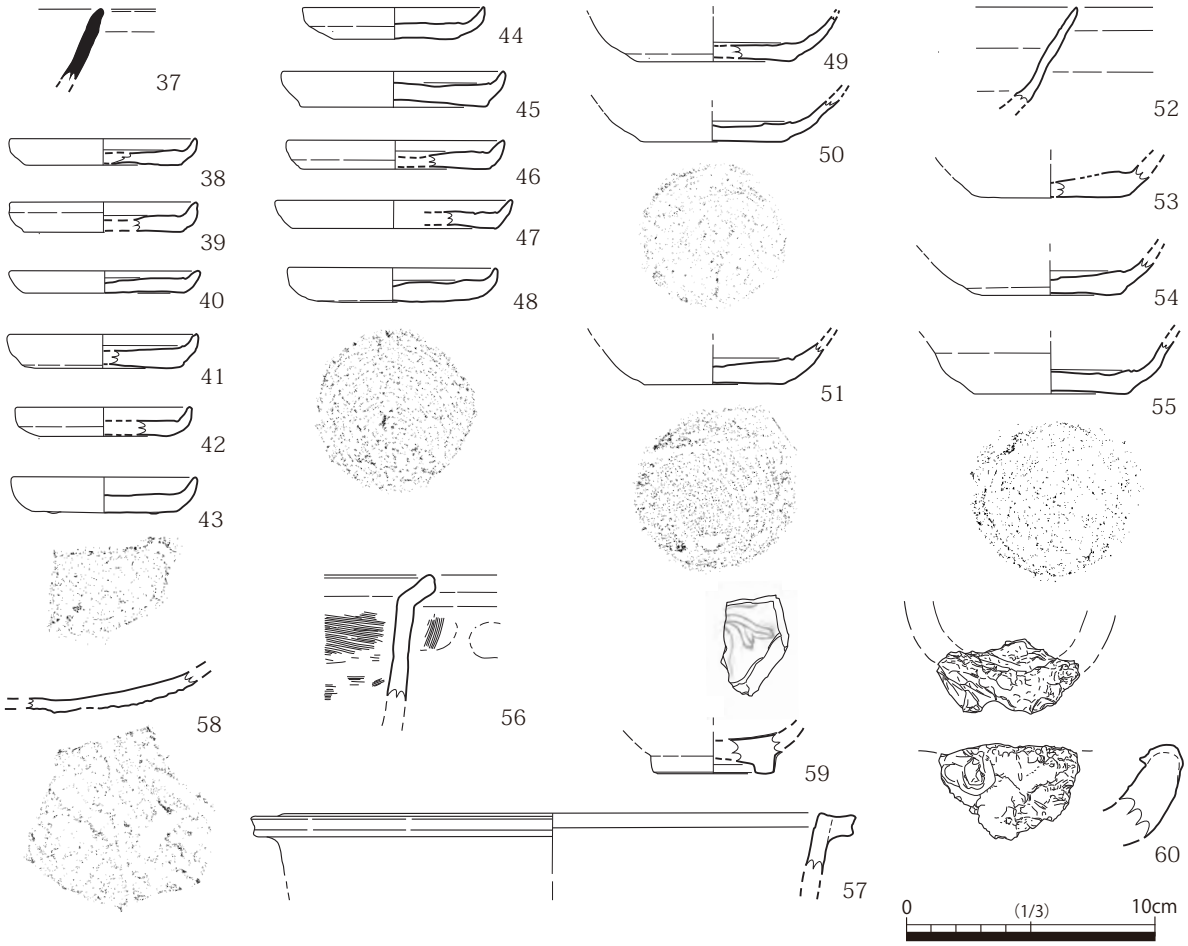
土層凡例
1　褐色（7.5YR4/3）土　地山ブロックが多く混じる
2　にぶい橙色（7.5YR6/4）粘質土　1層土と地山の混淆
3　暗褐色（7.5YR3/3）粘質土　地山ブロックが多く混じる。土器が混じる
4　橙色（7.5YR6/6）粘質土　1層土と地山の混淆
5　褐色（7.5YR4/3）土　地山ブロックが多く混じる。粘性やや弱
6　暗褐色（7.5YR3/3）土と地山の混淆。粘性やや弱
7　橙色（7.5YR6/6）粘質土　暗褐色土の混淆
8　橙色（7.5YR6/6）粘質土　暗褐色土の混淆。炭が少し混じる
9　褐色（7.5YR4/3）粘質土　地山ブロックが多く混じる
10　褐色（7.5YR4/4）粘質土と地山の混淆。炭が多く混じる

第 40 図　2 A 区土坑（SK）・柱穴（SP）実測図



第 41 図　２Ａ区出土遺物実測図（１）

遺構外遺物



第 42 図　２Ａ区出土遺物実測図（２）

53cm、短径が 36cm、検出面からの深さが 29cm を測る。埋土は褐色土の単層で、炭と焼土が少し混じる。底面をわずかに掘り込んで、根石を据えていた。根石は、平面形が不整形の扁平な石を用い、石の最大長が 18cm、最大厚が 8 cm を測る。遺物は、土師器皿（24）と瓦質土器鍋（35）等が出土した。遺構の時期は、14 世紀後半頃と考える。

SP32（第 40 図、図版 43）

調査区北寄りの北東壁際に位置しており、遺構の北東半分は調査区外のため、掘り込んでいない。平面形は円形と推定でき、規模は直径が 30cm である。検出面からの深さは 24cm を測る。埋土は、褐色土の単層で､炭と焼土が混じっていた。底面付近では土師器皿（28）が出土した。遺構の時期は、14 世紀中頃～後半頃と考える。

SP58（第 40 図、図版 43）

調査区北西端に位置し、SK ８の西側に接する。平面形は北西－南東方向に長い楕円形を呈する。規模は、長径が 40cm、短径が 32cm で、検出面からの深さが最大で 43cm を測る。埋土は褐色土の単層である。埋土上位で、土師器杯（32）が出土した。埋土中位で、根石と推定する石が出土した。根石は平面形が不整形で、長さが 27.3cm、幅が 17.0cm、最大厚が 8.7cm を測り、平坦面を上に向ける。遺構の時期は、14 世紀後半頃と考える。

（3）遺物（第 41 図、図版 44 ～ 47）

須恵器、土師器、瓦質土器、青磁、鍛冶関連遺物等がある。５～ 12 は土坑(SK)、13 ～ 22 は溝(SD)、23 ～ 36 は柱穴(SP)から出土した遺物で、37 ～ 60 は遺構外遺物である。

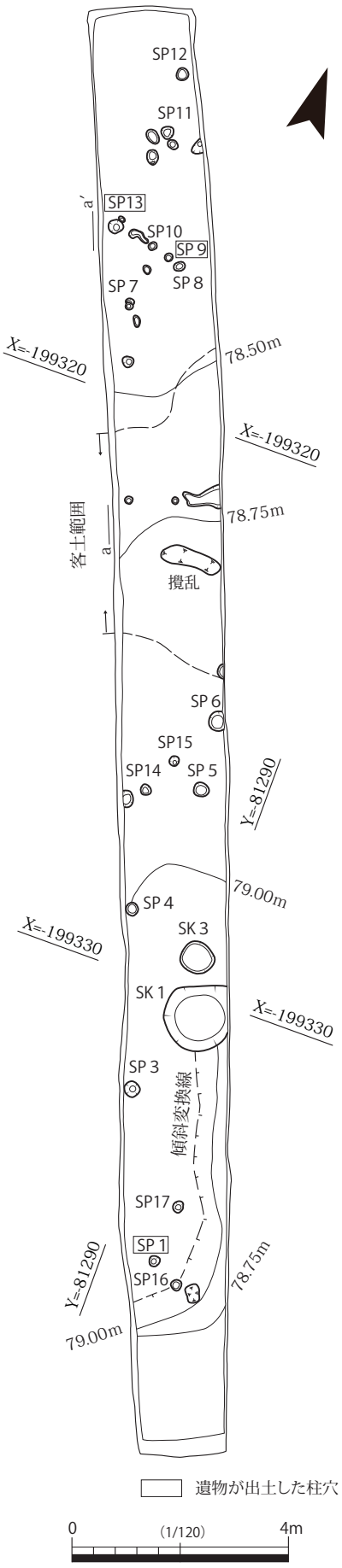
５～７・37 は須恵器である。５は杯蓋で、口縁部を下方に折る。６・７は杯身の高台部、37 は杯身の口縁部片である。いずれも８～９世紀代と考える。

８・９・13 ～ 18・23 ～ 31・38 ～ 48 は土師器皿で、10・11・19・32 ～ 34・49 ～ 55 は土師器杯である。皿は、口縁部～体部が、Ⅰ類)底部から内湾気味に開くものと、Ⅱ類)底部から明瞭に屈曲して外傾するもの（24・31・38・40・45 ～ 47）の大きく２種類に分かれる。杯は、Ⅰ類）底部から緩く内湾気味に開くもの（49 ～ 51・54・55）と、Ⅱ類）底部から外傾するもの（19・32）の大きく２種類がある。52 は内外面に赤彩がある。時期は、52 が８～９世紀、皿Ⅰ類と杯Ⅰ・Ⅱ類が大内０Ｂ式併行、すなわち 14 世紀中頃～後半で、皿Ⅱ類が大内Ⅰ式併行、すなわち 14 世紀後半～末と考える。

20・59 は龍泉窯系の青磁椀である。20 の外面は無文で、いずれも内面に劃花文がみられる。12 世紀中頃～後半頃と考える。

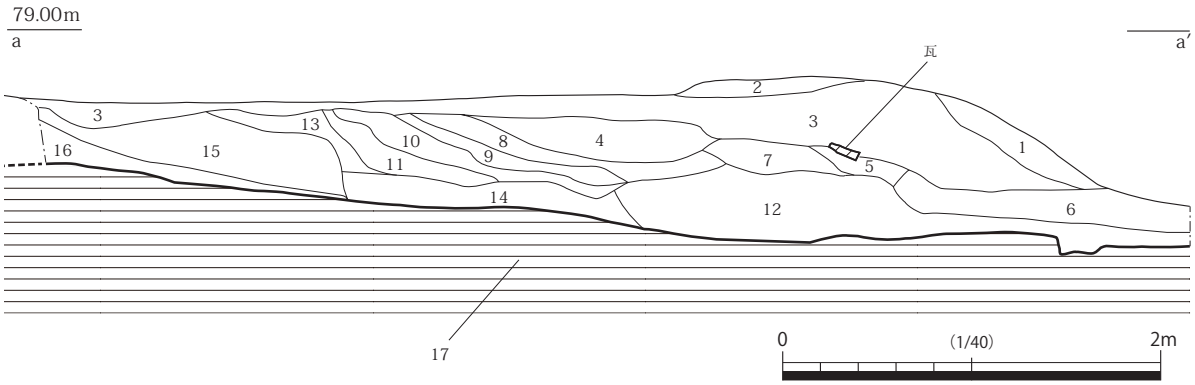
22・35・56 ～ 58 は瓦質土器で、22 が火鉢、35・56 が鍋の口縁部、57 が羽釜の口縁部、58 が鍋または羽釜の底部である。22 は「奈良火鉢」と呼ばれる輪花形火鉢で、最大径が 43cm 程度に復元できる。本来は台脚が付くものと推定する。内外面とも丁寧なヘラミガキを施し、輪花形は棒状工具等で成形した後ヘラミガキする。57 は口縁端部付近に鍔部が取り付く。58 は外面に格子目タタキを施す。時期は、22 が 14 世紀前半頃、35・56 が岩崎Ⅱ型式、すなわち 14 世紀中頃～後半頃で、57 が 14 世紀前半頃と考える。

12・21・36・60 はいずれも冶金関連遺物で、12・36 は鉱滓、21 は鞴羽口、60 は取鍋である。21 は欠損部付近に二次被熱痕が残る。60 は二次被熱痕を残し、口縁部と外面の一部に鉱滓が付着する。



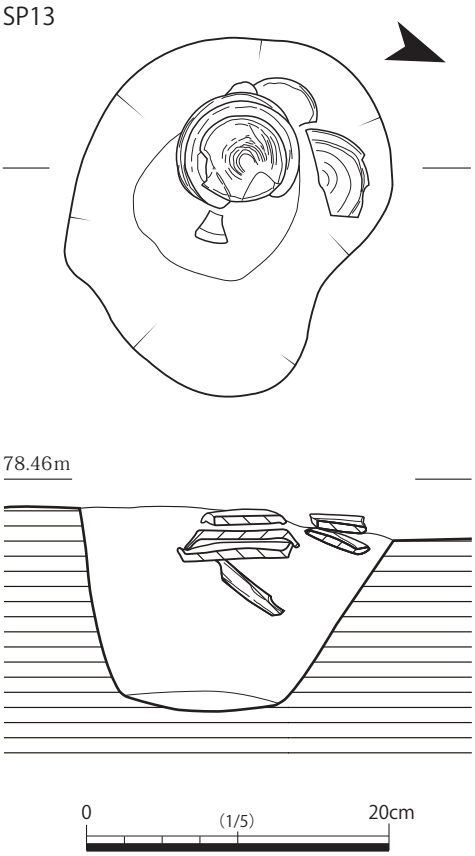
第 43 図　２Ｂ区遺構配置図

２Ｂ区南西壁



土層凡例
1　表土：灰褐色（5YR4/2）土
2　客土：にぶい褐色（5YR4/3）粘質土と黄色（7.5Y8/6）粘質土の混淆
3　客土：にぶい褐色（5YR4/4）粘質土　橙色（5YR7/6）粘質土と褐灰色（5YR5/1）粘質土の小ブロックが混じる。地山の土がわずかに混じる。瓦を含む
4　客土：橙色（7.5YR6/6）粘質土　黄色 2.5Y8/6 粘質土の小ブロックが混じる
5　客土：黄橙色（10YR7/8）粘質土と灰白色（7.5YR8/2）粘質土等の混淆
6　客土：黄褐色（10YR5/6）粘質土　黄色（2.5YR8/6）粘質土の小ブロックが混じる
7　客土：明黄褐色（10YR7/6）粘質土　灰白色（7.5YR8/2）粘質土と橙色（5YR6/8）粘質土（地山の土）のブロックが混じる
8　客土：褐灰色（7.5YR4/1）粘質土　炭が多く混じる
9　客土：灰白色（7.5YR8/2）粘質土　灰褐色（7.5YR5/2）粘質土が混じる。炭が混じる
10　客土：褐灰色（5YR5/1）粘質土
11　客土：橙色（7.5YR6/8）粘質土　灰白色（7.5YR8/2）粘質土の小ブロックがわずかに混じる。炭が混じる
12　客土：にぶい褐色（7.5YR5/3）粘質土　灰白色（7.5YR8/2）粘質土と黄橙色（10YR8/8）粘質土の小ブロックが混じる
13　客土：暗褐色（7.5YR3/3）粘質土　灰白色（7.5YR8/3）粘質土の小ブロックが混じる。石灰石が混じる
14　客土：褐色（7.5YR4/6）粘質土と灰褐色（7.5YR5/2）粘質土と灰白色（7.5YR8/2）粘質土等の混淆。小石が混じる
15　客土：黄橙色（7.5YR7/8）粘質土　明黄褐色（2.5YR7/6）粘質土と灰白色（7.5YR8/2）粘質土が混じる。炭が混じる
16　客土：灰褐色（7.5YR6/2）粘質土　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土の小ブロックが混じる
17　擬地山：明赤褐色（2.5YR5/8）粘質土

第 44 図　２Ｂ区南西壁土層断面図



第 45 図　２Ｂ区柱穴 SP13 実測図

4　２Ｂ区の調査

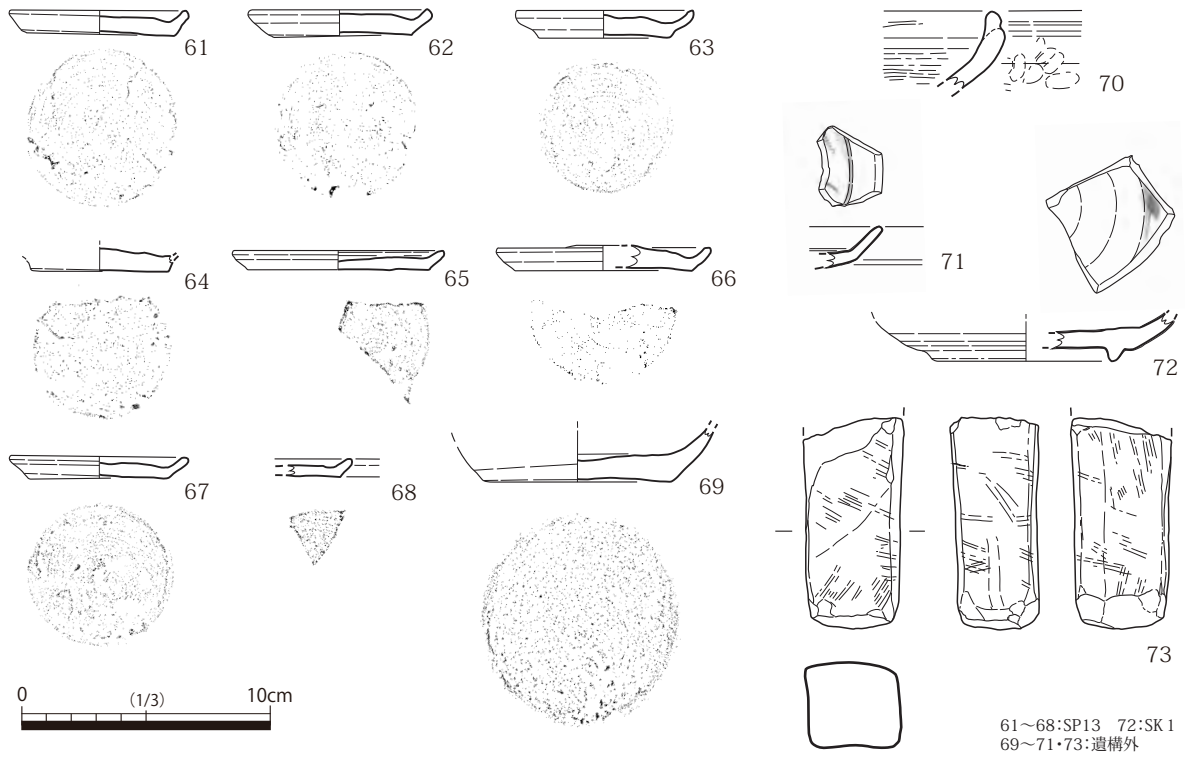
（１）概要（第 43・44 図、図版 48）

２区のうち、南側丘陵上にあり、標高が 78.5 ～ 79.0 mの範囲に位置する。調査区は、長さが 32 m、幅が２mの範囲を対象とする。

調査区中央付近から南東側にかけては概ね平坦であるが、調査区中央から北西側に向けては緩やかに下降して、北西隅付近でやや平坦となる。調査区南東端付近でも南東側に向けてやや下降する。調査区中央から北西側約６mの範囲の地山は、大規模な攪乱を受けており、それを客土で埋め戻して、擬地山状に造成していた。層序は、調査区南西壁の観察から、表土下がすべて客土であった。表土下から擬地山面までの厚さは、擬地山の傾斜に沿う形で、北側で約 90cm、南側で約 30cm となる。

（２）遺構

調査区北西隅付近と、調査区中央から南東側にかけての平坦面を中心に分布する。検出した遺構は、土坑が２基、柱穴が 17 個以上である。以下、主な遺構について述べる。



第 46 図　２Ｂ区出土遺物実測図

①柱穴

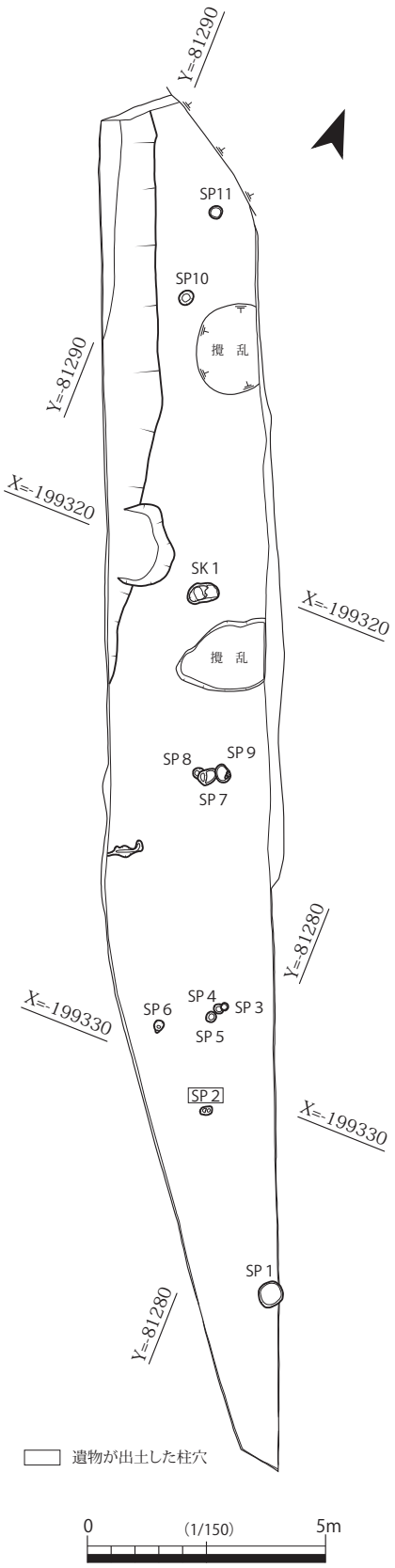
17 個以上を検出した。平面形は円形が主体で、規模は、ほとんどの直径が 20cm 以下と小さい。埋土は、灰褐色系土を主体とし、SP ５では炭と焼土が少し混じっていた。柱穴の組み合わせによる掘立柱建物等の復元はできなかった。遺物が出土した柱穴は、SP １・９・13 の３個である。

SP13（第 45 図、図版 49）

調査区北西隅付近に位置する。平面形は東西方向に長い不整楕円形を呈し、規模は長径が 24cm、短径が 18cm であり、検出面から底面までの深さは 14cm を測る。埋土は、灰褐色土の単層である。埋土の上位で、土師器皿８個体分（61 ～ 68）がまとまった状態で出土した。遺構の時期は、14 世紀後半頃と考える。

（３）遺物（第 46 図、図版 50）

土師器、瓦質土器、青磁、陶器、染付、砥石等がある。出土数は少ない。61 ～ 68 は SP13 から出土した土師器皿である。口径は 7.0 ～ 8.5cm、底径が 5.5 ～ 7.0cm と、口径に対して底径が大きく、口縁部は、底部から明瞭に屈曲して外傾する。いずれも橙色を呈する。大内Ⅰ式併行、14 世紀後半～末頃と考える。69 ～ 71 は遺構外の遺物である。69 は土師器杯の底部片で、内外面の一部に漆が付着する。70 は瓦質土器の鍋の口縁部片で、内面をハケ目調整する。70 は、大内ⅢＢ式併行、15 世紀末頃と考える。71 は青磁皿である。龍泉窯系で、見込みに劃花文の一部がみられる。12 世紀後半頃と考える。72 は SK １出土の染付である。見込み部分の釉を蛇の目状に掻き取り、畳付の内側には砂目が付着する。江戸時代中期～後期と考える。73 は遺構外出土の砥石で、直方体の縦４面すべてを砥面とする。砂岩製である。



第 47 図　３区遺構配置図

5　３区の調査

（１）概要（第 47 図、図版 49）

３区は、２Ｂ区のある南西側の丘陵から、北東側に向けて緩やかに下降する斜面上に位置する。後世の造成によって、他地区に比べて、大きく地山が削平されていた。遺構検出面での標高は 77.0 ～ 78.0 ｍの範囲で、南東から北西にかけて緩やかに下降している。なお、３区と２Ｂ区との間には、地元の住民に「赤線」と呼ばれる、小道が通っている。

調査区は、中央から北西側は長方形に近いが、南東側に向かって、その幅が次第に狭くなる形状で、北西－南東方向の長さが 27 ｍ、幅が最大で４ｍの範囲を対象とする。層序は、表土が約 20cm あり、表土直下が地山面となる。

（２）遺構（第 47 図）

全体に希薄である。土坑１基、柱穴 11 個を検出したが、いずれも小規模で、深さが 20cm 以下と浅い。遺構埋土は、褐色系土を主体とし、SP ２～５では炭が少し混じっていた。

（３）遺物

遺物は、柱穴 SP ２から陶器の小片、遺構外から土師器や陶器片が少量出土したのみである。いずれも小片のため図示しなかった。

第５表　川東遺跡出土土器・陶磁器観察表（１）

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm）口径（復元値）	器高（残存値）	底径（復元値）	最大径（復元値）	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備　考
1	37	38	1 区 SP12	須恵器	杯蓋	—	(0.8)	—	つまみ径［外法］(7.0)	粗	良	灰白色　7.5Y7/1 灰白色　N7/	不定方向のナデ ヨコナデ後不定方向ナデ、回転ヘラケズリ	
2	37	38	1 区 SP22	須恵器	杯	—	(0.8)	—	—	やや密	良	灰色　N6/ 灰色　N6/	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	
3	37	38	1 区 SP18	白磁	椀	(17.8)	(4.5)	—	(18.0)	—	良	施釉　灰白色　5Y7/1 断面　灰白色　2.5Y8/1	回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
5	41	44	2A 区 SK1	須恵器	蓋	(14.6)	(1.6)	—	(14.8)	密	良	青灰色　5B5/1 青灰色　5B5/1	回転ナデ 回転ナデ	回転方向は時計回り
6	41	44	2A 区 SK6	須恵器	杯	—	(1.4)	(7.2)	—	やや密	良	灰白色　N7/ 灰色　N8/	回転ナデ 回転ナデ	
7	41	44	2A 区 SK7	須恵器	杯	—	(1.25)	—	—	やや密	良	灰色　N6/ 灰色　N6/	回転ナデ 回転ナデ	
8	41	44	2A 区 SK8	土師器	皿	(7.7)	1.15	(6.0)	(7.8)	やや粗	良	橙色　2.5YR7/8 浅黄橙色　7.5YR8/6	回転ヘラケズリか 回転ナデ	回転糸切り
9	41	44	2A 区 SK5	土師器	皿	(7.5)	1.05	(5.8)	(7.65)	やや密	やや良	浅黄橙色　10YR8/3 浅黄橙色　10YR8/4	回転ヘラケズリか 回転ナデ	回転糸切り
10	41	44	2A 区 SK8	土師器	杯	(12.3)	(3.25)	—	(12.4)	やや密	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/6 浅黄橙色　7.5YR8/6	回転ナデ 回転ナデ	
11	41	44	2A 区 SK7	土師器	杯	—	(1.4)	(6.4)	—	やや密	良	にぶい橙色　7.5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転糸切り
13	41	44	2A 区 SD1	土師器	皿	7.1	1.1	5.7	7.2	やや粗	やや良	灰白色　7.5YR8/2 灰白色　7.5YR8/2	ナデ	回転糸切り
14	41	44	2A 区 SD1	土師器	皿	—	(0.85)	5.5	—	やや粗	不良	灰白色　7.5YR8/2 灰白色　7.5YR8/2	回転ナデ	回転糸切り
15	41	44	2A 区 SD5	土師器	皿	7.8	1.0	6.2	7.9	やや密	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転糸切り
16	41	44	2A 区 SD5	土師器	皿	7.0	1.1	6.2	7.2	やや密	やや良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6		回転糸切り
17	41	44	2A 区 SD5	土師器	皿	7.8	1.2	6.2	7.9	やや密	やや良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ	回転糸切り
18	41	44	2A 区 SD5	土師器	皿	7.8	1.5	6.6	7.9	やや密	やや良	橙色　5YR7/6 浅黄橙色　7.5YR8/4	回転ナデ	回転糸切り 内面煤付着
19	41	44	2A 区 SD1	土師器	杯	—	(4.4)	(6.2)	—	やや粗	不良	灰白色　7.5YR8/2 灰白色　7.5YR8/2		回転糸切り
20	41	44	2A 区 SD1	青磁	椀	—	(2.4)	—	—	—	良	明緑灰色　7.5GY7/1 明緑灰色　7.5GY7/1	回転ナデ 回転ナデ	
22	41	45	2A 区 SD5	瓦質土器	火鉢	(41.2)	(12.5)	(38.1)	(43.0)	密	やや良	灰色　N4/ 暗灰色　N3/	ヘラミガキ ヘラミガキ、指頭圧痕	
23	41	45	2A 区 SP15	土師器	皿	(6.8)	1.3	(5.5)	(7.0)	やや密	良	黄灰色　2.5Y6/ 黄灰色　2.5Y6/	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
24	41	45	2A 区 SP13	土師器	皿	(8.0)	1.2	(7.2)	(8.1)	やや密	不良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	
25	41	45	2A 区 SP64	土師器	皿	(7.3)	1.35	(6.2)	(7.5)	やや密	やや良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデか	回転糸切りか
26	41	45	2A 区 SP8	土師器	皿	(7.8)	1.25	(5.8)	(8.0)	やや粗	不良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
27	41	45	2A 区 SP53	土師器	皿	(6.95)	1.0	(5.0)	(7.0)	密	不良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/4		
28	41	45	2A 区 SP32	土師器	皿	7.2	1.4	5.4	7.4	やや密	やや良	淡橙色　5YR8/4 淡橙色　5YR8/4	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
29	41	45	2A 区 SP61	土師器	皿	(7.5)	1.35	5.4	(7.7)	やや密	やや良	浅黄橙色　10YR8/3 浅黄橙色　10YR8/3	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
30	41	45	2A 区 SP16	土師器	皿	(7.8)	1.1	(6.4)	(7.9)	密	やや良	灰白色　7.5YR8/1 灰白色　7.5YR8/1	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
31	41	45	2A 区 SP63	土師器	皿	(8.4)	1.1	(7.2)	(8.5)	密	やや良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデか 回転ナデか	回転糸切り
32	41	45	2A 区 SP58	土師器	杯	(13.3)	3.75	(6.0)	(13.5)	やや密	やや良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転糸切り
33	41	45	2A 区 SP24	土師器	杯	—	(2.0)	(7.4)	—	やや密	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/6 赤橙色　10R6/8	回転ナデ	回転糸切り
34	41	46	2A 区 SP61	土師器	杯	—	(1.9)	(7.0)	—	やや粗	不良	浅黄橙色　7.5YR8/6 浅黄橙色　7.5YR8/6	回転ナデ、 底部回転ヘラケズリ	
35	41	46	2A 区 SP13	瓦質土器	鍋	(33.0)	(1.6))	—	—	密	良	灰色　N4/ 灰白色　N8/	回転ナデ 回転ナデ	
37	42	46	2A 区北隅 暗褐色土層	須恵器	杯身	—	(2.8)	—	—	やや粗	良	灰色　N6/ 灰色　N6/	回転ナデ 回転ナデ	
38	42	46	2A 区中央 遺物包含層	土師器	皿	(7.3)	(1.05)	(6.0)	(7.5)	やや粗	不良	灰白色　2.5Y8/1 灰白色　10YR8/2		回転糸切り
39	42	46	2A 区中央部 遺構面	土師器	皿	(7.4)	1.2	(6.2)	(7.5)	やや密	不良	浅黄橙色　7.5YR8/3 灰白色　10YR8/2		
40	42	46	2A 区北隅 暗褐色土層	土師器	皿	(7.4)	0.9	(6.3)	(7.6)	密	やや良	橙色　5YR7/8 淡橙色　5YR8/4		回転糸切りか
41	42	46	2A 区中央部 遺構面	土師器	皿	(7.5)	1.35	(6.2)	(7.6)	やや密	良	浅黄橙色　7.5YR8/4 橙色　5YR7/6	回転ナデか 回転ナデ	回転糸切り
42	42	46	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	皿	(6.8)	1.15	(5.2)	(7.0)	やや密	やや良	橙色　7.5YR7/6 橙色　7.5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
43	42	46	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	皿	(7.2)	1.45	(5.8)	(7.4)	密	やや良	橙色　7.5YR7/6 橙色　7.5YR7/6	口縁部：回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り

第６表　川東遺跡出土土器・陶磁器観察表（２）

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm）口径（復元値）	器高（残存値）	底径（復元値）	最大径（復元値）	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備　考
44	42	46	2A 区北隅 暗褐色土層	土師器	Ⅲ	(7.1)	1.25	(4.8)	(7.2)	密	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/3 橙色　5YR7/6	回転ナデ	回転糸切り
45	42	46	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	Ⅲ	8.7	1.45	7.2	8.9	やや密	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/4		回転糸切り
46	42	46	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	Ⅲ	(8.6)	1.15	(7.4)	(8.7)	やや密	良	浅黄橙色　7.5YR8/6 浅黄橙色　7.5YR8/6	回転ナデ（口縁） 回転ナデ	回転糸切り
47	42	46	2A 区 遺物包含層	土師器	Ⅲ	(9.3)	1.1	(8.0)	(9.4)	やや密	やや良	灰白色　10YR7/1 灰白色　10YR8/1	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転糸切り
48	42	46	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	Ⅲ	(8.3)	1.3	(6.1)	(8.4)	やや粗	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/6 浅黄橙色　7.5YR8/6		回転糸切り
49	42	46	2A 区 遺物包含層	土師器	杯	—	(1.5)	7.5	—	やや密	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/3 橙色　5YR7/6	回転ヘラケズリ	回転糸切り
50	42	47	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	杯	—	(1.65)	5.5	—	密	不良	浅黄橙色　7.5YR8/3 淡橙色　5YR8/4	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転糸切り
51	42	47	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	杯	—	(1.6)	(5.4)	—	やや密	やや良	浅黄橙色　7.5YR8/4 浅黄橙色　7.5YR8/4	回転ナデ	回転糸切り 板目圧痕
52	42	46	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	杯	—	(3.8)	—	—	密	やや良	橙色　2.5YR6/6 橙色　2.5YR6/6		
53	42	47	2A 区北隅 暗褐色土層	土師器	杯	—	(1.3)	(6.3)	—	やや密	やや良	灰白色　5YR8/1 褐灰色　7.5YR6/1	回転ナデ	回転糸切り
54	42	47	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	杯	—	(1.8)	(6.0)	—	密	不良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ヘラケズリか	回転糸切り
55	42	47	2A 区北西隅 暗褐色土層	土師器	杯	—	(2.1)	(6.0)	—	密	やや良	橙色　2.5YR7/8 淡橙色　5YR8/4	回転ヘラケズリ	底部回転糸
56	42	47	2A 区北西隅 暗褐色土層	瓦質土器	鍋	—	(5.0)	—	—	やや密	やや良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	ヨコハケ ハケ、指頭圧痕	外面煤付着
57	42	47	2A 区中央 包含層	瓦質土器	羽釜	(21.2)	(2.45)	—	(24.0)	やや密	不良	灰白色　10YR8/1 灰白色　10YR8/1		
58	42	47	2A 区北隅 暗褐色土層	瓦質土器	鍋	—	—	—	—	やや粗	不良	灰白色　5Y8/1 灰白色　5Y8/1	ハケ 格子タタキ	
59	42	47	2A 区 遺物包含層	青磁	椀	—	(1.6)	(4.8)	—	密	良	灰オリーブ色　7.5Y5/2 灰オリーブ色　7.5Y5/2	底部回転ヘラケズリ	内底面に花文あり
61	46	50	2B 区 SP13 －No. 4	土師器	Ⅲ	7.0 ～ 7.4	1.0	6.1	7.1 ～ 7.6	やや粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
62	46	50	2B 区 SP13 －No. 5	土師器	Ⅲ	(6.9)	1.0	5.5	(7.3)	やや粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ後ナデ、回転ナデ 回転糸切り後一部ナデ、回転ナデ	回転糸切り 歪みやや大
63	46	50	2B 区 SP13 －No. 6	土師器	Ⅲ	(7.0)	1.1	5.2	(7.1)	やや粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ後ナデ、回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
64	46	50	2B 区 SP13 －No. 2	土師器	Ⅲ	—	(0.9)	5.4	—	やや粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
65	46	50	2B 区 SP13	土師器	Ⅲ	(8.3)	0.8	(7.2)	(8.4)	粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ後ナデ、回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
66	46	50	2B 区 SP13	土師器	Ⅲ	(8.4)	1.0	(7.0)	(8.5)	やや粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ後ナデ、回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
67	46	50	2B 区 SP13 －No. 3	土師器	Ⅲ	7.0	0.9	5.5	7.1	やや粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR6/6	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 歪み大
68	46	50	2B 区 SP13 －No. 7	土師器	Ⅲ	—	(0.7)	—	—	粗	良	橙色　5YR7/6 橙色　5YR7/6	回転ナデ後ナデ、回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
69	46	50	2B 区遺構面	土師器	杯	—	(2.1)	7.5	—	粗	良	にぶい橙色　5YR7/4 にぶい橙色　7.5YR7/4	回転ナデ後ナデ、回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 内外面に漆付着
70	46	50	2B 区 遺構検出面	瓦質土器	鍋	—	(3.1)	—	—	やや粗	良	灰色　N5/ 灰白色　N8/ ～灰色　N6/	ハケ目後回転ナデ 回転ナデ、一部指オサエ	
71	46	50	2B 区 遺構検出面	青磁	Ⅲ	—	(1.6)	—	—	—	良	施釉　オリーブ灰色　10Y6/2 断面　灰白色　10YR8/1	回転ナデ 回転ヘラケズリ、回転ナデ	
72	46	50	2B 区 SK1	染付	Ⅲ	—	(1.9)	高台径 (6.9)	—	—	良	施釉　灰白色　10Y8/1 断面　灰白色　5Y8/1	回転ナデ ナデか、回転ナデ	見込みを蛇の目にかき取り 畳杯内側に砂付着

第７表　川東遺跡出土土製品観察表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm）長さ［器高］（残存値）	幅［口径］（復元値）	厚さ	外径（復元値）	孔径（復元値）	最大径	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
21	41	44	2A 区 SD5	土製品	羽口	(4.8)	—	1.45	約 7.0	約 3.5	—	粗	やや良	橙色　5YR7/6 灰色 10YR8/1		二次被熱あり
60	42	47	2A 区北西隅 暗褐色土	土製品	取鍋	(3.7)	(7.0)	1.8	—	—	約 8.4	粗	良	灰赤色　2.5YR5/2 灰白色 10YR7/1	ナデか	二次被熱あり からみ付着

第８表　川東遺跡出土石製品・鉱滓観察表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	法　量（cm）長さ（残存値）	最大幅	最大厚	重さ（g）	石　材	備　考
4	37	38	1 区 SP21	砥石	(7.3)	7.8	8.1	520	流紋岩か	
12	41	36	2A 区 SK6	鉱滓	4.0	3.9	2.5	47.9		
36	41	44	2A 区 SP60	鉱滓	(4.5)	3.5	2.75	74.0		

Ⅴ　土井敷遺跡の調査成果

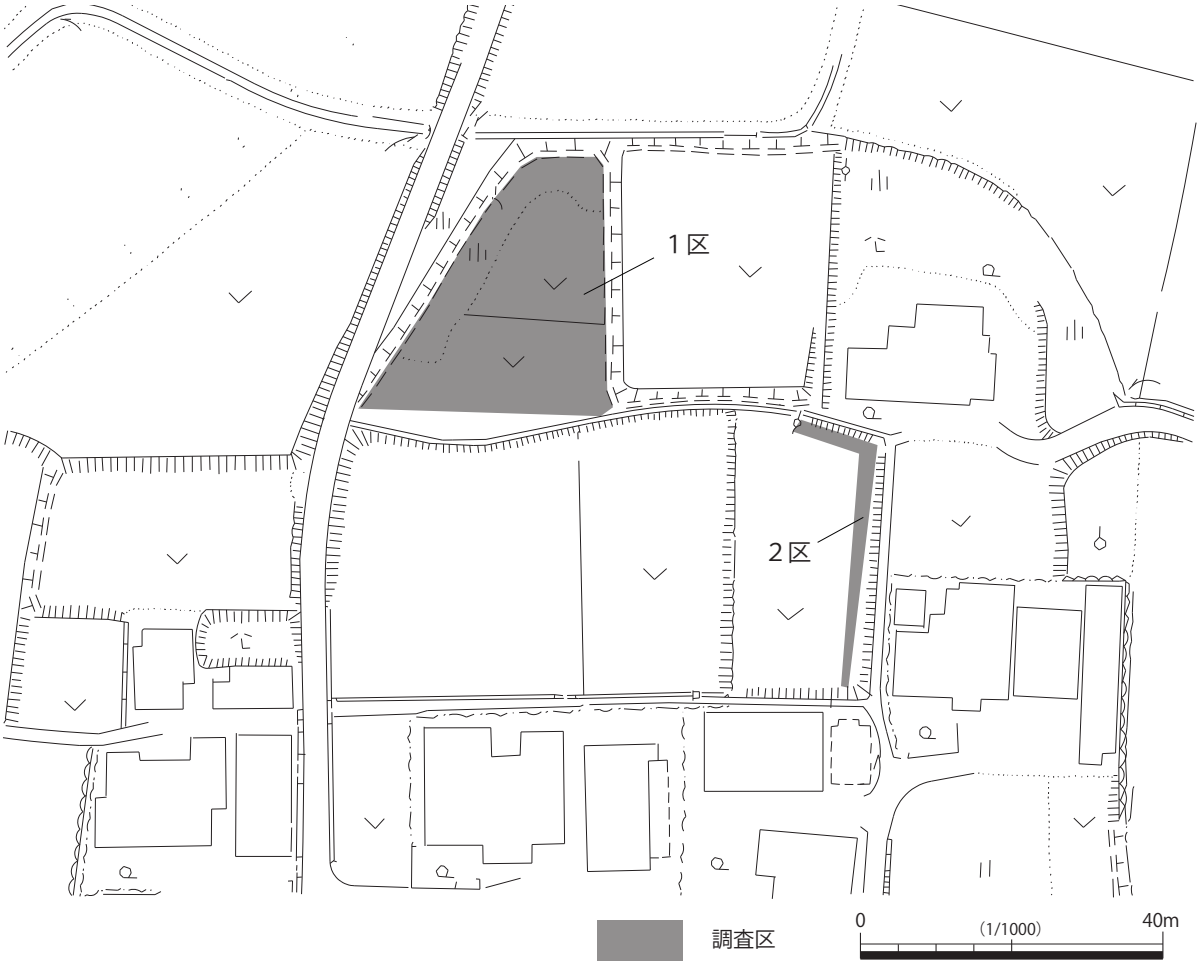
1　遺跡の概要

（1）概要（第 48 図、図版 51・52）

土井敷遺跡は、本郷盆地内の北東部に位置し、本郷川右岸に広がる遺跡である。今回の調査対象地は、遺跡範囲の中でも北寄り、南の丘陵部から北方の盆地床に向かって張り出した舌状丘陵端部の段丘上、標高約 76 m、比高約３mの場所に立地する。調査区は２箇所に分かれ、北西側の調査面積の大きい方を１区、南東側にある小さい方を２区と称する。検出した遺構は両区合わせて、土坑 17 基以上、柱穴約 243 個等がある。遺構の数は総じて少なく、両区とも検出範囲に偏りがみられた。遺物には、須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器、石器があるが、数量はわずかである。土器類は全て小片で、時期は中世以降のものが多い。

（2）層序

調査前は１区が畑地、２区が田圃であり、１区の耕土下には旧耕土や盤土、遺物包含層等は皆無で、一部の丘陵斜面側を除く大部分が直ぐに地山面となっている。２区は耕土下に田圃の盤土としての客土が厚く堆積し、その下が地山面となる範囲が大半を占める。両地区とも明確な遺物包含層は認められず、遺構は全て地山面上で検出した。



第 48 図　土井敷遺跡調査区設定図

2　1区の調査

（1）概要（第 49 図、図版 52 ～ 54）

南側丘陵部から盆地床に向かって舌状に延び、段丘状を呈するその最先端部に立地している。調査区は平面形が台形を呈し、南北が約 34 m、東西は北側で約 22 m、中央部で約 22.5 m、南端側で約 34 mを測る。南側調査区外の地表上は、標高が約 76 mで、遺構面は調査区南端の中央部で標高が約75.8 mである。調査区の南から北に向かって緩やかに下降するが、南端と北端との高低差は約0.8 mであり、調査区全体が概して平坦である。ただし、調査区南西端付近は大きく地形が落ち込み、中央部との高低差は最大が約 1 mとなっている。

本調査区の調査前の状況は畑地であることから、調査区南西端斜面を除く全域の表土は耕土であった。層序は、表土（耕土）下に旧田圃の痕跡や遺物包含層等は認められず、大部分は表土直下が地山となる。地表面から地山までの深さは、南端中央部で約 50cm を測る。

第 49 図　1区遺構配置図

（2）遺構

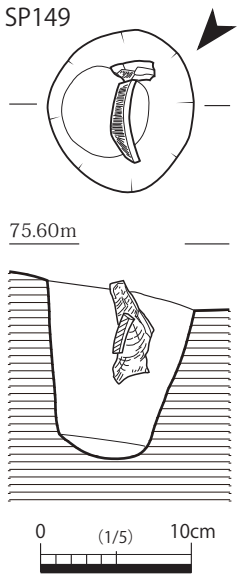
調査区中央部の北端から南端にかけて希薄で、東西両側で比較的多く検出した。土坑 15 基以上、柱穴約 220 個等がある。以下、主な遺構について述べる。

①土坑

土坑は約 15 基以上検出したが、大半は近世以降に造作したものと推定する。

SK 1～6・8～11（第 49 図、図版 54）

調査区南東側に位置し、東西方向に概ね一列状に並んでいる。いずれも平面形が不整円形で、大きさは概して直径が約 80 ～ 90cm で、深さは約 20cm と約 60cm のものからなる。埋土は褐色土の単層である。遺物は SK 1 から陶器、SK 2 から陶器と土師器が出土した。これらの遺構は大きな時期差がなく、いずれも近世以降と推察する。



第 50 図　1 区柱穴 SP149 実測図

②柱穴

柱穴約 220 個があり、平面形が円形の小規模なものが大半を占める。柱痕を確認したものはなく、また、組み合せによる掘立柱建物は復元できなかった。ただし、SP96 には根石と考える石が入っていた。

なお、遺物が出土した柱穴は、SP 6・72・79・85・98・109 ～ 111・113・118・149・181・192・215 の 14 個である。

SP149（第 50 図、図版 54）

調査区西側に位置する。平面形は楕円形で、長径が 21.5cm、短径が 19cm、深さが約 24cm を測り、底面は丸味を呈する。遺物は、底面から 9 cm 上位で、同一個体の可能性がある須恵器甕 2 片（1・2）が出土した。

③その他

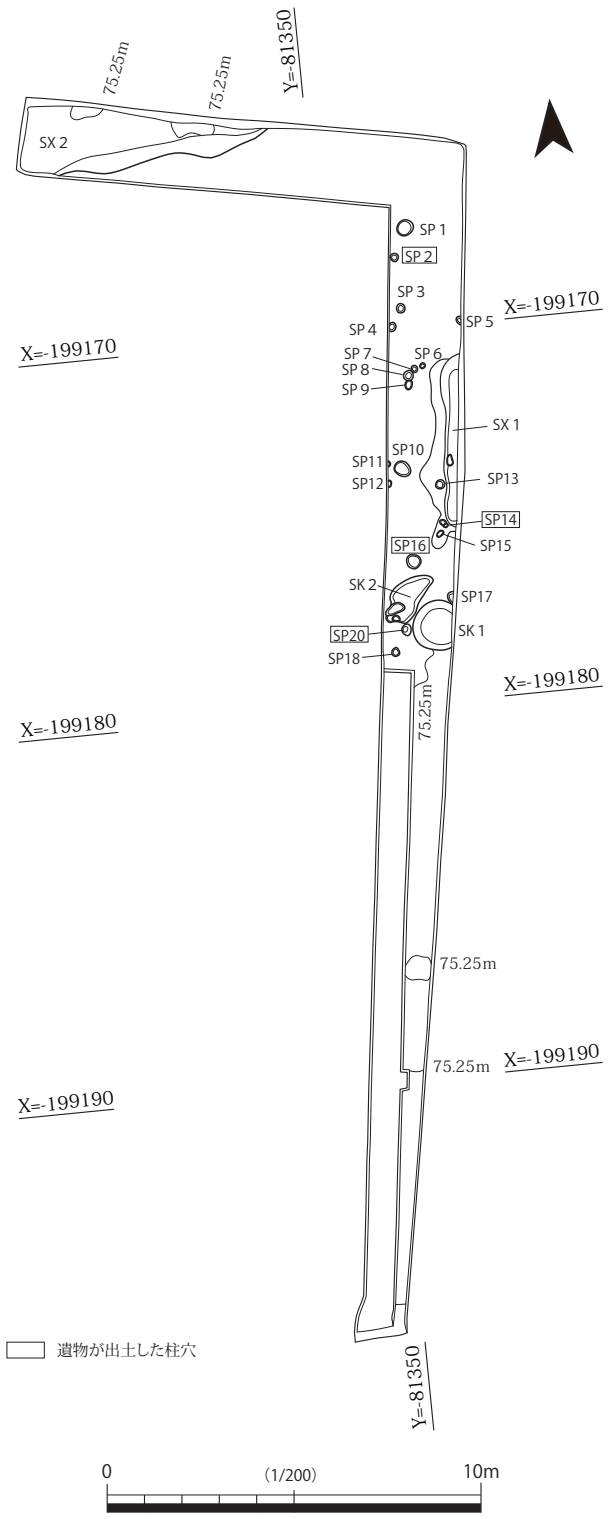
検出した遺構の中には、用途不明なものや自然に形成されたものもある。

SX 1（第 49 図）

北端近くに位置する土坑状の穴である。人工の遺構ではなく、カルスト地形特有の「ジバス」と称する溶蝕陥没穴の可能性が高い。平面形は不整円形で、長径が 2.25 m、短径が 1.7 m、深さが約 1 .0 mを測る。坑内下位の南東側壁の壁面で、さらに下方に通じる、平面形が円形状の竪穴を確認した。竪穴の直径は約 1 m、深さが 1 m以上に及ぶ。

（3）遺物（第 54 図、図版 59）

遺物には須恵器、土師器、陶器、磁器、瓦、炭などがあり、出土量は総じて少なく、土器類はすべて小片である。1・2 は SP149 から出土した須恵器で、甕胴部の下位の破片である。いずれも内面に同心円文当て具、外面に平行タタキが施される。1 の外面底部付近は、平行タタキが一部重なり格子状を呈する。3・4 は遺構外から出土した陶器の底部で、ともに削り出し高台がつく。3 は内底面に輪状胎土目が残る。5 は遺構外から出土した粉青沙器の椀の口縁部で、外面に印花文が施される。なお、土師器の小片を出土した柱穴もあり、SP111 は粘土塊小片、SP181 は砥石片が伴う。土師器は大半が中世のものである。また、表土等からは、須恵器、近世以降の瓦片や陶器、炭等が出土した。



第 51 図　2 区遺構配置図

3　2 区の調査

（1）概要（第 51・52 図、図版 55）

1 区の南東隅から最短で 24 mの位置にある。調査区は平面形がＬ字状を呈し、東西方向の長さが 12 m、南北方向が 22 mで、幅は基本的に 2 mであるが、南北方向の調査区南半は、南に向けて狭くなり、南端で幅 1.5 mとなる。

層序は、東壁の土層観察から、現地表面は平坦で、現地表面下から地山（黄橙色粘質土）面までの深さは、地点によって大きく異なる。北側での深さは 55cm、中央部の SK 1 北側で約 40cm、SK 1 南側で地山面が段差状となり約 80cm、調査区南端で深さが 95cm を測る。土層の堆積状況は、最上位に現耕土（灰褐色土）が 25 ～ 30cm あり、その直下には橙色粘質土の客土が北半部で 15 ～ 20cm、南半部で 55 ～ 65cm ほど堆積する。客土の下は大部分が地山であるが、北端付近の地山上面には灰褐色粘質土が薄く堆積する。遺物包含層は皆無である。

（2）遺構

遺構を検出した範囲は、南北方向の調査区の北半域に限られた。遺構には土坑 2 基、柱穴 23 個等があり、すべて地山面で検出した。以下、主な遺構について述べる。

①土坑

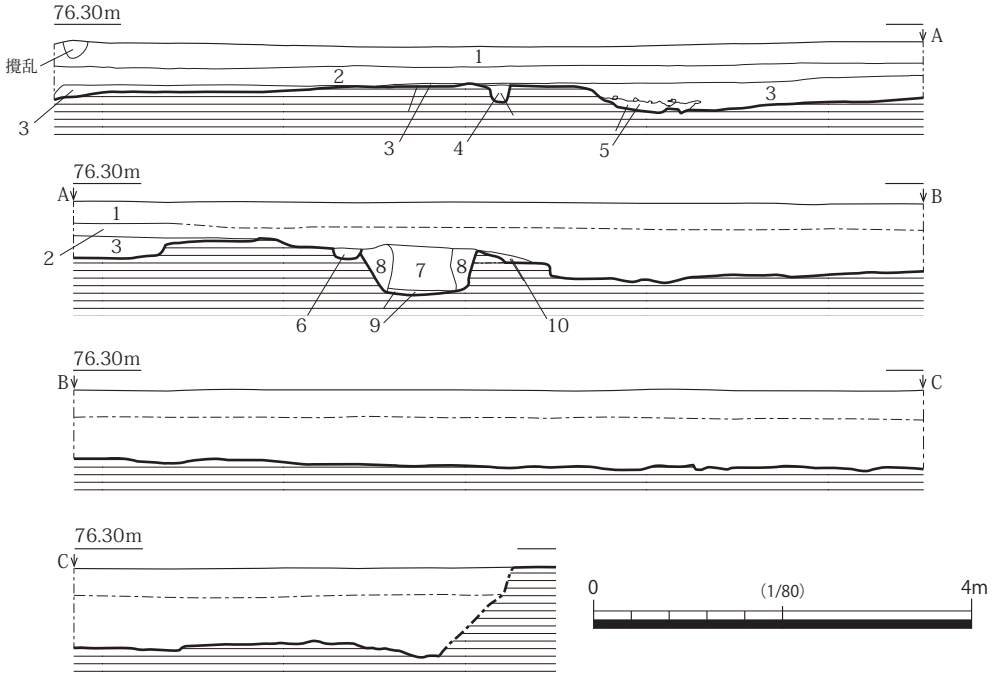
SK 1（第 53 図、図版 56）

調査区中央部に位置し、遺構東側の一部は調査区外に及ぶ。平面形は円形で、長径が 1.33 m以上、短径が 1.05 m、深さが 46cm を測る。埋土は、底面上に褐灰色粘質土が薄く存在し、その上に褐色粘質土が厚く堆積する。その外周の壁際には明褐色粘質土がある。遺物として、陶器や土師器が出土した。なお、埋土状況から、土坑内に桶ないし樽が埋設されていた可能性がある。時期は近世以降と推定する。

SK 2（第 51 図、図版 56）

SK 1 に隣接する。平面形は不整楕円形状で、長径が 1.65 m、短径が 0.85 m、深さ 31cm を測る。南端側には柱穴 2 個が重複している。出土遺物は土師器・磨石（6）がある。

２区東壁



土層凡例
1　耕土：灰褐色（7.5YR5/2）土
2　客土：橙色（7.5YR6/6）粘質土　黒褐色（7.5YR3/2）粘質土及び地山が多く混じる
3　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　炭及び地山が若干混じる
4　SP５埋土：黒褐色（7.5YR3/2）粘質土　地山ブロックが混じる
5　にぶい橙色（7.5YR7/4）粘質土と黄橙色（7.5YR7/8）粘土の混淆
6　SP17 埋土：暗褐色（7.5YR3/2）粘質土
7　SK１埋土：褐色（7.5YR4/3）粘質土　黒色（7.5YR7/1）土、黒褐色（7.5YR3/2）粘質土、地山の小ブロックが混じる
8　SK１埋土：明褐色（7.5YR5/6）粘土、褐色（7.5YR4/3）粘質土の小ブロックが多量に混じる
9　SK１埋土：褐灰色（7.5YR5/1）粘土　軟質で粘性強
10　明褐色（7.5YR5/6）粘土、褐色（7.5YR4/3）粘質土の小ブロックが多量に混じる

第 52 図　２区東壁土層断面図

②柱穴

柱穴の規模は、直径が約 10 ～ 45cm の大小があり、深さは平均 16cm で、最深で 37cm を測る。いずれも平面形は基本的に円形で、柱痕は確認していない。遺物が出土した柱穴は SP2・14・16・20 の４個である。

SP ２（第 51 図）

調査区北側に位置する。平面形は円形で、直径が 20cm、深さが６cm を測る。出土遺物に須恵器がある。

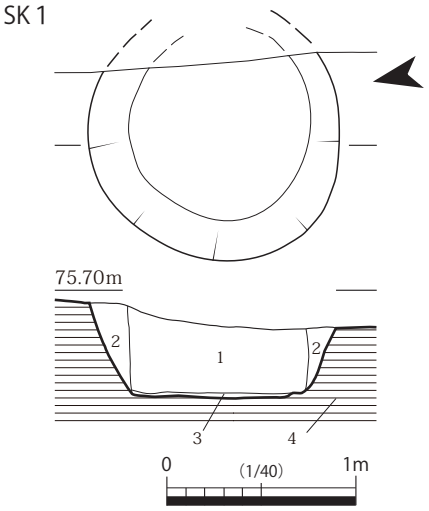
SP14（第 51 図）

調査区中央部北寄りに位置し、SK １の南側上端付近で検出した。平面形は不整円形で、長径が 14cm、短径が 12cm、深さが 25cm を測る。出土遺物に土師器甕がある。

③その他

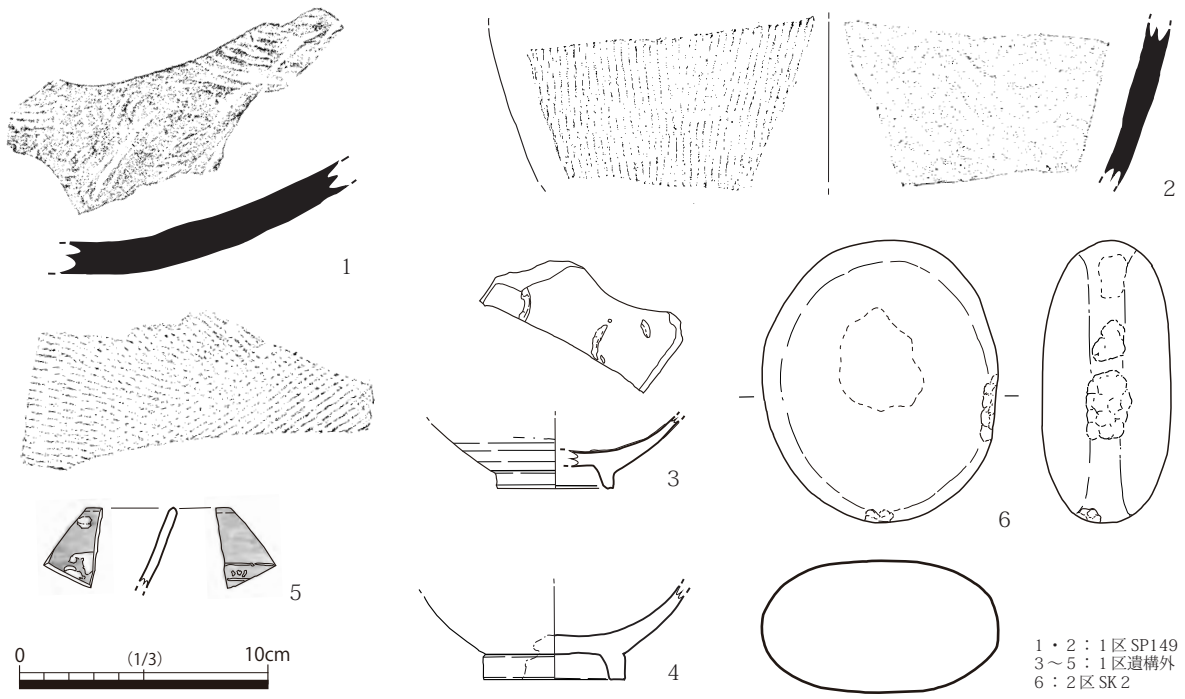
SX １（第 51 図）

調査区北側の東壁沿いに位置し、遺構の東側は調査区



土層凡例
1　褐色（7.5YR4/3）粘質土（軟質）　黒色（7.5YR7/1）土及び地山ブロックが混じる。斑点状を呈する部分あり。径５～ 10 ㎝程度の自然石数個を含む。
2　明褐色（7.5YR5/6）粘質土　地山の二次堆積。小石がわずかに混入する。１層土のブロックが多量に混じる（斑点状を呈する）。
3　褐灰色（7.5YR5/1）粘質土　軟質で粘性高い
4　黄橙色（7.5YR7/8）粘質土　地山

第 53 図　２区土坑 SK １実測図



第54図　1・2区出土遺物実測図

外に及ぶ。上端は概ね南北方向に延び、長さが約4.7 m、幅が0.4～0.5 m以上、深さは約40～50cmを測る。埋土は、ほとんど褐色粘質土が占めるが、北側床面上で、にぶい橙色粘質土と黄橙色粘質土の混合した土がブロック状に認められる。いずれも人為的に埋められたと推察する。出土遺物は陶器がある。時期は近世以降と考える。

SX 2（第51図）

調査区北西端にある。上端は南西―北東方向に延び、調査区外に至り、長さが5.8 m以上、深さは最深で47cmを測る。遺物は出土せず、近年の耕地整備に伴う段差と考える。

（3）遺物（第54図、図版57）

遺物には、須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器等があり、出土量は総じて少ない。土器類はすべて小片であり、良好に図化できるものはなかった。6はSK 2上面から出土した敲石である。全体が丸味を呈する川原石で、その両端面及び片側面中央の3面に敲打痕を認める。花崗岩製である。

第9表　土井敷遺跡出土土器・陶磁器観察表

No.	挿図	図版	出土場所	器種	器形	法量（cm） 器高（残存値）	法量（cm） 底径（復元値）	胎土	焼成	色調（内）（外）	主な調整（内）（外）	備考
1	54	57	1区SP149	須恵器	甕	(4.3)	—	密	良	灰色　5Y6/1 灰色　N4/	同心円文当て具痕 平行タタキ(一部擬格子状)	
2	54	57	1区SP149	須恵器	甕	(6.3)	—	やや粗	良	灰白色　N7/ 灰色　N6/	同心円文当て具痕 擬格子目タタキ	
3	54	57	1区壁面	陶器	椀	(2.8)	高台径(4.6)	粗	良	施釉　灰オリーブ色　7.5Y6/2 断面　灰白色　2.5Y7/1 露胎　にぶい赤褐色　5YR5/3	回転ヘラケズリ、ナデ	内面に輪状胎土目(2か所)
4	54	57	1区表土	陶器	椀	(3.7)	高台径(5.6)	粗	良	施釉　灰オリーブ色　7.5Y6/2 断面　褐灰色　7.5YR5/1 露胎　にぶい黄橙色　10YR7/4～灰褐色　7.5YR5/2	回転ヘラケズリ	土灰釉
5	54	57	1区遺構検出面	磁器	椀	(3.2)	—	粗	良	施釉　オリーブ黒色　10Y3/ 断面　灰色　N5/		外面に印花文 粉青沙器

第 10 表　土井敷遺跡出土石製品観察表

No.	挿図	図版	出土場所	種別	法　量（cm）			重さ（g）	石材	備　考
					長さ	最大幅	最大厚			
6	54	57	2 区 SK2 上面	敲石	11.2	9.4	5.2	860	花崗岩	両面及び片方の側面に敲打痕

参考文献

池田善文 2004「須恵器」『山口県史』資料編・考古２、山口県

岩崎仁志 1988「防長地域の足鍋について」『山口考古』第 17 号、山口考古学会

岩崎仁志 1999「足鍋再考」『陶塤』第 12 号、山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター

岩崎仁志 2007「山陽西部における中世の土製煮炊具－周防・長門を中心に－」『中近世土器の基礎研究』21、日本中世土器研究会

岩崎仁志 2018「防長型足鍋の成立と展開－防長型瓦質土器の再検討（2）－」『山口考古』第 38 号、山口考古学会

北島大輔 2010「大内式の設定－中世山口における遺物編年の細分と再編－」『大内氏館跡XI』山口市埋蔵文化財調査報告第 101 集、山口市教育委員会

小南裕一 2004「長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡　市の瀬遺跡　南ヶ畑遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告書第 45 集

佐藤亜聖 2017「中世後期における瓦質土器の様相とその意義」『山陰における瓦質土器－火鉢と風炉を中心として－』、山陰中世土器検討会

土橋理子 1995「初期貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

山本信夫 1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館論集』4

Ⅵ　自然科学分析

1　堀の内遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

堀の内遺跡は、山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。測定対象試料は、竪穴建物内の柱穴や木炭焼成坑等から出土した木炭５点である（第 11 表）。なお、試料１～４の４点を対象に樹種同定も実施されている（第Ⅵ章２参照）。

（2）化学処理工程

①メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

②酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 11 表に記載する。

③試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

⑥グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（3）測定方法

加速器をベースとした ^{14}C—AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（4）算出方法

①$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 11 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

②^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第11表に、補正していない値を参考値として第12表に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

③ pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 11 表に、補正していない値を参考値として第 12 表に示した。

④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 12 表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

（5）測定結果

測定結果を第 11・12 表に示す。以下に記述する年代観は、佐原眞（2005）を参考とする。

竪穴建物内柱穴から出土した試料 2 点（試料 1、2）の ^{14}C 年代は試料 1 が 1650 ± 20yrBP、試料 2 が 1610 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は試料 1 が 383 ～ 423cal AD の範囲、試料 2 が 405 ～ 532cal AD の間に 2 つの範囲で示され、試料 1 は古墳時代中期頃、試料 2 は中期から後期頃に相当する。

木炭焼成坑から出土した試料 2 点（試料 3、4）の ^{14}C 年代は試料 3 が 1340 ± 20yrBP、試料 4 が 1380 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は試料 3 が 655 ～ 679cal AD の範囲、試料 4 が 645 ～ 665cal AD の範囲で示され、古墳時代終末期頃に相当する。

SP47 から出土した試料 5 の ^{14}C 年代は 690 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 1278 ～ 1377cal AD の間に 2 つの範囲で示され、中世頃に相当する。

今回測定された試料はすべて木炭であるため、以下に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された試料はいずれも樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は、試料 1 を除く 4 点で 60%を超える適正な値である。試料 1 の炭素含有率は、19%と木炭としては低い値となった。土を十分除去できなかったことから、測定された炭素の由来に若干の注意を要する。

第 11 表　堀の内遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA—190704	試料 1	出土地区：5 区　遺構：SI1—SP1 竪穴建物内柱穴	木炭	AaA	−26.01 ± 0.23	1,650 ± 20	81.46 ± 0.25
IAAA—190705	試料 2	出土地区：5 区　遺構：SI1—SP4 竪穴建物内柱穴	木炭	AAA	−28.09 ± 0.20	1,610 ± 20	81.87 ± 0.24
IAAA—190706	試料 3	出土地区：5 区　遺構：SK1　木炭 1 木炭焼成坑	木炭	AaA	−28.16 ± 0.20	1,340 ± 20	84.62 ± 0.24
IAAA—190707	試料 4	出土地区：5 区　遺構：SK1　木炭 2 木炭焼成坑	木炭	AAA	−26.57 ± 0.17	1,380 ± 20	84.26 ± 0.24
IAAA—190708	試料 5	出土地区：5 区　遺構：SP47	木炭	AAA	−28.12 ± 0.20	690 ± 20	91.81 ± 0.26

［IAA 登録番号：#9766］

第 12 表　堀の内遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age　（yrBP）	pMC　（%）			
IAAA—190704	1,660 ± 20	81.29 ± 0.24	1,647 ± 24	383calAD — 423calAD（68.2%）	337calAD — 430calAD（90.9%） 493calAD — 510calAD（3.0%） 518calAD — 528calAD（1.5%）
IAAA—190705	1,660 ± 20	81.35 ± 0.24	1,607 ± 24	405calAD — 432calAD（28.1%） 490calAD — 532calAD（40.1%）	398calAD — 475calAD（51.1%） 484calAD — 536calAD（44.3%）
IAAA—190706	1,390 ± 20	84.08 ± 0.24	1,341 ± 23	655calAD — 679calAD（68.2%）	646calAD — 710calAD（90.0%） 746calAD — 764calAD（5.4%）
IAAA—190707	1,400 ± 20	83.99 ± 0.24	1,375 ± 23	645calAD — 665calAD（68.2%）	622calAD — 676calAD（95.4%）
IAAA—190708	740 ± 20	91.23 ± 0.25	686 ± 22	1278calAD — 1298calAD（62.6%） 1373calAD — 1377calAD（5.6%）	1272calAD — 1306calAD（72.7%） 1363calAD — 1385calAD（22.7%）

［参考値］

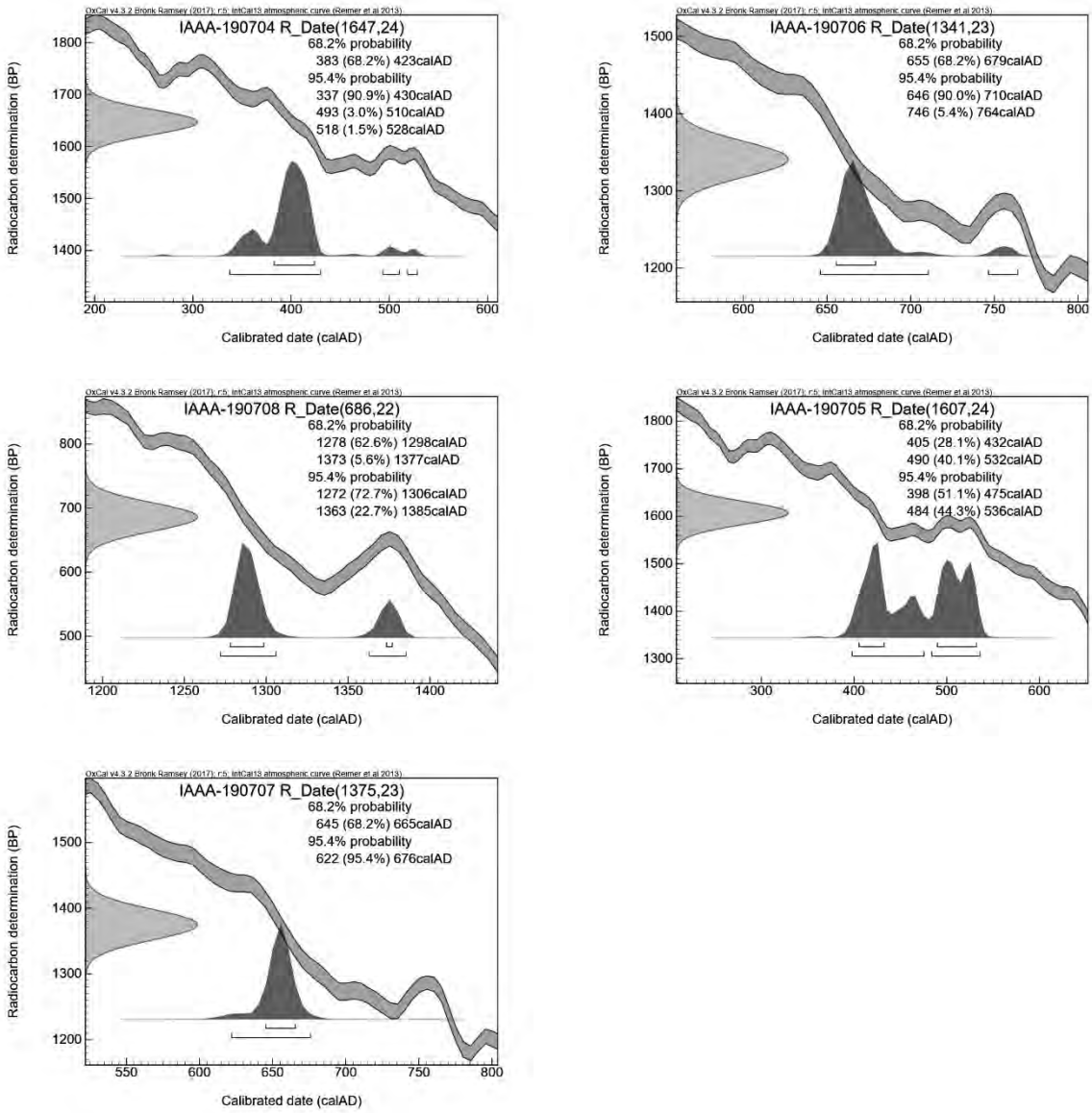
文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337—360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0—50,000 years cal BP, Radiocarbon 55（4）, 1869—1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分 , 佐原眞 , ウェルナー・シュタインハウス監修 , 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集 , ドイツ展記念概説　日本の考古学　上巻 , 学生社 , 14—19

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355—363



第 55 図　暦年較正年代グラフ（参考）

2　堀の内遺跡における樹種同定

（1）試料

堀の内遺跡は、山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。試料は、5区の竪穴建物SI 1の柱穴SP 1・SP 4から出土した木炭が各1点、SK 1の木炭焼成坑より出土した木炭2点の合計4点である（第13表）。

なお、同一試料を含む5点の放射性炭素年代測定が実施され、試料1が古墳時代中期頃、試料2が古墳時代中期から後期頃、試料3、4が古墳時代終末期頃の年代値を示した（第Ⅵ章1参照）。

（2）分析方法

試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製し、落射顕微鏡（OPTIPHOTO―2：Nikon）によって50～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

（3）結果

同定結果を第13表に示す。本遺跡の木炭は、クリ1点、キハダ属2点、アカメガシワ1点に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

・キハダ属　Phellodendron　ミカン科

年輪のはじめに大型でやや厚壁の丸い道管が、単独あるいは2個複合して2～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で方形の小道管が、多数集合して斜め方向および接線方向に帯状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は多列の同性放射組織型で、紡錘形を呈する。幅は1～3細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

・アカメガシワ　Mallotus japonicas Muell. Arg.　トウダイグサ科

やや小型の道管が、年輪のはじめに単独あるいは2～数個放射方向に複合して散在し、晩材部では小型の厚壁で丸い道管が、放射方向に数個つらなって散在する環孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は単列の異性放射組織型である。

第 13 表　堀の内遺跡における樹種同定結果

試料番号	出土地区	遺構名等	樹　種
試料 1	5 区	SI1―SP1	キハダ属
試料 2	5 区	SI1―SP4	キハダ属
試料 3	5 区	SK1　木炭 1	アカメガシワ
試料 4	5 区	SK1　木炭 2	クリ

（4）考察

竪穴建物 SI 1 の柱穴 SP 1 、SP 4 からはキハダ属が同定された。キハダ属には、キハダ、ヒロハノキハダなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 25m、径 1 m に達する。キハダ属はやや軽軟で、アテの少ない素直な材質をしている。また、水湿に強く枕木に利用され、北海道では土台や流し場の板に利用される。本遺跡では、柱穴より出土しているため、水湿に強い性質から礎板や柱などに利用されたと考えられる。

SK 1 の木炭焼成坑からはクリ、アカメガシワが同定された。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20 m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30 m、径 2 mに達する。クリは耐朽性が高く水湿によく耐え、保存性の極めて高い材である。縄文時代には燃料材としての利用も多いが、火力はあるものの火持ちはやや悪く、燃やすとはじける。アカメガシワは本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 10 m、径 30cm に達する。やや軽軟で、木器としてはほとんど用いられない。火力・火持ちは共に良いが割裂しにくい。燃料材としてみると、広葉樹は針葉樹に比べて組織が緻密な状態で比重が高く、火持ちが良いものが多い。また比重が高いので、針葉樹の半分ほどの量で同じ熱量を有することから、燃料材として用いられやすい。

なお、木炭の種類として、炭窯を用いず蒸し焼きにした軟らかい炭は和炭（にこずみ）、炭窯を用いて焼いた炭は荒炭（あらずみ）と呼ばれる。いずれの木炭も古代には作られるようになったと言われる。和炭は土坑を掘り、そこに木材を積み重ねて火をつけた後に土をかけて蒸し焼きにする伏炭法（伏焼法とも）によって古くから製造される。なお、現在では斜面を大きく切り込んだ施設を用いる例もある。和炭は比較的軟質でクヌギ、ナラ、クリ、マツなど多様な樹種が用材とされ、火持ちは短いが火力があり、火付けも良く、製鉄や冶金に利用されることが多かった。

SK 1 は炭窯ではなく直径 1 m程度の土坑で、簡素な木炭焼成坑である。木炭焼成坑より検出された試料として考えた場合、アカメガシワは木炭に利用される樹種にはあまり選定されず、クリと同定した試料は木炭としては柔らかい印象を受ける。そのことからこれらの試料は伏炭法を用いて和炭もしくはそれに近い炭として焼成されたと考えられる。また一方で、アカメガシワに関しては木炭を焼成する際の燃料に用いた雑木である可能性もある。

いずれの樹種も温帯に広く分布する樹木である。クリは乾燥した台地や丘陵地を好み、キハダ属は山地の林内に、アカメガシワは山野や林縁に生育する。またいずれの樹木も二次林要素であり、集落地や農耕などの開発による伐採や、木炭のための伐採などによって拓けた土地に二次林要素の樹木が多く生育したと考えられる。これらの樹木は当時本遺跡周辺にも生育しており、近隣地または流通に

よってもたらされたとみなされ、開発によって拓けた土地に分布した二次林の樹木を利用していたと推定される。

文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.

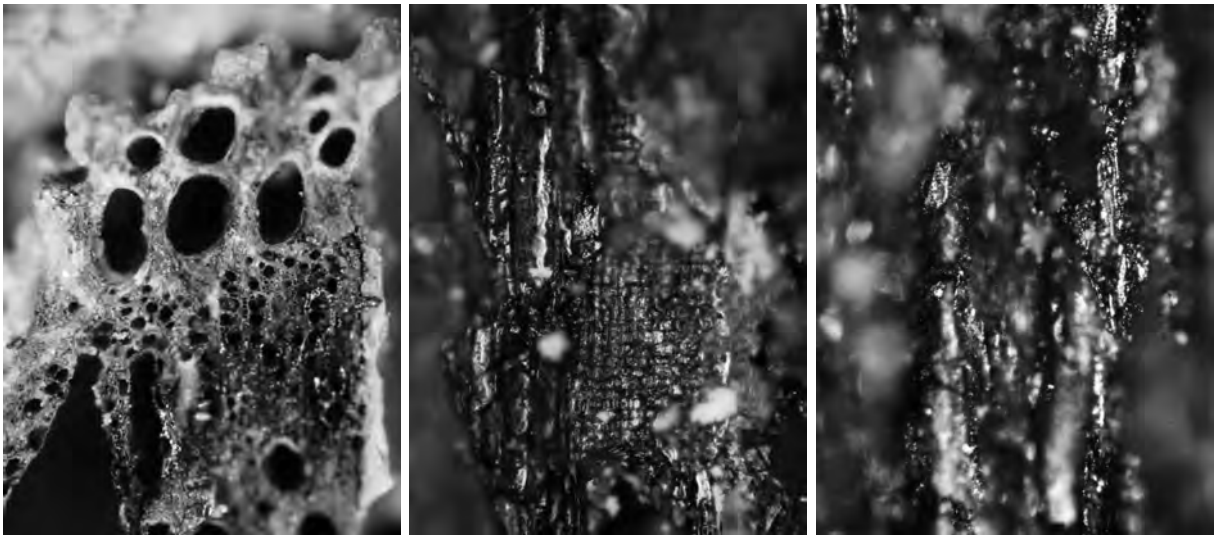
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20―48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49―100.

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，p.176.

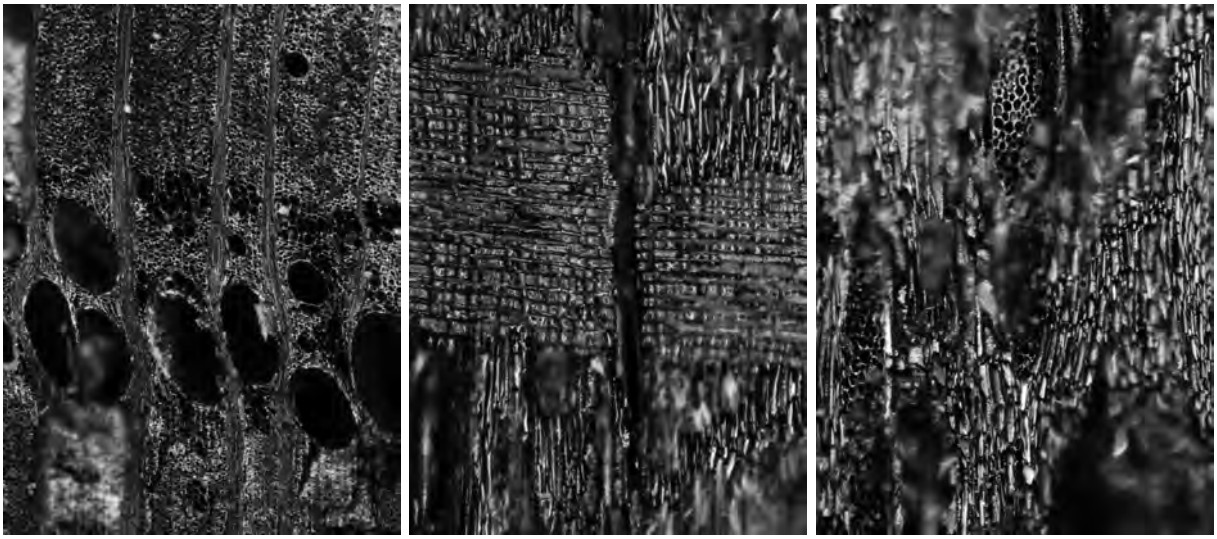
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第 1 号，植生史研究会，p.242.



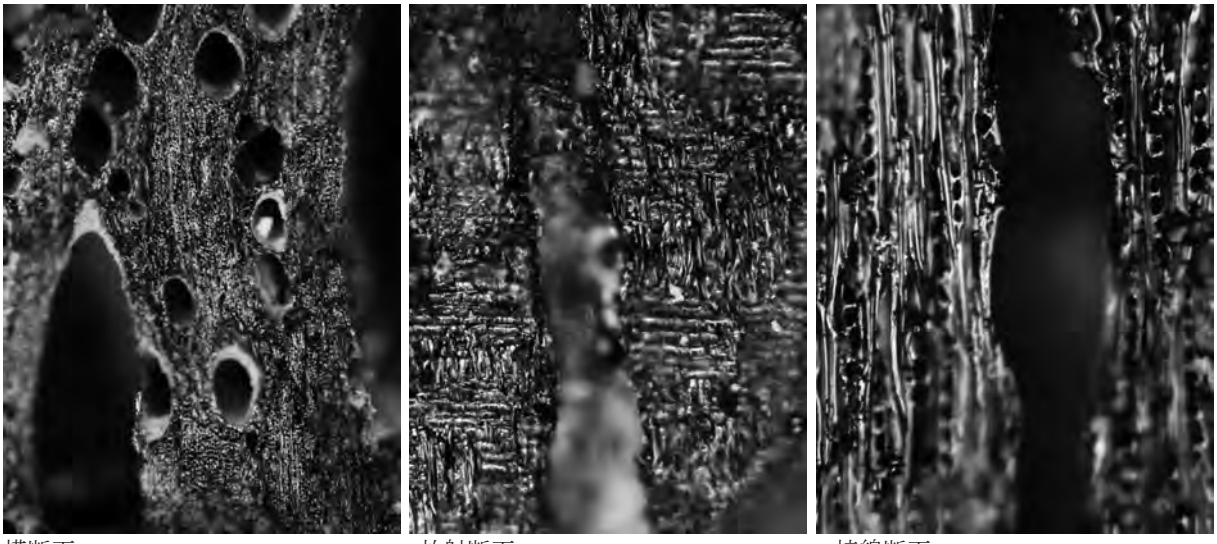
横断面 ━ 0.1mm　放射断面 ━ 0.1mm　接線断面 ━ 0.1mm

クリ　試料４　5区SK1木炭2



横断面 ━ 0.1mm　放射断面 ━ 0.1mm　接線断面 ━ 0.1mm

キハダ属　試料２　5区SI1-SP4



横断面 ━ 0.1mm　放射断面 ━ 0.1mm　接線断面 ━ 0.1mm

アカメガシワ　試料３　5区SK1木炭1

第 56 図　堀の内遺跡の木材

3　川東遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（1）測定対象試料

川東遺跡は、山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。測定対象試料は、１区 SP18 と２ A 区 SK５からそれぞれ１点ずつ出土した炭化材２点である（第 14 表）。なお、試料２と同一試料を含む炭化材２点を対象に樹種同定も実施されている（第Ⅵ章４参照）。

（2）化学処理工程

①メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

②酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 14 表に記載する。

③試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

⑥グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（3）測定方法

加速器をベースとした ^{14}C―AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（4）算出方法

①δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 14 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

②^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 14 表に、補正していない値を参考値として第 15 表に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

③ pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第 14 表に、補正していない値を参考値として第 15 表に示した。

④暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 15 表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

（5）測定結果

測定結果を第 14・15 表に示す。

1 区 SP18 から出土した試料 1 の ^{14}C 年代は 960 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 1025 ～ 1147cal AD の間に 3 つの範囲で示される。2 A 区 SK 5 から出土した試料 2 の ^{14}C 年代は 870 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 1160 ～ 1210cal AD の範囲で示される。

今回測定された試料はすべて炭化材であるため、以下に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された試料はいずれも樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は試料 1 が 67%、試料 2 が 66%の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第 14 表　川東遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA—191129	試料 1	出土地区：1 区　遺構：SP18	炭化材	AAA	**−27.07 ± 0.43**	**960 ± 20**	**88.70 ± 0.26**
IAAA—191130	試料 2	出土地区：2A 区　遺構：SK5	炭化材	AAA	**−27.79 ± 0.41**	**870 ± 20**	**89.73 ± 0.26**

［IAA 登録番号：#9876］

第 15 表　川東遺跡の放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age　（yrBP）	pMC　（%）			
IAAA-191129	1,000 ± 20	88.33 ± 0.25	962 ± 23	1025calAD — 1046calAD（27.1%） 1093calAD — 1121calAD（33.6%） 1140calAD — 1147calAD（ 7.5%）	1020calAD — 1059calAD（33.1%） 1069calAD — 1155calAD（62.3%）
IAAA-191130	920 ± 20	89.22 ± 0.25	870 ± 23	1160calAD — 1210calAD（68.2%）	1049calAD — 1084calAD（11.2%） 1125calAD — 1137calAD（ 1.9%） 1150calAD — 1223calAD（82.3%）

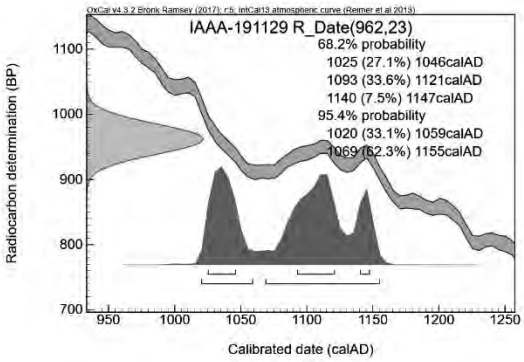
［参考値］

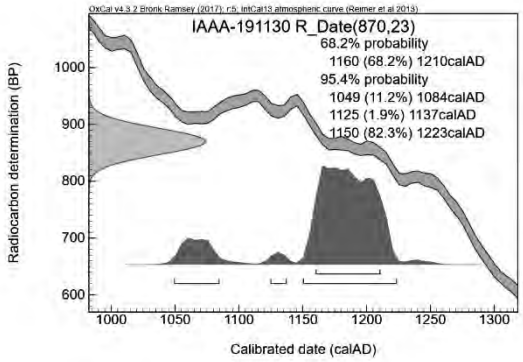
文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51（1）, 337—360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0—50,000 years cal BP, Radiocarbon 55（4）, 1869—1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19（3）, 355—363





第 57 図　暦年較正年代グラフ（参考）

４　川東遺跡における樹種同定

（１）試料

川東遺跡は、山口県美祢市秋芳町岩永本郷に所在する。試料は、２Ａ区のSP53から出土した炭化材１点とSK ５から出土した炭化材１点の合計２点である（第16表）。

なお、試料２と同一試料を含む炭化材２点の放射性炭素年代測定が実施され、試料２は12世紀から13世紀頃の年代値を示した（第Ⅵ章３参照）。

（２）分析方法

試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製し、落射顕微鏡（OPTIPHOTO―2：Nikon）によって50～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

（３）結果

同定結果を第16表に示す。本遺跡の炭化材はいずれもヒサカキ属に同定された。以下に同定の根拠を示す。

・ヒサカキ属　Eurya　ツバキ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で１～３細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

第16表　川東遺跡における樹種同定結果

試料番号	出土地区	遺構名等	樹　種
試料１	2A区	SP53	ヒサカキ属
試料２	2A区	SK5	ヒサカキ属

（４）考察

同定の結果、川東遺跡の炭化材はヒサカキ属２点であった。

ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10 m、径30cmまで達する。ヒサカキ属は、概して強さ中庸の材で、器具などに用いられる。杭や農具柄などに利用されることがあるが、建築部材としての利用は比較的少ない。ヒサカキ属の中でもヒサカキは里山の管理のために頻繁に伐採を受けるが、すぐに芽を出す強い萌芽

力をもっており、そのため、昔は薪炭木として利用されてきた。一方でヒサカキはハイジルシバと呼ばれ、その枝葉の灰を媒染剤に利用する例もあるが、本試料の出土地点が炉跡ではないので、媒染剤としての利用の可能性は低い。また、サカキの少ない地域ではその代替品として祭事に利用される場合がある。

同定されたヒサカキ属は暖帯に広く分布する樹木で林内、尾根筋などに自生し二次林内にも多い常緑の小高木である。本遺跡周辺にも分布しており、比較的近隣地より持ち込まれたと考えられる。

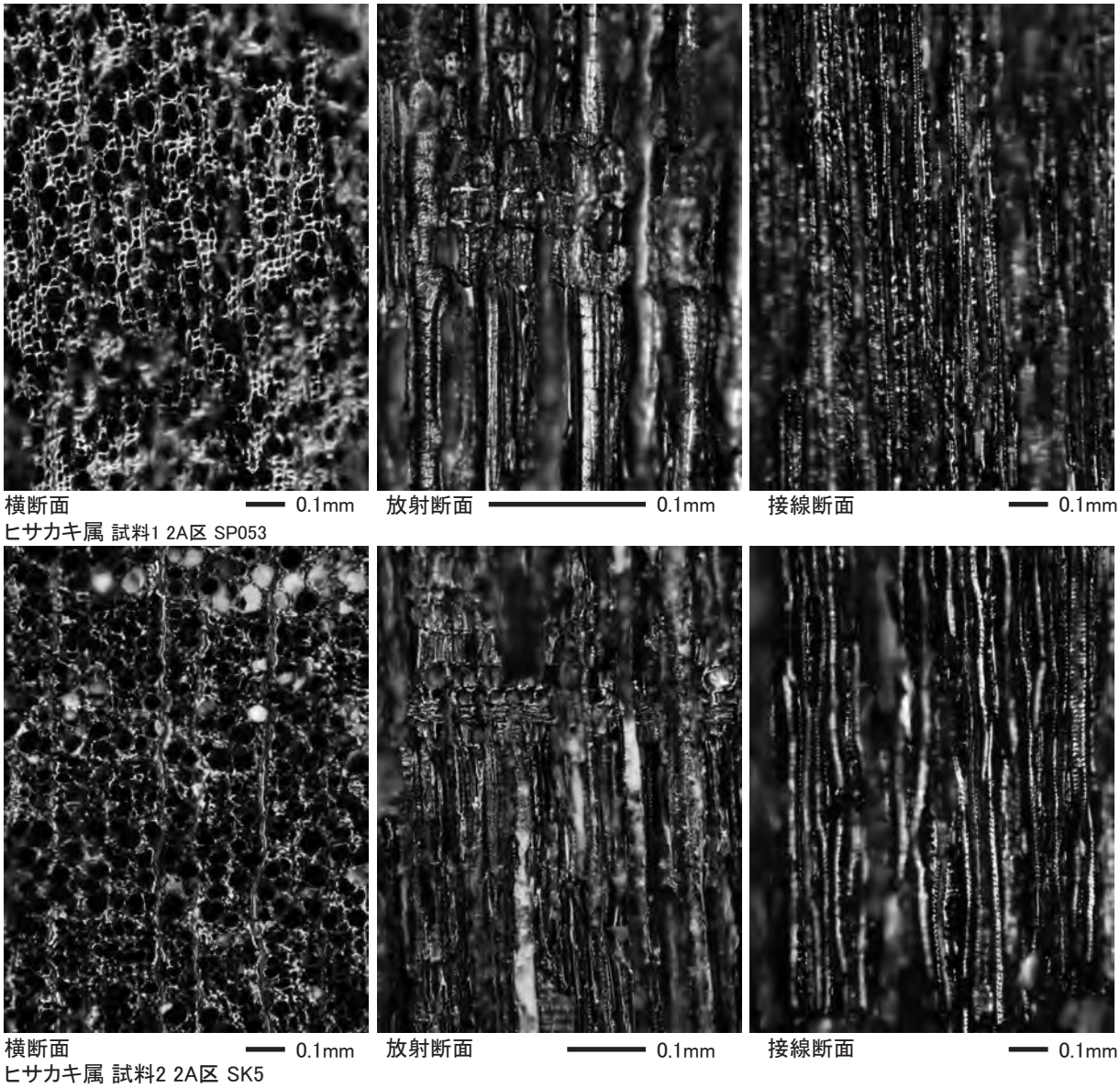
文献

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49―100.

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，p.176.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第 1 号，植生史研究会，p.242.



第 58 図　川東遺跡の木材

Ⅶ　総　括

ここでは、今回発掘調査を実施した堀の内遺跡・川東遺跡・土井敷遺跡の発掘調査成果と、山口県教育委員会が平成30年度に実施した堀の内遺跡の立会調査の成果をもとに、各遺跡の時代ごとの様相を整理し、岩永本郷地区の集落変遷についてまとめておく。

また、川東遺跡で出土した奈良火鉢の位置づけについても若干述べておきたい。

1　堀の内遺跡

堀の内遺跡では、全調査区を合わせて、弥生時代の竪穴建物２棟、古墳時代の竪穴建物２棟、中世の掘立柱建物２棟、井戸２基、土坑８基、溝７条、柱穴約650個等を検出した。県教委の立会調査の１・２区（以下、県立会１・２区とする）でも、井戸２基、土坑２基、溝２～３条、柱穴約200個を検出した。

弥生時代の遺構は、１・２・４区と県立会２区で検出した。１区の円形竪穴建物SI 1周辺の柱穴からは、弥生時代中期初頭の甕が出土した。そのほか、２区の柱穴SP143から内面に貼付突帯をもつ壺、遺構外から如意形口縁をもつ甕が、４区の土坑SK 2から壺底部、遺構外から甕が、５区遺構外から頸部に刻み目突帯のある壺がそれぞれ出土した。出土土器の年代は、いずれも弥生時代中期初頭から中期中葉頃にかけてで、竪穴建物の時期とも齟齬はない。また、３区を除く各調査区から、磨石や石鏃等の石器が出土した。５区出土の打製石斧は、縄文時代晩期に遡る可能性が高い。これらの遺物と、本郷川流域を望む低地から微高地にかけての立地から、本遺跡では、弥生時代中期初頭から中葉にかけて、水稲耕作に適した本郷川沿いの低湿地の周辺に集落が営まれたと考える。なお、美祢市下村遺跡では、独立丘陵上に営まれた、弥生時代中期初頭の集落が確認されている。

古墳時代の遺構は、２・４・５区で検出した。５区は、方形竪穴建物SI 1とSI 2があり、２棟の建物が重複した状態で検出した。周辺から出土した土師器等から、古墳時代後期に比定する。遺構の周辺から滑石の原石も出土しており、建物内もしくはその付近で滑石製品を製作した可能性がある。なお、竪穴建物SI 1の柱穴SP 1とSP 4から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代（1δ）がそれぞれ383～423calADで古墳時代中期頃、405～532calADで古墳時代中期から後期頃にかけての年代を示した。周辺の出土遺物より約100年程度古い年代を示しており、古木効果を考慮する必要がある［第Ⅵ章１参照］。

遺物の年代から、５区の竪穴建物の時期を古墳時代後期とすると、弥生時代中期後半以降、およそ600年の間、集落の空白があることになる。弥生時代中期後半と後期後半における、台地面や丘陵稜線への集落の垂直的な移行は広域的な現象で、山口県内も例外ではない。本遺跡周辺でも、弥生時代後期には、周縁の丘陵や段丘上に集落が移動したと考えられる。

古代の遺構は、５区で検出した溝SD 1のみである。３・４区でも溝から古代の須恵器が出土したが、中世の埋没時に伴う可能性が高い。５区の溝SD 1で出土した須恵器と土師器は、８世紀後半頃と考えられる。なお、５区で検出した木炭焼成坑SK 1について、出土炭化材２点の放射性炭素年代測定

の結果、暦年較正年代（1 δ）がそれぞれ 655 ～ 679calAD、645 ～ 665calAD の年代を示した［第Ⅵ章 1 参照］。いずれも古墳時代終末期の年代だが、先述の SI 1 柱穴出土の炭化材と同様、古木効果を考慮すれば、実際の年代は 100 年程度新しく、8 世紀後半頃となり、溝 SD 1 と同じ時期となる可能性がある。

中世の遺構は、各地区及び県立会 1 ・ 2 区で検出しており、本遺跡で主体となる時期である。2 区では掘立柱建物 2 棟を復元した。掘立柱建物 SB 1 の構成柱穴からは、土師器皿と東播系須恵器の鉢が出土しており、11 世紀後半から 12 世紀代にかけて、すなわち平安時代後期から末頃の年代に比定できる。また、1・2・4 区で出土した玉縁口縁をもつ白磁椀も同じ頃と考えられる。この地には、1220（承久 2）年に、岡部景澄が長門国岩永の地頭に補任され、下向して以降、岡部氏の居館が構えられたといわれる。今回の発掘調査では、それより遡る平安時代末頃から鎌倉時代初頭頃にかけての状況を確認できた。すなわち、岡部氏下向以前にも、輸入陶磁器等の高級品をもちうる有力層が、この地に居を構えていた可能性がある。

その他の中世の遺構として、3 区の自然流路、4 区の溝 2 条、3 ・ 5 区の井戸等がある。いずれも出土遺物や周辺遺構との関係から、室町時代中期の 15 世紀頃までに埋没したと推定する。これらは水稲耕作等と関わる灌漑施設として機能したと考える。これらを除き、岡部氏下向の 13 世紀前半以降、近世後期より前の状況を示す確実な遺構や遺物は確認できなかった。すなわち、調査区内の状況からは、岡部氏の居館跡との直接的な関わりを示す根拠は見出しにくい。これは、居館跡の範囲が、現在の国道 435 号より南東側であったと推定されており、今回の調査区が、実際には「堀の外」であったことによると考えられる。

近世以降の遺構として、4 区の土坑 SK 1 ・ 5 ・ 6 がある。このうち、SK 5 から、桶や樽等と推定する板材のほか、平瓦や萩焼の椀が出土した。SK 6 からも、平瓦と萩焼椀が出土しており、17 世紀後半以降の年代と考える。いずれも溜め桝等の機能があったと想定する。これらの土坑は、15 世紀頃に埋没した溝 SD 1 を壊して築かれていることから、土坑が機能する近世後期までの間、この付近が荒地等となっていた可能性がある。

2　川東遺跡

川東遺跡では、全調査区を合わせて、土坑 14 基、溝 5 条、柱穴 122 個以上を検出した。

各地区とも、古墳時代以前の確実な遺構は確認しておらず、遺物も出土していない。1 区は古代、2 A・2 B 区は、古代と中世の遺構が主体となる。中世後期から近世にかけての遺物は少量出土した。

古代の遺構として、1 区で検出した柱穴 SP12・19・23 は、いずれも埋土でしっかりと固定された柱穴で、掘立柱建物の一部の可能性が高い。2 A 区で検出した土坑は用途不明だが、8 世紀後半に比定する土坑 SK 6 からは鉱滓が出土した。8 ～ 9 世紀に、集落または何らかの公的施設が存在したと推定する。

中世の遺構は、12 世紀後半頃と 14 世紀後半頃の大きく 2 時期に分かれるが、後者の時期の遺構が大部分である。12 世紀後半頃の遺物として、龍泉窯系青磁の皿や椀が、2 A ・ 2 B 区の両地区から出土したほか、1 区の柱穴からも 12 世紀頃の白磁椀が出土している。14 世紀後半頃の遺構とし

て、２Ｂ区の柱穴 SP13 から、土師器の皿８個体分以上が、まとまって出土しており、地鎮や廃絶儀礼等、建物と係る祭祀あるいは儀礼を執り行ったと考えられる。同時期における、２Ａ区の柱穴 SP ８・13・58 からは根石を検出しており、建物の存在が推定できる。

このように、２Ａ区から２Ｂ区にかけて、14 世紀後半頃に何らかの建物が存在したと考える。そして、出土遺物が土師器皿と杯からなる供膳具を主体とすること、２Ａ区北西隅付近の遺物包含層に多量の皿や杯が含まれていたことから、岡部氏と同時期に、政務あるいは饗宴等を執り行う施設が存在した可能性が高い。とりわけ、２Ａ区の溝 SD ５から出土した瓦質土器の火鉢は、「奈良火鉢」と呼ばれるもので、後述するように、布教活動や武士階級との関わりが深いことが指摘されている。

なお、２Ａ区を中心に、鞴羽口、取鍋、鉱滓等の冶金関連遺物が出土したことから、上述の施設に付属して精錬や鍛冶等を行っていたと考えられる。

３　土井敷遺跡

土井敷遺跡では、１・２区を合わせて、土坑 17 基以上、柱穴約 240 個等を検出した。

古墳時代以前の確実な遺構は確認していないが、２区の SK ２上面から磨石が出土しており、弥生時代の生活の痕跡がみられる。

古代の遺構として、１区南西側の柱穴 SP149 で須恵器甕が出土しており、８世紀から９世紀にかけての時期に比定できる。その付近の柱穴 SP96 では根石を検出しており、これも同時期の可能性がある。１区周辺で、古代に何らかの施設が存在したと考える。

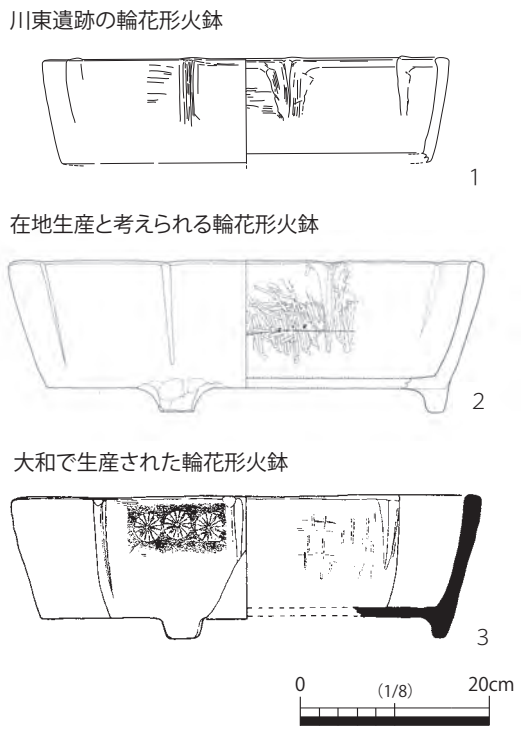
中世は、１・２区とも確実に時期がわかる遺構は確認できなかった。特筆すべき遺物として、１区表土下で出土した朝鮮時代の粉青沙器椀がある。印花粉青で、15 世紀代に比定できる。美祢市内では、銭屋遺跡と砂地岡遺跡で粉青沙器（印花粉青）が出土している。山口県内では、粉青沙器が大内氏館跡や大内氏関連町並遺跡を中心とする山口盆地周辺で多く出土する点からみて、当地の地頭であった岡部氏が、守護大名の大内氏との関わりのなかで入手した可能性がある。

近世以降の遺構として、２区では、桶や樽等を埋設した可能性のある土坑 SK １を検出した。１区南東付近では、近世以降に掘り込まれた、用途不明の土坑群を検出した。この地は、近世以降、農地として利用されており、それと関わる遺構と推測する。

４　「奈良火鉢」について（第 59 図）

川東遺跡２Ａ区の溝 SD ５で出土した瓦質土器の鉢は、「奈良火鉢」と考えられる。「奈良火鉢」は、中世後期に、大和国の「西京火鉢作座」で生産されたとみられる、平面輪花状の瓦質土器の浅鉢をいう。

本遺跡出土のものは、浅鉢形に分類できるもので、復元径が 41.2㎝、足を除く器高が 12.5㎝を測る。平面輪花状を呈するが、外面口縁部付近に菊花文等のスタンプ文はない。平面輪花状の浅鉢形火鉢（以下、輪花形火鉢とする）は、14 世紀初頭には確実に出現し、13 世紀後半まで遡る可能性がある、浅鉢形火鉢の中でも初期の段階のものである。川東遺跡出土の輪花形火鉢も、14 世紀前半頃には生産されたものと考える。溝 SD ５で共伴する土器は、14 世紀中頃から後半にかけてのものであるが、輪花形火鉢は伝世を考慮できることから、大きな齟齬はない。



2　福岡県大宰府条坊跡第158次調査SD001出土
（太宰府市教育委員会2002）
3　奈良県布留遺跡西小路地区FH17d7溝出土（佐藤2009）

第 59 図　川東遺跡出土の輪花形火鉢と「奈良火鉢」の例

また、川東遺跡出土例の技法上の特徴をみると、破片のため、底部の離れ砂の有無は不明だが、胎土は石英や長石粒を含み精良で、輪花形の抉り部分は棒状工具等で成形後丁寧なヘラミガキを施すなど、典型的な大和の輪花形火鉢の特徴をとる。その一方で、スタンプ文をもたない、体部内外面を横方向のヘラミガキで仕上げるなど、典型的な例から外れる特徴も併せもつ。同様な例として、大宰府条坊跡 158 次調査で出土した輪花形火鉢がある。博多近辺では在地系譜の模倣生産を行っていたとされることから、本遺跡出土例は、大和で生産された「奈良火鉢」ではなく、在地または近隣地域で模倣生産した可能性もある。

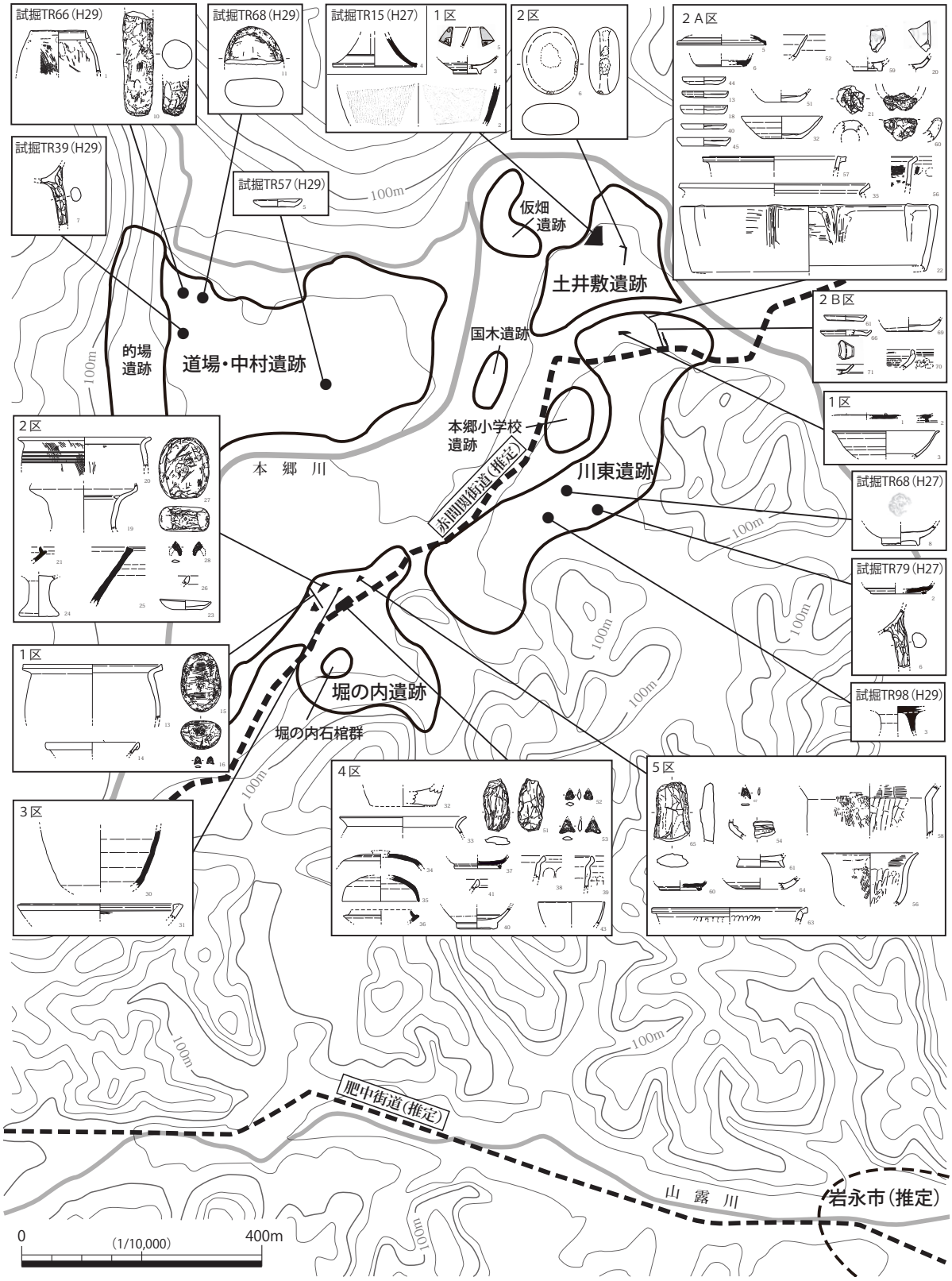
輪花形火鉢の模倣生産の背景として、律宗の布教活動や北条得宗の関係拠点等、宗教的・政治的な関わりが指摘される。そうすると、川東遺跡において輪花形火鉢が出土した背景として、当時、この地に勢力をもった岡部氏が関わっていた可能性もあろう。

5　岩永本郷地区の集落変遷（第 60 図）

最後に、今回の発掘調査によって明らかとなった成果と、平成 27・29 年度に実施した試掘調査の出土遺物、過去の分布調査等を参考に、現時点での岩永本郷地区における弥生時代以降の集落変遷についてまとめておきたい。

弥生時代は、本郷川流域右岸に位置する堀の内遺跡 1 ・ 2 区の低地部に弥生時代中期前半頃の集落を確認したほか、土井敷遺跡でも磨石が出土した。過去には、川東遺跡でも弥生土器片が表採されている。本郷川流域左岸では、道場・中村遺跡の試掘調査で磨石が出土している。このように、弥生時代中期頃までの集落は、本郷川流域両岸の低地部から丘陵裾部にかけて分布する。弥生時代中期末以降は、本郷盆地の北東側、内ヶ島から旦にかけての丘陵に分布の中心が移ったと考えるが、堀の内遺跡の調査区南側の丘陵裾部では、弥生時代後期の箱式石棺群が確認されており、丘陵部に移って、この時期まで一部の集落が存続した可能性が高い。

古墳時代前・中期は、本郷盆地内で確実な遺構は確認していない。後期になると、堀の内遺跡 5 区で竪穴建物を確認したほか、堀の内遺跡 2 区と 4 区や、川東遺跡と土井敷遺跡の試掘調査で同時期の須恵器が出土している。一方、本郷川流域左岸では、表採遺物から、的場遺跡で古墳が存在した可能性が高い。これらから、盆地周縁部の丘陵裾部から丘陵部にかけて、古墳時代後期の集落や古墳・埋葬地が存在したと考える。



第 60 図　岩永本郷地区の集落分布と各時期の出土遺物　（遺物の縮尺は 1/10）

古代は、川東遺跡１区と２Ａ区や、土井敷遺跡１区で掘立柱建物の柱穴等を確認したほか、堀の内遺跡５区で溝を確認し、３・４区で須恵器が出土した。いずれも奈良時代後期から平安時代前期にかけてと考えられる。この時期には、川東遺跡を中心として、集落あるいは公的施設等が存在したと考えられる。

中世は、平安時代後期から末頃にかけてと、室町時代前期の集落に大きく分けられる。前者では、川東遺跡と堀の内遺跡の低地部から丘陵裾部にかけて分布する。後者では、川東遺跡が中心となり、堀の内遺跡には集落の痕跡が認められない。本郷川流域左岸の道場・中村遺跡では、試掘調査で出土した土器から、室町時代の集落が存在したと推定する。このように、室町時代には本郷川流域両岸に集落が散在する。そして、堀の内遺跡で集落がみられなくなるのは、今回の調査区の南東側にあたる岡部氏の居館周辺に中心が移るためと考えられる。一方で、川東遺跡で「奈良火鉢」のような武士階級との関連を示す遺物が出土する点からみて、この辺りにも、岡部氏と関わる何らかの施設が存在した可能性が高い。

また、岩永本郷地区の南方の山露川に沿って、大内氏の時代には、山口と豊北の肥中浦を結ぶ肥中街道が通り、その中継地として岩永市が賑わいをみせていた。肥中浦は、日明貿易や日朝貿易の窓口として重要な港であり、豊北地域の遺跡からは朝鮮半島産の陶磁器が多く出土している。一方、近世の赤間関街道は、堀の内遺跡の調査区南東側と川東遺跡の調査区南側を通るルートであり、現在の集落がこの街道沿いに存在する点からみて、近世の集落をほぼそのまま踏襲したものと推定する。この赤間関街道は、堀の内の東方にある河原で肥中街道と合流するが、大内氏の時代に、堀の内から肥中街道に至るこのルートが存在したかどうかは定かではない。しかし、肥中街道沿いの岩永市へは、堀の内付近から比較的容易にアクセスできることから、その経営にあたって、岡部氏が主要な役割を果たしたことは想定できる。土井敷遺跡において、朝鮮半島産の粉青沙器が出土することは、このような経緯とも無関係ではないだろう。

引用・参考文献

佐藤亞聖 2009「輪花形火鉢の諸問題」『中近世土器の基礎研究XXII』日本中世土器研究会

佐藤亜聖 2017「中世後期における瓦質土器の様相とその意義」『山陰における瓦質土器－火鉢と風炉を中心として－』第 16 回山陰中世土器検討会資料集

秋芳町教育委員会 1981『三戸遺跡』秋芳町埋蔵文化財調査報告書第２集

太宰府市教育委員会 2002『太宰府条坊跡 21 －第 156・157・158 次調査－』

立石堅志 1995「奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

田畑直彦 2014「内折口縁土器について－長門西部における弥生時代前期末～中期初頭の様相－」『考古学研究』第 61 巻第２号

新田和央 2017「広域展開した瓦器－奈良火鉢・風炉について－」『中近世陶磁器の考古学』第７巻、雄山閣出版

乗安和二三 2000「山口県における高地性集落」『山口県史』資料編・考古１、山口県

藤原彰久 2007「中世火鉢の研究－山口県内出土資料を中心として（その１）－」『陶塤』第 20 号、財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター

増野晋次 2017「山口県出土の朝鮮陶磁」『山陰における高麗・朝鮮陶磁』第 15 回山陰中世土器検討会資料集

山口県教育委員会 1996『赤間関街道』歴史の道調査報告書

山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2007『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 60 集

山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2017『中ノ浜遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第 99 集

写 真 図 版
（堀の内遺跡）

遺跡遠景（南から）

図版 1

1　遺跡遠景（南西から）

2　遺跡遠景（南東から）

1　遺跡とその周辺（真上から、上が北）

2　遺跡全景（真上から、上が北東）

図版 3

1　遺跡全景（北西から）①

2　遺跡全景（北西から）②

1　遺跡全景（南東から）

2　遺跡全景（南西から）

図版 5

1　県立会１区調査後全景（南東から）

2　県立会１区西壁土層断面（東から）

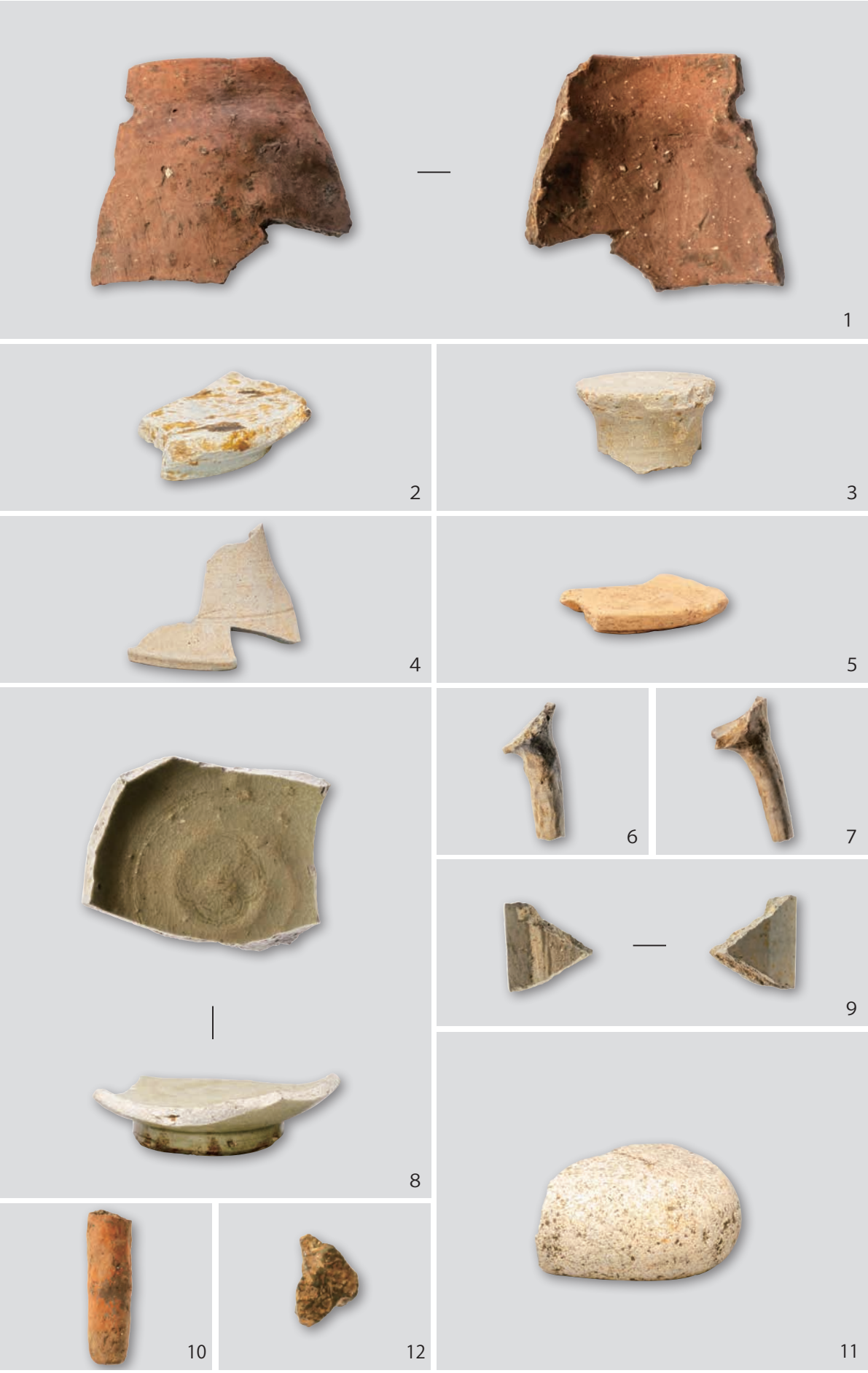
1　県立会１区井戸完掘状況（南から）

2　県立会１区柱穴土器出土状況（南から）

図版 7

1　県立会２区調査後全景（北東から）

2　県立会２区北西壁及び土坑 SK201 土層断面（南東から）



1　試掘調査出土遺物

図版 9

1　１区調査後全景（南東から）

2　１区調査後全景（北西から）

3　１区北半調査後（南東から）

4　１区 SI ２完掘状況（南西から）

5　１区 SI ２完掘状況（北西から）

1　1区 SI 1検出状況（南西から）

2　1区 SI 1完掘状況（南西から）

図版 11

1　1区 SI 1完掘状況（南東から）

2　1区 SI 1完掘状況（北から）

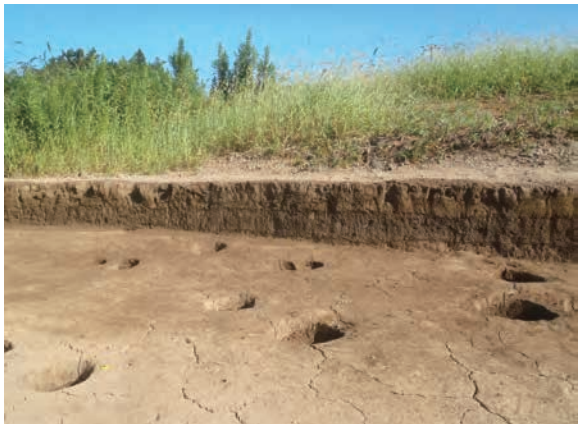
1　1区 SD 3完掘状況（南西から）

2　1区 SP108 遺物出土状況（北東から）

図版 13

1　２区調査後全景（南西から）

2　２区南東壁土層断面（北から）



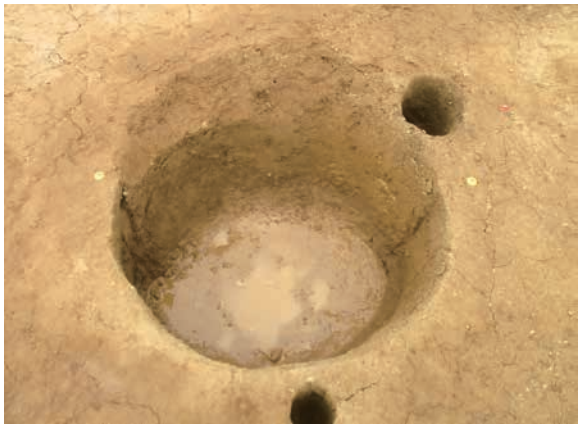
3　２区南東壁土層断面（西から）

4　２区調査後全景（北から）

1　２区中央部完掘状況（北西から）

2　２区 SK １検出状況（西から）

3　２区 SK １土層断面（南から）



4　２区 SK １完掘状況（南から）

5　２区 SP48 土器出土状況（東から）

図版 15

1　2区 SP79 土器出土状況（北東から）

2　2区 SP143 土器出土状況（南東から）

1　３区調査後全景（南西から）

2　３区調査後全景（北西から）

図版 17

1　３区北東壁土層断面（南西から）

2　３区 SE １検出状況（東から）

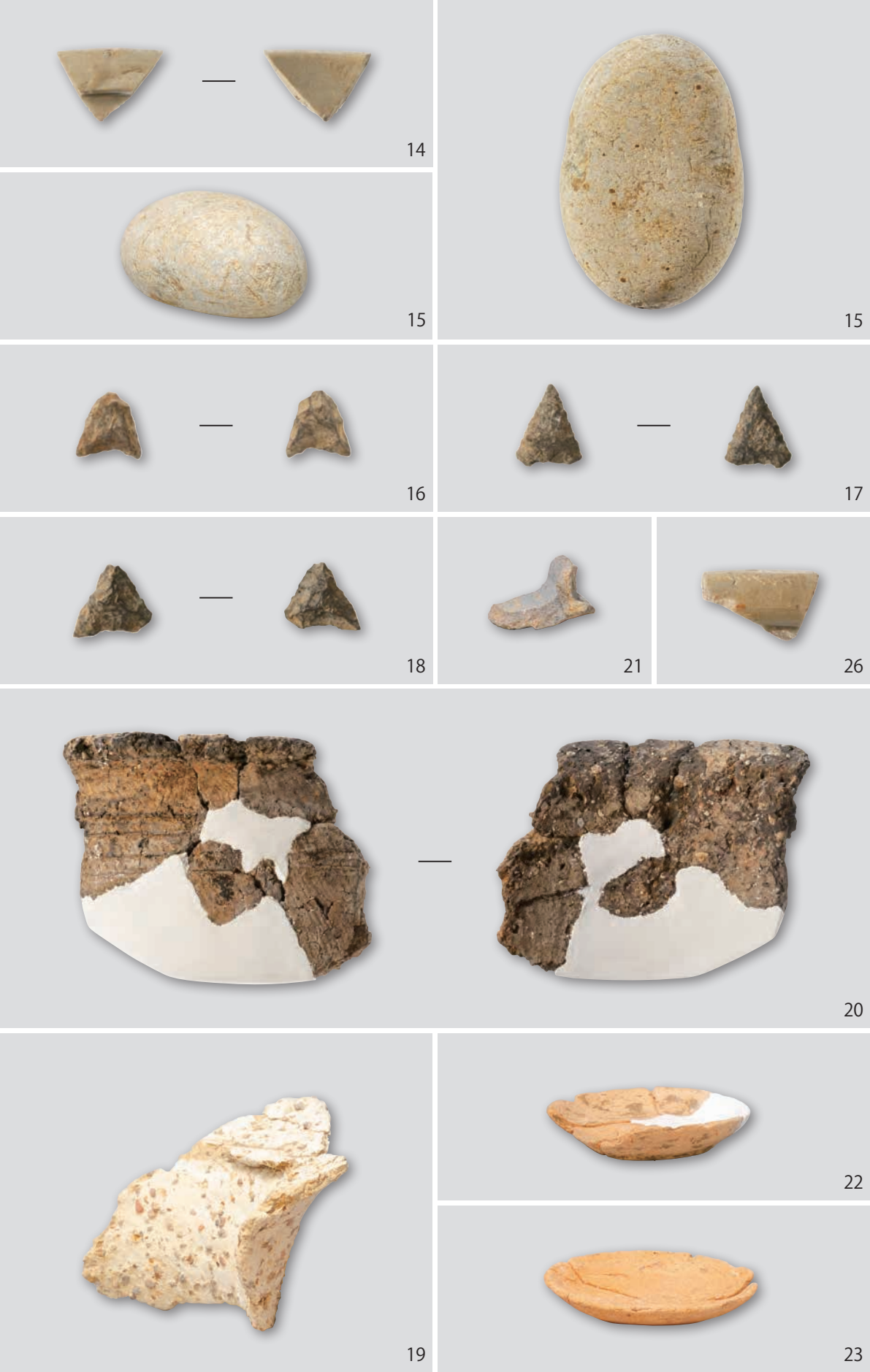
3　３区 SE １土層断面（東から）

4　３区 SE １完掘状況（西から）

5　３区 SD １完掘状況（東から）

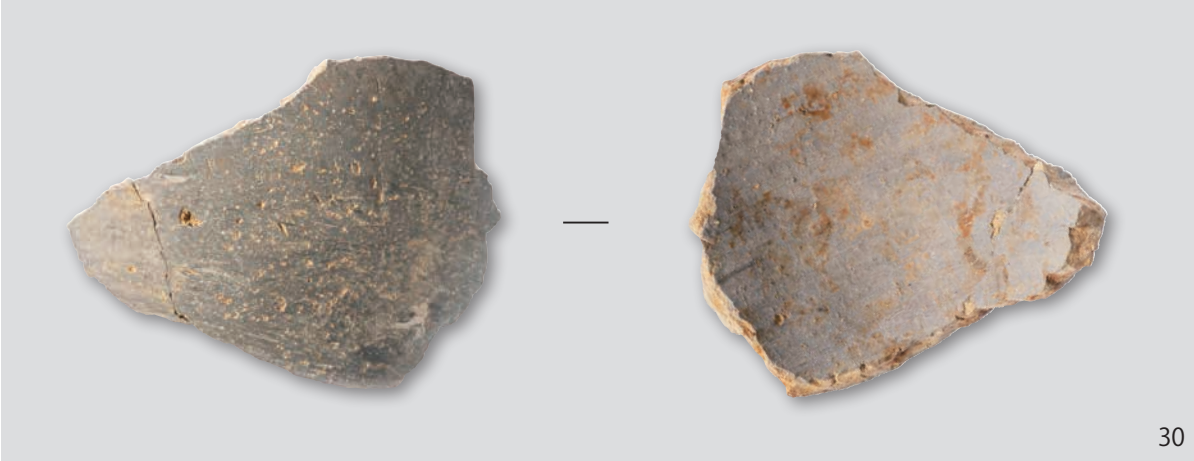
6　３区 SD １土器出土状況（北から）

7　１区出土遺物



1　1・2区出土遺物

図版 19



1　2・3区出土遺物

1　４区調査後全景（北から）①

2　４区調査後全景（南西から）

3　４区調査後全景（北から）②

図版 21

1　４区 SK １検出状況（南東から）

2　４区 SK １土層断面（南東から）

3　４区 SK １掘り下げ状況（南東から）

4　４区 SK ３検出状況（南東から）

5　４区 SK ３土層断面（南西から）

6　４区 SK ４検出状況（東から）

7　４区 SK ４土層断面（西から）

8　４区 SK ４完掘状況（西から）

1　４区 SK ５木製品出土状況（南東から）

2　４区 SK ５土層断面（南東から）

3　４区 SK ５完掘状況（東から）

4　４区 SK ６土層断面（南東から）

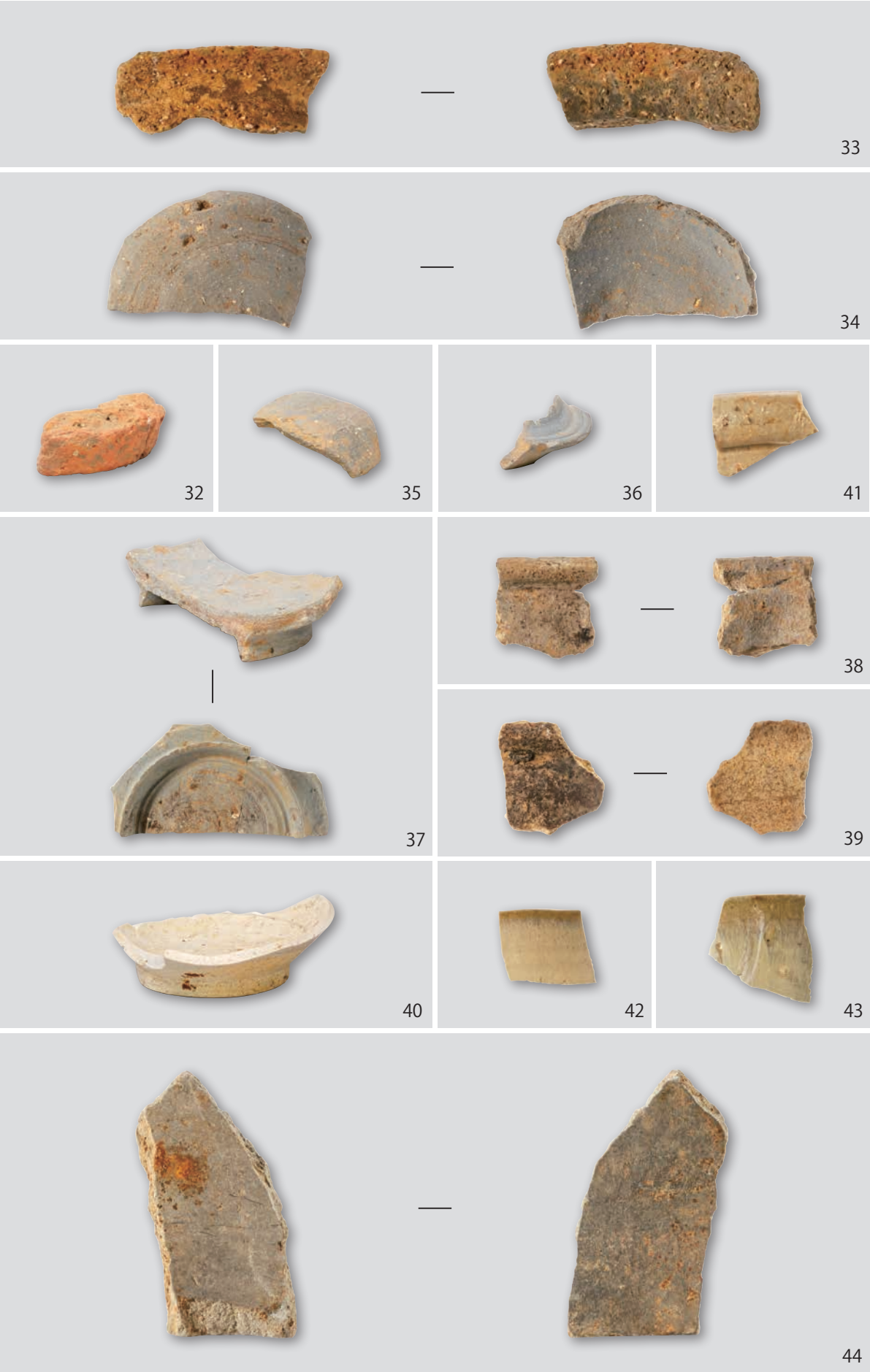
5　４区 SK ６完掘状況（南東から）

図版 23

1　４区 SK ６瓦出土状況（南東から）

2　４区 SD １完掘状況（北西から）

3　４区 SD １完掘状況（南東から）



1　４区出土遺物（1）

図版 25

1　４区出土遺物（２）

1　４区出土遺物（３）

図版 27

1　5 区調査後全景（南西から）

2　5 区調査後全景（北西から）

1　５区調査後全景（北東から）

2　５区 SI １・２検出状況（南東から）

図版 29

1　5区 SI 1・2完掘状況（南東から）

2　5区 SI 1・2完掘状況（南西から）

1　5区 SI 1・2完掘状況（北東から）

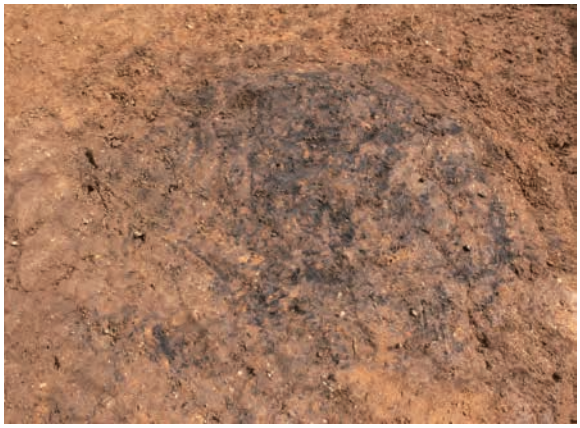
2　5区 SI 1・2検出状況（南西から）

3　5区 SI 1・2検出状況（北東から）

4　5区 SE 1完掘状況（南東から）

5　5区 SE 1（主要部）完掘状況（南東から）

図版 31



1　5 区 SK 1 検出状況（南西から）

2　5 区 SK 1 木炭検出状況（南西から）

3　5 区 SK 1 木炭検出状況（北東から）

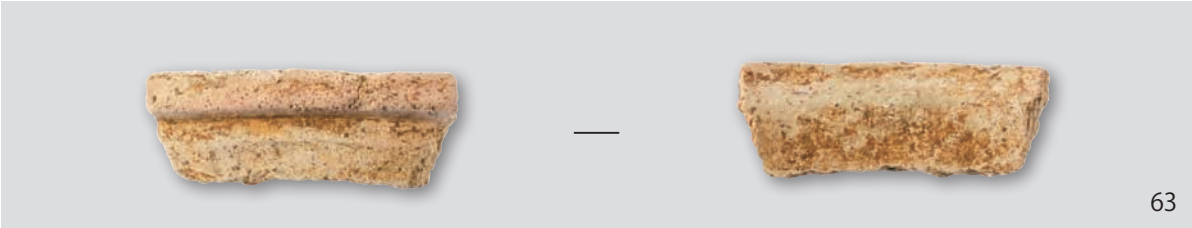
4　5 区 SK 1 完掘状況（北東から）

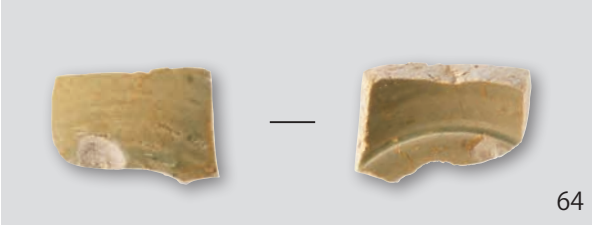
5　5 区 SD 1 完掘状況（南東から）

6　5 区 SD 1 完掘状況（西から）

1　5区出土遺物（1）

図版 33





1　5区出土遺物（2）

写 真 図 版
（川 東 遺 跡）

遺跡遠景（北東から）

1　遺跡遠景（東から）

2　川東遺跡と土井敷遺跡（真上から、上が北）

1　遺跡全景（真上から、上が北）

2　遺跡全景（東から）

図版 36

1　１区全景（真上から、上が北）

2　２Ａ区全景（真上から、上が北東）

1　１区調査後（東から）

2　１区調査後（西から）

3　１区中央部調査後（南から）

図版 38

1　1区西壁土層断面（東から）

2　1区南壁土層断面（北から）

3　1区 SP20 土層断面（北から）

4　1・2区出土遺物

1　２Ａ区調査後（南から）

2　２Ａ区南側調査後（北から）

3　２Ａ区北側調査後（南から）

2　２Ａ区北側調査後（北西から）

図版 40

1　２Ａ区北東壁土層断面（北西から）

2　２Ａ区北東壁土層断面（南から）

1　２Ａ区北西部遺構完掘状況（北西から）

2　２Ａ区 SK ７完掘状況（南西から）

図版 42

1　２Ａ区 SK ７土層断面（南西から）

2　２Ａ区 SP13 根石出土状況（南東から）

3　２Ａ区 SP ８根石出土状況（東から）

1　２Ａ区 SP32 土器出土状況（南西から）

2　２Ａ区 SP58 土器出土状況（南東から）

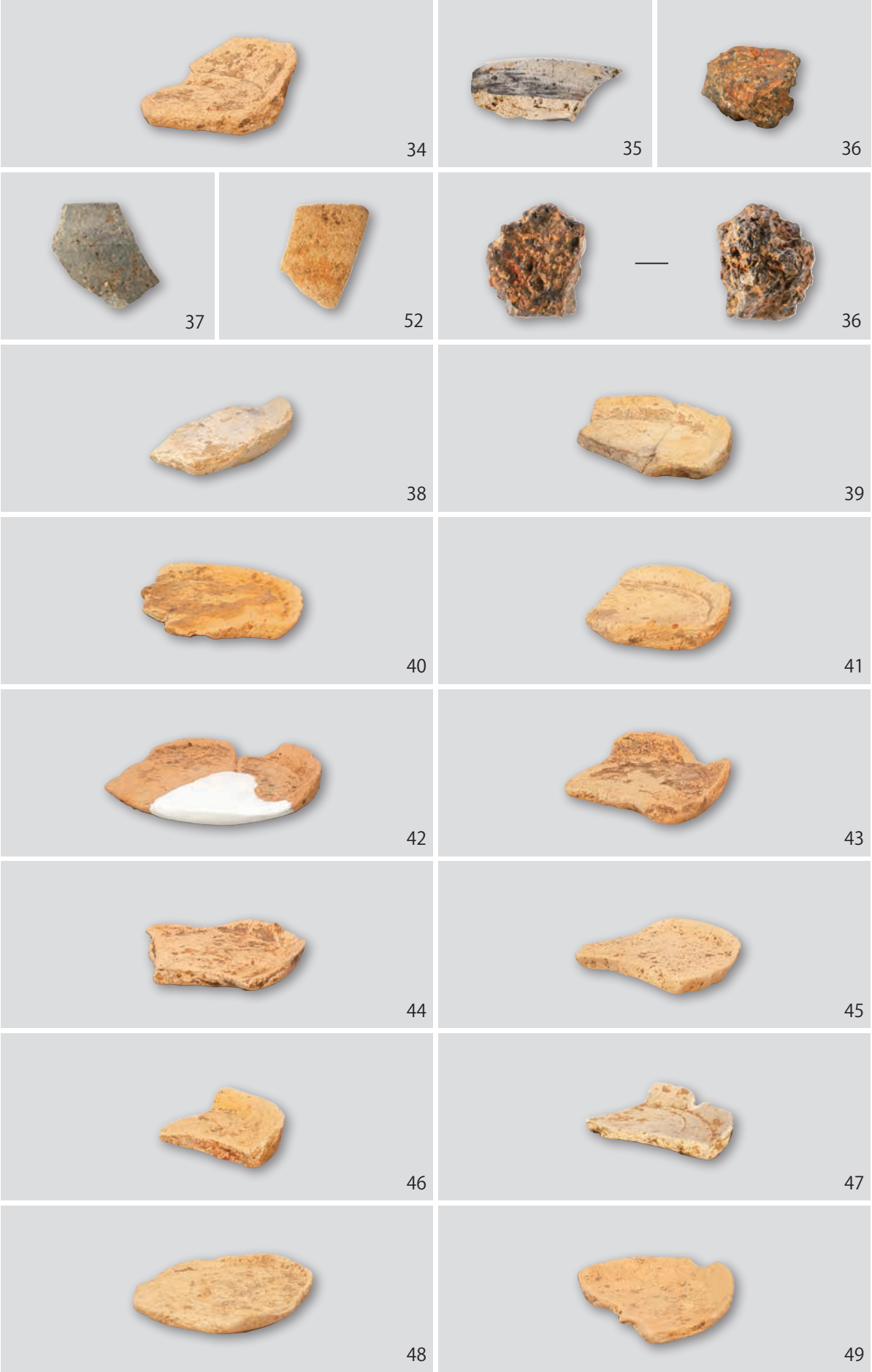
3　２Ａ区 SP58 根石出土状況（南東から）

図版 44

1　2 A区出土遺物（1）

1　２Ａ区出土遺物（２）

図版 46



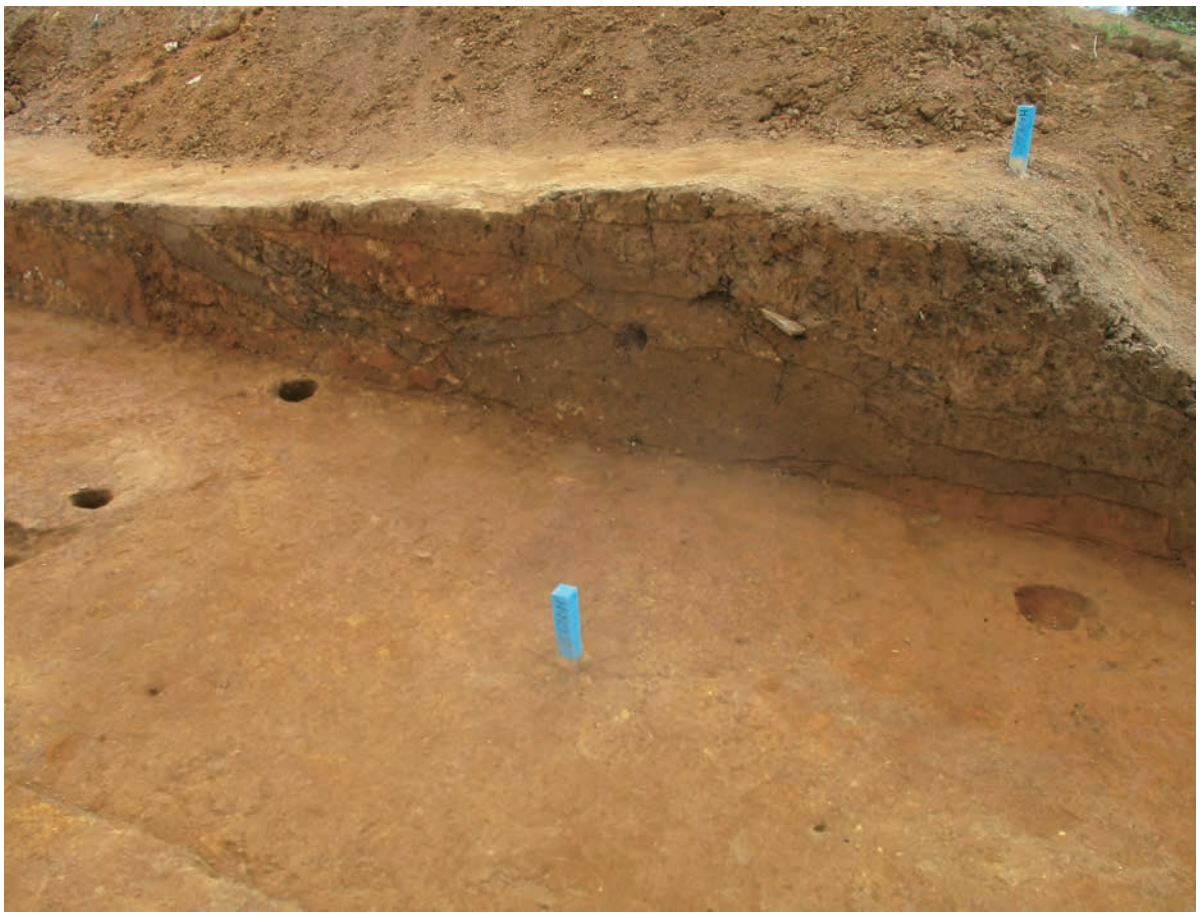
1　2 A区出土遺物（3）

1　2 A区出土遺物（4）

図版 48

1　２Ｂ区調査後（南から）

2　２Ｂ区調査後（北東から）



2　２Ｂ区西壁土層断面（北東から）

1　２Ｂ区 SP13 土器出土状況（北から）

2　３区調査後（南から）

3　３区調査後（北から）

図版 50

61

62

63

64

65

66

67

68

69

72

70

71

73

73

1　２Ｂ区出土遺物

写 真 図 版
（土井敷遺跡）

遺跡全景（南西から）

1　遺跡全景（東から）

2　遺跡全景（南から）

1　遺跡全景（真上から、上が北）

2　１区全景（真上から、上が東）

図版 53

1　１区調査後（南西から）

2　１区調査後（北から）

1　1 区調査後（南東から）

2　1 区東側調査後（南から）

3　1 区 SP96 根石出土状況（西から）

4　1 区 SP149 土器出土状況（南から）

5　1 区 SP149 土器出土状況（東から）

図版 55

1　２区調査後（北から）

2　２区調査後（南から）

3　２区調査後（東から）

4　２区東壁土層断面（南西から）①

5　２区東壁土層断面（南西から）②

1　２区 SK １・SK ２完掘状況（東から）

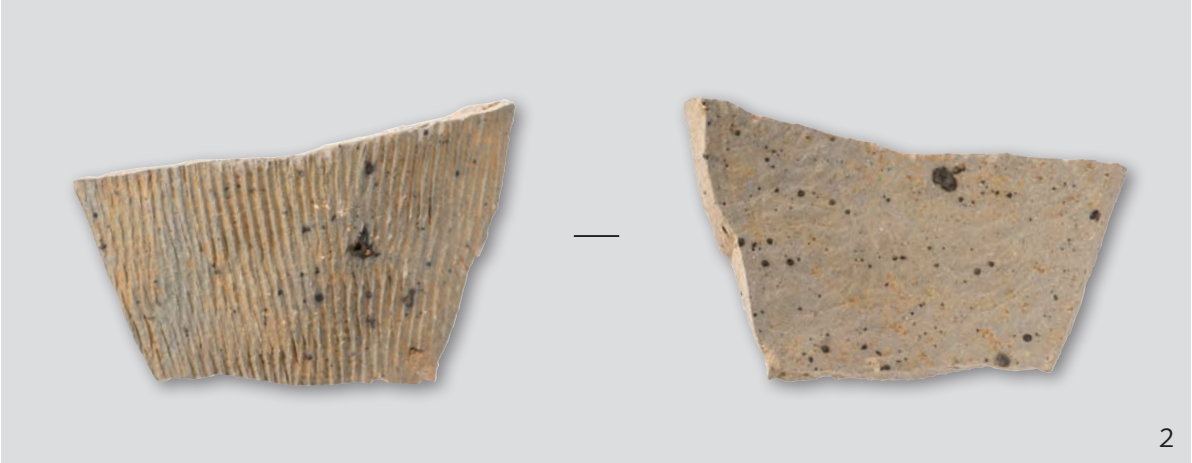
2　２区 SK １土層断面（西から）

3　２区 SK １完掘状況（東から）

4　２区 SK １・SK ２完掘状況（西から）

5　２区 SK １完掘状況（西から）

図版 57



1　1・2区出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ほりのうちいせき　かわひがしいせき　どいしきいせき	
書名	堀の内遺跡　川東遺跡　土井敷遺跡	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	
シリーズ番号	第106集	
編集著者名	岡田裕之　森田孝一　竹内麻美	山根謙二
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	美祢市教育委員会
所在地	〒753-0073	〒754-0511
	山口県山口市春日町3番22号	山口県美祢市秋芳町秋吉5353番1号
	TEL 083-923-1060	TEL 0837-62-1921
発行年月日	西暦2020年3月24日（令和2年3月24日）	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堀の内遺跡（ほりのうちいせき）	山口県（やまぐちけん） 美祢市（みねし）	35213		34°19′60″	131°27′88″	20190621 ～ 20191129	800㎡	ほ場整備
川東遺跡（かわひがしいせき）	秋芳町（しゅうほうちょう）			34°20′01″	131°28′39″		420㎡	
土井敷遺跡（どいしきいせき）	岩永本郷（いわながほんごう）			34°20′14″	131°28′34″		870㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堀の内遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	竪穴建物　4棟 掘立柱建物　2棟 井戸　2基 土坑　8基 溝　7条 柱穴　約650個	弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、陶器、土製品、瓦、石器	堀の内遺跡では、弥生時代中期及び古墳時代後期の竪穴建物、中世前期の掘立柱建物のほか、木炭焼成抗等を検出した。 川東遺跡では、古代から中世にかけての柱穴等を検出したほか、冶金関連遺物や「奈良火鉢」が出土した。 土井敷遺跡では、粉青沙器が出土した。
川東遺跡	集落	古代 中世	土坑　14基 溝　5条 柱穴　122個	須恵器、土師器、瓦質土器、輸入陶磁器、石器、冶金関連遺物	
土井敷遺跡	集落	古代 中世 近世	土坑　17基 柱穴　約240個	須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、石器	

要約	堀の内遺跡は、弥生時代中期及び古墳時代後半期の竪穴建物、古代・中世の溝、中世の掘立柱建物、近世の井戸等が検出された。遺物は、弥生土器、石鏃や磨石、須恵器、土師器、中国産の輸入陶磁器、瓦等を出土した。この地では、弥生時代から古墳時代にかけて集落が営まれたこと、中世には、輸入陶磁器等の高級品をもつ地元有力者が存在したことが明らかとなった。 川東遺跡は、古代から中世にかけての柱穴や土坑等が検出された。そのうち、1個の柱穴からは、土師器の皿が複数枚入れられた状態で出土した。地鎮等、建物と関わる祭祀や儀礼を執り行ったと考えられる。その他、中国産の輸入陶磁器のほか、鞴羽口や鉱滓等の冶金関連遺物が出土した。この地で、集落を営む人々の中に、冶金に携わる人も存在したことが明らかとなった。 土井敷遺跡は、古代から中世にかけての柱穴や土坑等が検出された。遺物は、弥生時代の敲石、韓半島産の粉青沙器片等が出土した。

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第106集

堀の内遺跡　川東遺跡　土井敷遺跡

2020年3月24日

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口県山口市春日町3番22号
美祢市教育委員会
〒754-0511　山口県美祢市秋芳町秋吉5353番1号

印　　刷　瞬報社写真印刷株式会社
〒752-0927　山口県下関市長府扇町 9番50号